

坪井遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ)



2012.12

高 知 県 教 育 委 員 会
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

坪井遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ)

2012.12

高 知 県 教 育 委 員 会
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

坪井遺跡が所在する夜須町は、物部川左岸にある香南市の東端に位置しています。香南市夜須町は古くから開かれた土地であり、古くは昭和34年に有舌尖頭器が表採されている手結遺跡から各地域に存在する中世の五輪塔群まで、各時代にわたり多くの遺跡が存在しています。また、野中兼山によって開削された日本最古の掘り込み港である手結港など文化的遺産が残る地域でもあります。

本書は平成18年度に調査を実施した高規格道路南国安芸道路関連の坪井遺跡の報告書です。南国安芸道路関連で夜須町内において遺跡の発掘調査が実施されたのは口槇ヶ谷遺跡について2例目となり、当地域の歴史が序々に明らかになってきました。本遺跡からは弥生時代から江戸時代にかけての遺構と遺物が確認されています。本遺跡の調査成果は口槇ヶ谷遺跡とともに香南市夜須町の歴史を紐解く貴重な資料であり、地域の歴史を考える貴重な遺産として活用して頂きたいと考えております。

最後に本遺跡の調査にあたり多大なご理解とご協力を頂いた国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、地元関係者の方々、発掘作業・整理作業に従事して頂いた作業員の皆様には心よりお礼申し上げます。

平成24年12月

公益財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 森田尚宏

例言

1. 本書は南国安芸道路の建設に伴い、平成18年度に実施した坪井遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）が発掘調査を実施した。
3. 坪井遺跡は高知県香南市夜須町に所在する弥生時代から近世にかけての複合遺跡で、古墳時代の集落跡や古代の掘立柱建物群などが確認されている。発掘調査は工程上4区に分けて実施し、発掘調査延べ面積は2,350㎡であった。
4. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成17年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 川村寿雄

総務：同次長兼総務課長 湯浅文彦, 同主任 池野かおり, 同主幹 長谷川明生

調査総括：同調査課長 森田尚宏

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久, 同専門調査員 井上昌紀, 同調査員 下村裕, 技術補助員 宮地啓介, 測量補助員 畝川雅行

事務補助員：福留雅子, 濱田可奈

平成18年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 川島博海

総務：同次長 森田尚宏, 同総務課長 戸梶友昭, 同主任 池野かおり

調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久

調査担当：同調査第四班長 藤方正治, 同専門調査員 鍵山真一, 同調査員 下村裕, 技術補助員 宮地啓介, 測量補助員 畝川雅行

事務補助員：濱田可奈

平成24年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚宏

総務：同次長 嶋崎るり子, 同総務課長 里見敦典, 同主任 黒岩千恵

調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久

調査担当：同調査員 下村裕

事務補助員：友永可奈, 廣内美登利

5. 本書の執筆と編集は下村が行い、現場写真は鍵山・下村が撮影し、遺物写真は下村が撮影した。また、遺物観察表については整理作業員の方に指定した設定で変換作成して頂いた。
6. 遺構についてはST（竪穴建物跡）、SB（掘立柱建物跡）、SK（土坑）、SD（溝跡）、SR（自然流路）、SU（畝状遺構）、P（柱穴）で表記した。掘立柱建物跡の一部については模式図(S=1/100)を掲載している。また、掲載している遺構平面図の縮尺はそれぞれに記しており、方位Nは世界測地系のGNである。
7. 遺物については原則として縮尺1/3で掲載し、一部の遺物については縮尺を変えているが、各挿図にはスケールを表記している。また、遺物番号は通し番号とし挿図と図版の遺物番号は一致している。

例言

8. 現地調査及び報告書作成をするにあたっては、下記の方々のご指導及び貴重なご教示、ご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。

趙哲済氏(大阪市博物館協会)、公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏

9. 調査にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所のご協力を頂いた。また、坪井地区総代をはじめ地元住民の方々に遺跡に対するご理解とご協力を頂き、厚く感謝の意を表したい。

10. 発掘調査及び整理作業については、下記の方々のご協力を頂いた。

発掘調査

植田秀夫, 植田和子, 上田豊, 加治正一, 加治宣子, 加治正敏, 上屋福美, 川野孝典, 川村正広, 小松清一, 小松弼, 小松悠悦, 島村雄二, 竹崎芳子, 田所千治, 田村明, 田村美賛子, 畠中浩子, 畑山緑, 溝渕進一郎

上記の方々には酷暑・酷寒のなか、労を厭わず現場作業に従事して頂いた。記して感謝の意を表したい。

整理作業

中西純子, 内村富紀, 岩貞泰代, 横山めぐみ, 黒岩佳子, 川添明美, 澤田美弥, 西山麻美, 久家朋子, 若江紗映, 西内広美

上記の方々には整理作業を担当して頂いた。記して感謝の意を表したい。

11. 出土遺物は「06-12YT」と注記し、高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 序章	1
1. はじめに	1
2. 調査の契機と経過	1
(1) 契機と経過	1
(2) 試掘確認調査	3
(3) 調査の方法	3
3. 遺跡の地理的・歴史的環境	5
(1) 地理的環境	5
(2) 歴史的環境	6
第Ⅱ章 調査の概要	7
1. 調査の経過	7
(1) 調査の経過	7
(2) 調査日誌抄	7
2. 調査区の概要	8
(1) I区	9
(2) II区	10
(3) III区	12
(4) IV区	20
第Ⅲ章 遺構と遺物	31
1. I区	31
(1) 弥生時代	31
(2) 古墳時代	32
(3) 近世	32
2. II区	33
(1) 弥生時代	33
(2) 古墳時代	34
(3) 近世	38
3. III区	38
(1) 古墳時代	38
(2) 古代	45
(3) 中世	48
4. IV区	55
(1) 古代	55

挿図目次

第Ⅳ章 自然科学分析	57
1. はじめに	57
2. 試料	57
3. 分析方法	57
(1) 放射性炭素年代測定	57
(2) 花粉分析	58
(3) 植物珪酸体分析	60
(4) 樹種同定	60
(5) 粒度分析	60
4. 結果	61
(1) 放射性炭素年代測定	61
(2) 花粉分析	61
(3) 植物珪酸体分析	63
(4) 樹種同定	65
(5) 粒度分析	66
5. 考察	66
(1) Ⅱ区の堆積環境変遷と地形発達	66
(2) 古植生	70
(3) SR-1放棄流路内の木材	72
6. 小結	72
第Ⅴ章 考察	75
1. 弥生時代	75
2. 古墳時代	75
3. 古代	75
4. 中世	76
5. まとめ	76
遺物観察表	77
遺構計測表	91

挿図目次

図1-1 坪井遺跡位置図	1
図1-2 試掘トレンチ配置図(S=1/2,500)	2
図1-3 調査区配置図(S=1/2,500)	4
図1-4 周辺の遺跡分布図(S=1/25,000)	5

図2-1	I区北壁セクション図	9
図2-2	第Ⅲ層出土遺物実測図	10
図2-3	Ⅱ区北壁セクション図	11
図2-4	第Ⅲ層出土遺物実測図	12
図2-5	Ⅲ区中央バンクセクション図	13
図2-6	第Ⅻ層出土遺物実測図	14
図2-7	第ⅩⅤ層出土遺物実測図1	15
図2-8	第ⅩⅤ層出土遺物実測図2	16
図2-9	第ⅩⅤ層出土遺物実測図3	16
図2-10	第ⅩⅤ層出土遺物実測図4	17
図2-11	第ⅩⅤ層出土遺物実測図5	18
図2-12	第ⅩⅤ層出土遺物実測図6	18
図2-13	第ⅩⅧ層出土遺物実測図	19
図2-14	Ⅳ区中央バンクセクション図	20
図2-15	第Ⅳ層出土遺物実測図1	21
図2-16	第Ⅳ層出土遺物実測図2	22
図2-17	第Ⅴ層出土遺物実測図1	23
図2-18	第Ⅴ層出土遺物実測図2	23
図2-19	第Ⅴ層出土遺物実測図3	24
図2-20	第Ⅴ層出土遺物実測図4	25
図2-21	第Ⅴ層出土遺物実測図5	26
図2-22	第Ⅴ層出土遺物実測図6	27
図2-23	第Ⅴ層出土遺物実測図7	28
図2-24	第Ⅵ層出土遺物実測図1	29
図2-25	第Ⅵ層出土遺物実測図2	29
図2-26	第Ⅵ層出土遺物実測図3	30
図3-1	I区遺構平面図(S=1/250)	31
図3-2	SR-1	32
図3-3	SK-3	32
図3-4	Ⅱ区遺構平面図_弥生時代(S=1/250)	33
図3-5	SR-1	34
図3-6	SR-1出土遺物実測図	34
図3-7	Ⅱ区遺構平面図_古墳時代・近世(S=1/250)	35
図3-8	SK-1	35
図3-9	SK-1遺物出土状態	36
図3-10	SD-1	36
図3-11	SD-2・3	36
図3-12	SK-1, SD-1・2, P-1出土遺物実測図	37

挿図目次

図3-13	SU-1	38
図3-14	SU-1出土遺物実測図	38
図3-15	Ⅲ区遺構平面図(S=1/250)	39
図3-16	ST-1	40
図3-17	ST-1出土遺物実測図	41
図3-18	ST-2	42
図3-19	ST-3	42
図3-20	ST-3出土遺物実測図	43
図3-21	ST-4	43
図3-22	ST-4出土遺物実測図	44
図3-23	SK-1	45
図3-24	SK-2	45
図3-25	SK-2出土遺物実測図	45
図3-26	SB-1	46
図3-27	SB-2	46
図3-28	SB-2出土遺物実測図	46
図3-29	SB-3	47
図3-30	SB-4	47
図3-31	P-1・2出土遺物実測図	48
図3-32	SB-5	48
図3-33	SB-5・6出土遺物実測図	49
図3-34	SB-6	49
図3-35	SK-5	50
図3-36	SK-7	50
図3-37	SK-9	50
図3-38	SK-9遺物出土状態	51
図3-39	SK-9・14出土遺物実測図	51
図3-40	SK-17	52
図3-41	SD-1	52
図3-42	SD-5	52
図3-43	P-3～8出土遺物実測図	54
図3-44	Ⅳ区遺構平面図	55
図3-45	SK-1	56
図3-46	SK-3出土遺物実測図	56
図3-47	SD-1	56
図4-1	調査地点位置図	57
図4-2	坪井遺跡周辺の地形分類図	58
図4-3	Ⅱ区北壁断面図の柱状模式図及び分析試料採取位置並びにSR-1遺構配置図	59

図4-4	花粉化石群集の層位分布	64
図4-5	植物珪酸体含量	65
図4-6	粒度分析結果	67
図4-7	三角ダイアグラム(粒度分析結果)	68
図4-8	坪井遺跡周辺地形分類図	70

表目次

表1-1	周辺の遺跡地名表	5
表4-1	放射性炭素年代測定結果	61
表4-2	暦年較正結果	61
表4-3	花粉分析結果1	62
表4-4	花粉分析結果2	63
表4-5	植物珪酸体含量	64
表4-6	樹種同定結果	66
表4-7	坪井遺跡の粒度組成1	66
表4-8	坪井遺跡の粒度組成2	66
表4-9	坪井遺跡の粒度組成解析結果	67

遺物観察表目次

遺物観察表1	79
遺物観察表2	80
遺物観察表3	81
遺物観察表4	82
遺物観察表5	83
遺物観察表6	84
遺物観察表7	85
遺物観察表8	86
遺物観察表9	87
遺物観察表10	88
遺物観察表11	89

遺構計測表目次

遺構計測表1	93
遺構計測表2	93
遺構計測表3	93

図版目次

遺構計測表4.....	94
遺構計測表5.....	94
遺構計測表6.....	94
遺構計測表7.....	94

写真目次

写真2-1 発掘調査風景.....	7
写真2-2 発掘調査風景.....	8

図版目次

図版 1 調査前全景(南より) 東壁セクション(南西より)	図版 11 Ⅲ-N区 遺構検出状態(東より) Ⅲ-N区 遺構完掘状態(東より)
図版 2 東壁セクション(西より) 遺構検出状態(南より)	図版 12 ST-1 検出状態(西より), ST-1 完掘 状態(西より), ST-1 遺物出土状態(南 より), ST-2 完掘状態(東より), ST- 3 検出状態(北より), ST-3 完掘状態(北 より), ST-4 検出状態(西より), ST- 4 遺物出土状態(西より)
図版 3 SR-1バンクセクション(南より) SK-1バンクセクション(南より)	図版 13 ST-4 完掘状態(西より), SB-1・2 検 出状態(西より), SB-1 完掘状態(南よ り), SB-3 検出状態(西より), SB-3 完掘状態(南より), SB-5 完掘状態(北 より), SB-6 完掘状態(西より), SK- 9 遺物出土状態(西より)
図版 4 SK-3バンクセクション(南より) 遺構完掘状態(南より)	図版 14 ST-1バンクセクション(北西より), ST- 1 土師器(196)出土状態, ST-1 土師器 (197)出土状態, ST-1 土師器(204)出 土状態, ST-1 土師器(205)出土状態, ST-1 土師器(206)出土状態, ST-1 石製品(209)出土状態, ST-3バンク セクション(西より)
図版 5 調査前全景(南西より) 北壁セクション(南より)	図版 15 ST-3 土師器(210)出土状態, ST-4 バンクセクション(北西より), ST-4 土師器(215・219)出土状態, ST-4 土 師器(216・224)出土状態, ST-4 土師 器(229)出土状態, SB-4 土師質土器
図版 6 遺構検出状態(南西より) 遺構完掘状態(南西より)	
図版 7 SR-1 検出状態(北より) SR-1 完掘状態(南西より)	
図版 8 SR-1バンクセクション(南より), SR -1 弥生土器(183)出土状態, SK-1 土 師器(185・187~190)出土状態, SK-1 土師器(186)出土状態, SD-1バンク セクション(南西より), SD-1 土師器 (191)出土状態, SD-2・3バンクセク ション(南より), SD-2 土師器(193)出 土状態	
図版 9 調査前全景(南西より) Ⅲ-S区 北壁セクション(南より)	
図版 10 Ⅲ-S区 遺構検出状態(東より) Ⅲ-S区 遺構完掘状態(東より)	

- (238)出土状態, SB-5土師質土器(242)出土状態, SB-6土師質土器(245)出土状態
- 図版16 SK-9土師質土器(246)出土状態, SK-9土師質土器(248)出土状態, SK-17バンクセクション(西より), SD-1バンクセクション(南より), P-4土師質土器(252)出土状態, P-6土師質土器(254)出土状態, P-6土師質土器(256)出土状態, P-7土師質土器(257)出土状態
- 図版17 調査前全景(東より)
北壁セクション(南より)
- 図版18 IV-W区 遺構検出状態(北より)
IV-W区 遺構完掘状態(北より)
- 図版19 IV-E区 遺構検出状態(西より)
IV-E区 遺構完掘状態(西より)
- 図版20 第V層 須恵器(109)出土状態, 第V層 須恵器(121)出土状態, 第V層 須恵器(123)出土状態, 第V層 須恵器(124)出土状態, 第V層 土製品(156)出土状態, 第VI層 土師質土器(172)出土状態, SK-1バンクセクション(南より), SD-1バンクセクション(南より)
- 図版21 須恵器(杯)
緑釉陶器(杯)
- 図版22 須恵器(長頸壺)
土師器(甕)
- 図版23 土師器(甕), 須恵器(高杯・転用硯), 土師質土器(鍋), 緑釉陶器(皿), 青磁(碗)
- 図版24 土師器(高杯), 須恵器(高杯・転用硯), 瓦(平瓦)
- 図版25 弥生土器(鉢), 土師器(高杯・碗)
- 図版26 土師器(壺・鉢・高杯), 瓦質土器(鍋)
- 図版27 土師器(高杯)
- 図版28 土師器(高杯)
- 図版29 土師器(高杯・ミニチュア), 須恵器(杯・壺)
- 図版30 土師器(壺・高杯), 須恵器(壺), 土師質土器(杯・碗)
- 図版31 須恵器(杯蓋・杯・皿), 土師質土器(杯・碗), 近世陶器(碗)
- 図版32 須恵器(杯蓋・杯・壺蓋・壺), 土師質土器(碗)
- 図版33 土師器(高杯), 須恵器(杯蓋・杯・皿・高杯), 土師質土器(碗・小皿), 青磁(碗)
- 図版34 土師質土器(碗・小皿)
- 図版35 花粉化石
- 図版36 植物珪酸体
- 図版37 木材

第 I 章 序章

1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から業務委託を受け、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）が平成17年度に実施した高知南国道路外1件埋蔵文化財発掘調査のうち南国安芸道路埋蔵文化財試掘確認調査及びその結果を受け平成18年度に実施した高知南国道路外1件埋蔵文化財発掘調査のうち坪井遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。

この調査は、国土交通省（四国地方整備局土佐国道事務所）が計画し、実施している一般国道南国安芸道路建設工事に伴い、工事によって影響を受ける遺跡（埋蔵文化財）について事前の発掘調査を行ったうえで出土遺物等の整理作業を行い、遺跡の記録保存を図ることを目的としている。

坪井遺跡は平成17年度に実施した事前の試掘確認調査によって新たに発見された遺跡で、本書で報告するのは平成18年度に行った坪井遺跡の発掘調査の報告である。

本遺跡は夜須川右岸に存在する氾濫原から丘陵にかけて立地する弥生時代から近世までの複合遺跡で、古墳時代の集落跡や平安時代の官衙関連遺構、鎌倉時代の集落跡が確認されている。

2. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

南国安芸道路は、高知市と安芸市間36kmを結ぶ一般国道55号の自動車専用道路である高知東部自動車道の一環として安芸地方生活圏と高知中央生活圏の連携強化を図るほか、四国横断自動車道と接続し広域交通ネットワークの形成を目的とする道路で、昭和62年には国の高規格幹線道路網計画に組み込まれている。高知東部自動車道は延長36kmと長く、高知県内で最も周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が集中する高知平野を横断する路線であることから大規模で長期的な発掘調査が予想された。埋蔵文化財について具体的な調整を開始したのは平成15年度からであり、まず埋蔵文化財の取り扱いについて国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会が調整を行った。その結果、当面の工事予定区域については周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）があるものこれまで発掘調査が実施されておらず、遺構の遺存状態が全く不明であるため土地の買収が完了した箇所の試掘確認調査を財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）が順次実施した。

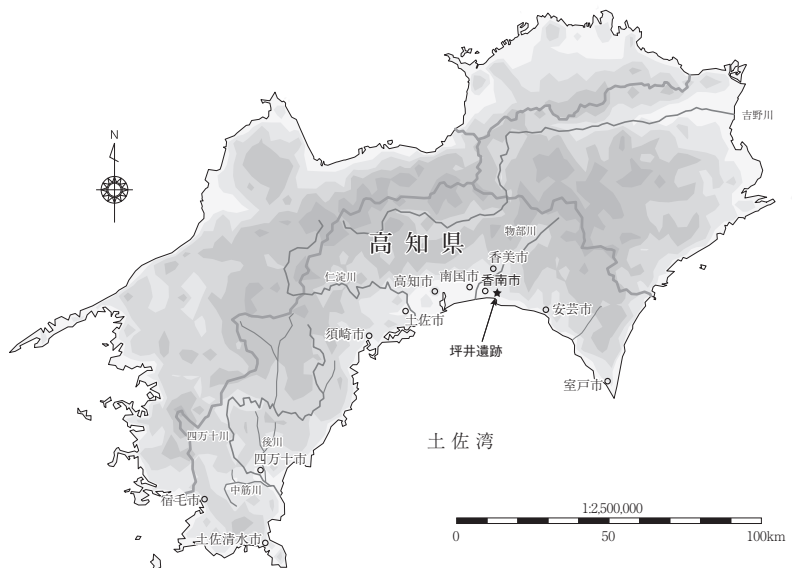


図1-1 坪井遺跡位置図

2. 調査の契機と経過 (1) 契機と経過



図1-2 試掘トレンチ配置図(S=1/2,500)

平成17年度の南国安芸道路関係では夜須川右岸の坪井地区が対象となり試掘確認調査を実施した結果、調査対象地中央部で3カ所、調査対象地西側で4カ所のトレンチから遺構が検出され、当該箇所が本発掘調査の必要があると判断された。本遺跡はこの試掘確認調査の結果初めて確認された遺跡であり、地名をとって「坪井遺跡」と命名された。この結果を受け、平成18年度に本発掘調査を実施することとなり、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）が国土交通省四国地方整備局と業務委託を締結した高知県教育委員会からの委託を受け本発掘調査を実施した。

平成15年度以降に実施された試掘確認調査によって南国安芸道路の路線内で新たに確認された周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）は、本遺跡のほか口榎ヶ谷遺跡（南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ）や花宴遺跡（南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ）、徳王子前島遺跡（南国安芸道路建

設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ), 徳王子大崎遺跡, 徳王子広本遺跡であり, 順次本発掘調査が実施された。

(2) 試掘確認調査

① 対象区域の状況

試掘確認調査は夜須川右岸の氾濫原及び丘陵部上に20箇所のトレンチ(5×5m)を任意に設定し, 平成17年8月29日から9月9日と同年10月20日から10月25日まで18日間行った。掘削作業は機械力(ユンボ)と人力, 遺構検出作業は人力で行った。また, 遺構については検出に留めた。

この試掘確認調査では氾濫原上に存在する微高地及び丘陵部上に設定したトレンチにおいて遺物包含層を確認した。この遺物包含層からは土師器・須恵器・土師質土器など古代から中世にかけての遺物が出土しており, 当該期と考えられる土坑・溝跡・柱穴が検出されている。なお, 調査対象区域西端は後世の地形改変により遺構は完全に削平されたと考えられ, 2次堆積と考えられる周辺の斜面堆積層からは古代から中世にかけての遺物が大量に出土している。この試掘確認調査により新たな遺跡として坪井遺跡が新設され, 丘陵部を中心に古代から中世にかけての遺構が遺存していることが判明した。また, 氾濫原に設定したトレンチでは, 流れ込みと考えられる遺物が出土するのみで遺構は検出されなかった。

② 遺跡の概要

坪井遺跡は平成17年度に実施された事前の試掘確認調査で新たに確認された遺跡で, 弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が確認される複合遺跡となり, 大字から遺跡名が付けられた。

本遺跡は夜須川右岸に所在し北側から派生した丘陵の裾部を中心に立地しており, 周辺の丘陵部にも同様の遺構が残存する可能性が考えられる。弥生時代では調査対象区域東側において自然流路が検出されている。古墳時代では調査対象区域西側の緩斜面上で方形の竪穴建物跡が確認されている。この竪穴建物跡は計4軒検出されており, 当該期の集落を構成するものと考えられる。なお, 後世の地形改変により調査対象区域西端では当該期の遺構は完全に削平されたとみられ, 集落域の大部分は消滅したと考えられる。

古代では隅丸方形の掘方を持つ柱穴で構成される掘立柱建物跡が検出されている。この掘立柱建物跡は計4棟確認されており, そのうち3棟は棟方向が揃っている。このことから, 官衙に関連する施設が一時期本遺跡に存在していたと考えられる。

中世では調査対象区域西側で掘立柱建物跡が2棟検出されており, 当該期の集落が丘陵上を中心に展開していたものとみられる。また, 近世では調査対象区域東側で畝状遺構が確認されており, 氾濫原に存在する微高地を生産域として利用していたことが窺える。

(3) 調査の方法

試掘調査の結果を受けて, 調査対象区域周辺に世界測地系の4級基準点及び4級水準点を設置したうえで調査対象区域周辺の航空写真測量を行い1,000分の1の地形図を作成した。なお, 調査対象区域周辺に設置した基準点には方位標も設定し, 発掘調査に備えた。

測量は世界測地系第4座標系(Ⅳ系)の基準点を使用し, X=60,300m, Y=23,800m(北緯33° 32' 49", 東経133° 45' 13", 真北方向角-0° 08' 25")を原点とし, A~F(100mグリッド:大グリッド)を組み, 調査対象区域内を西から順にアルファベットを配した。100mグリッドの中にはそれぞれのアルファベットを冠する20m(中グリッド:1~25)グリッドを設定し, 調査で使用する4mグリッド(小グリッド:

2. 調査の契機と経過 (3) 調査の方法



図1-3 調査区配置図(S=1/2,500)

1～25)にはA1-1と枝番を付した。なお、遺構図にはグリッド名ではなく座標値を標記している。

調査は試掘確認調査の結果を受けて調査区I～IV区を設定し、主要地方道県道夜須・物部線沿いのI・II区から開始した。その後、I・II区の調査終了後埋め戻しを行ったあと、調査区対象区域西側のIII・IV区の調査を実施した。

堆積層の掘削は原則として遺物包含層直上までは機械力を導入し、遺物包含層以下は人力掘削を実施した。なお、遺物包含層でも遺物量が少ない場合などは作業効率を考慮し、機械力で遺構検出を行った。また、遺跡の成り立ち等を明らかにするために地質学や土壌学等関連分野の協力を得て、古環境の復原にも重点を置いた。

3. 遺跡の地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

坪井遺跡の所在する高知県香南市は平成18年3月1日に、香南5町村(赤岡町, 香我美町, 野市町, 夜須町, 吉川村)が合併して誕生した新しい市である。本市は東西約20km, 南北約15km, 面積126.49km², 人口34,490人(平成24年8月末現在)で, 東は安芸市・安芸郡芸西村, 西は南国市, 北は香美市に接しており, 高知県の中央部を南西方向に流れて土佐湾に注ぐ全長約71km, 総流域面積468km²の一級河川である物部川の左岸に位置している。地理的にみると北側にある標高約300～600mの山地と南側の土佐湾に挟まれて南北幅約2.3km, 東西幅約2.8kmの平野部があり, 旧夜須町には夜須川沿いに小規模な平野部が存在している。北側の山地と南側の土佐湾に挟まれた平野部の大部分は物部川左岸の野市台地と香宗川の氾濫によって生じた氾濫原性低湿地で形成されており, 香宗川の支流である山北川の上流部には小規模な平野部が点在している。

坪井遺跡が所在する夜須町の地形は北部の山地と南部の丘陵及び低地に分けられる。北部の山地は長者が森を主峰にした600～700mの山地で構成されており, 南部の丘陵及び低地はほぼ並行し



図1-4 周辺の遺跡分布図(S=1/25,000)

表1-1 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	坪井遺跡	弥生～近世	6	徳善城跡	中世	11	中村遺跡	中世・近世
2	徳王子大崎遺跡	弥生・中世	7	クノ丸遺跡	古墳・中世	12	土居山古墳	古墳
3	徳善天皇古墳	古墳	8	姫倉城跡	中世	13	櫛ノ城跡	中世
4	徳王子広本遺跡	弥生～中世	9	西峯城跡	中世	14	下夜須城跡	中世
5	徳王子前島遺跡	弥生～中世	10	加治ヶ山古墳	古墳	15	口槇ヶ谷遺跡	弥生～近世

3. 遺跡の地理的・歴史的環境 (2) 歴史的環境

た東西の山地の間に広がっている。本遺跡は夜須川右岸の氾濫原及び丘陵上に立地しており、夜須町内で確認されている多くの遺跡も夜須川両岸の丘陵沿いに立地している。

(2) 歴史的環境

夜須町内で確認されている遺跡は40箇所であるが、最古の遺物が出土している遺跡は手結遺跡である。昭和34年に地元の中学生在が旧石器時代とみられる古銅輝石安山岩製の有舌尖頭器を発見している。その後、人間の営みが確認されるのは弥生時代後期末になってからで、寺尾遺跡からは弥生土器の他に大型蛤刃石斧や扁平片刃石斧、有茎石鏃などが出土しており、大型の竪穴建物跡も検出されている。

古墳時代にはいと夜須町内にも古墳が築かれるようになり、計3基の古墳が確認されている。いずれも古墳時代後期とみられる横穴式石室古墳で、現在これらの古墳はいずれも後世の土地改変によって残存していない。

古代において夜須町は承和年中(937)に編集された「倭名類聚抄」にみえる香我美郡7郷(大忍・宗部・深淵・山田・岩村・田村・安須)のうち安須郷があてはまり、郷域は地形からみて現在の町域とあまり変わらなかったと考えられている。本遺跡や口槇ヶ谷遺跡では当該期の掘立柱建物跡が検出されており、安須郷に関連する建物跡の可能性が考えられる。その後、律令制のもとで安須郷とよばれた当地域は11世紀ごろに岩清水八幡宮の所有する荘園となり、夜須庄と呼ばれるようになる。この夜須庄は現在の夜須町の南部約3分の1を占める荘園であり、残りの北部3分の2は大忍庄であった。夜須庄の構造及び解体過程については不明であるが、時代の流れの中で、少しずつ解体していったと考えられる。中世後期になると夜須庄は香我美郡を領有した長宗我部氏の支配下に入り、安芸郡を領有した安芸氏と対峙する重要地域として多くの城が築かれている。夜須町内で確認されている城跡は8箇所であるが、特筆される城跡は長宗我部氏の重臣であった吉田備後守重俊の居城尼ヶ森城跡で、当地域で最大の城跡である。詰や切岸などの遺構が良く残存しており当時を偲ばせる。

近世には野中兼山によって手結港の大改修が行われた。小倉弥右衛門(三省)を責任者として慶安3年(1650)築港に着手し、明歴3年(1657)に竣工した手結港はわが国初の本格的な堀り込み港として完成している。明治4年の戸籍法公布に伴う区制の施行によって3区に編成され、明治22年(1889)の町村制施行によって夜須村として成立している。昭和29年(1954)には夜須町と香美郡東川村大字細川・羽尾・沢谷・仲木屋が合併して新しい夜須町が生まれ、平成18年には香美郡5町村(夜須町・赤岡町・香我美町・野市町・吉川村)が合併し、香南市として現在に至っている。

参考文献

『夜須町史』上・下巻 夜須町史編纂委員会 1987年

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査の経過

(1) 調査の経過

坪井遺跡は平成17年度に実施された高知東部自動車道南国安芸道路建設工事に伴う事前の試掘確認調査によって新たに確認された遺跡である。平成17年度の試掘結果を受け、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会の間で本発掘調査について協議を行い、平成18年度後半に本発掘調査を実施することとなった。調査は国土交通省四国地方整備局から高知県教育委員会が業務委託を受け、平成18年4月1日付けで高知県教育委員会と財団法人高知県文化財団(現公益財団法人高知県文化財団)との間で業務委託契約を締結したうえで、本発掘調査を開始した。

(2) 調査日誌抄

- | | | | |
|-------|---|-------|---|
| 10.20 | I区の調査を開始する。安全柵を設置し、重機による表土掘削を開始する。 | 11.17 | I・II区の航空写真測量及びIV-W区で遺物包含層の人力掘削を行う。 |
| 10.23 | 雨天のため現場作業を中止する。 | 11.20 | IV-W区で遺物包含層の人力掘削を行う。 |
| 10.24 | I区で重機による表土掘削を行う。 | 11.21 | 情報交換会のため現場作業を中止する。 |
| 10.25 | I区で重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。 | 11.22 | IV-W区で遺物包含層の人力掘削を行う。 |
| 10.26 | I区の遺構検出作業及び遺構検出写真撮影と並行してII区で重機による表土掘削を行う。 | 11.24 | IV-W区で遺物包含層の人力掘削を行う。 |
| 10.27 | I区の遺構調査と並行してII区で重機による表土掘削を行う。 | 11.27 | IV-W区で遺物包含層の人力掘削を行う。 |
| 10.30 | I区の遺構調査と並行してII区で重機による表土掘削を行う。 | 11.28 | IV-W区で遺物包含層の人力掘削と並行してI・II区の下層確認作業と埋め戻し作業を行う。 |
| 10.31 | I区の遺構調査と並行してII区の遺構検出作業及び遺構検出写真撮影を行う。 | 11.29 | IV-W区で遺物包含層の人力掘削と並行してI・II区の埋め戻し作業を行う。 |
| 11.1 | I・II区の遺構調査を行う。 | 11.30 | IV-W区で遺物包含層の人力掘削と並行してI・II区の埋め戻し作業を行う。 |
| 11.2 | I・II区の遺構調査を行う。 | 12.1 | IV-W区で遺物包含層の人力掘削と並行してI・II区の埋め戻し作業及びIII-S区で重機による表土掘削を行う。 |
| 11.6 | I区及びII区上面の遺構完掘写真撮影と並行してII区下面の遺構調査を行う。 | 12.4 | IV-W区で遺物包含層の人力掘削と並行してIII-S区で重機による表土掘削を行う。 |
| 11.7 | II区下面の遺構調査を行う。 | | |
| 11.8 | II区下面の遺構調査を行う。 | | |
| 11.9 | II区下面の遺構調査を行う。 | | |
| 11.10 | II区下面の遺構調査を行う。 | | |
| 11.13 | II区下面の遺構調査及びIV-W区で重機による表土掘削を行う。 | | |
| 11.14 | II区下面の遺構調査及びIV-W区で重機による表土掘削を行う。 | | |
| 11.15 | IV-W区で遺物包含層の人力掘削を行う。 | | |
| 11.16 | I・II区の清掃作業と並行してIV-W区で遺物包含層の人力掘削を行う。 | | |



写真2-1 発掘調査風景

2. 調査区の概要

- 12.5 IV-W区で遺物包含層の人力掘削と並行してⅢ-S区で重機による表土掘削を行う。
- 12.6 IV-W区の遺構検出写真撮影及び遺構調査に並行してⅢ-S区で重機による表土掘削を行う。
- 12.7 雨天のため現場作業を中止する。
- 12.8 IV-W区の遺構調査と並行してⅢ-S区で重機による表土掘削を行う。
- 12.11 IV-W区の遺構調査と並行してⅢ-S区で遺物包含層の人力掘削を行う。
- 12.12 Ⅲ-S区で遺物包含層の人力掘削を行う。
- 12.13 雨天のため現場作業を中止する。
- 12.14 Ⅲ-S区で遺物包含層の人力掘削を行う。
- 12.15 Ⅲ-S区で遺物包含層の人力掘削と並行して遺構検出作業を行う。
- 12.18 Ⅲ-S区で遺構検出作業及び遺構検出写真撮影後、遺構調査を行う。
- 12.19 Ⅲ-S区で遺構調査を行う。
- 12.20 Ⅲ-S区で遺構調査を行う。
- 12.21 Ⅲ-S区で遺構調査を行う。
- 12.22 Ⅲ-S区で遺構調査を行う。
- 12.23 Ⅲ-S区の遺構調査と並行してⅢ-S区とIV-W区の清掃作業及び遺構完掘写真の撮影を行う。
- 12.25 Ⅲ-S区で航空写真測量を行う。
- 12.26 雨天のため現場作業を中止する。
- 12.27 IV-W区の埋め戻し作業を行う。
- 12.28 Ⅲ-S区の埋め戻し作業を行う。
- 12.29 Ⅲ-S区の埋め戻し作業を行う。
- 1.4 Ⅲ-N区及びIV-E区で重機による表土掘削を行う。
- 1.5 Ⅲ-N区で重機による表土掘削と並行して遺物包含層の人力掘削を行う。
- 1.9 Ⅲ-N区で重機による表土掘削と並行して遺物包含層の人力掘削を行う。
- 1.10 Ⅲ-N区で重機による表土掘削と並行して遺物包含層の人力掘削を行う。
- 1.11 Ⅲ-N区で重機による表土掘削と並行して遺物包含層の人力掘削を行う。
- 1.12 Ⅲ-N区で遺構検出作業及び遺構検出写真の撮影を行う。
- 1.15 Ⅲ-N区の遺構調査と並行してIV-E区で遺物包含層の人力掘削を行う。
- 1.16 Ⅲ-N区の遺構調査と並行してIV-E区で遺物包含層の人力掘削を行う。
- 1.17 Ⅲ-N区の遺構調査と並行してIV-E区で遺物包含層の人力掘削を行う。
- 1.18 Ⅲ-N区の遺構調査と並行してIV-E区で遺物包含層の人力掘削を行う。
- 1.19 Ⅲ-N区の遺構調査と並行してIV-E区の遺構検出写真を撮影する。
- 1.22 Ⅲ-N区の清掃作業と並行してIV-E区の遺構調査を行う。
- 1.23 Ⅲ-N区及びIV-E区の遺構完掘写真撮影並びに航空写真測量を行う。
- 1.25 撤収に向け片付けを行う。
- 1.26 Ⅲ-N区で下層確認調査を行う。
- 1.27 Ⅲ-N区の埋め戻し作業を行う。
- 1.29 Ⅲ-N区の埋め戻し作業を行う。
- 1.30 Ⅲ-N区の埋め戻し作業を行う。
- 1.31 安全柵を撤去し、全ての作業が終了する。



写真2-2 発掘調査風景

2. 調査区の概要

本遺跡は夜須川右岸の氾濫原から丘陵裾部の段丘面上に立地する遺跡で、確認された遺構は弥生時代、古墳時代、古代(奈良～平安時代)、中世(鎌倉～室町時代)、近世(江戸時代)であり、遺構の分布状況が時期によって異なっている。

弥生時代の遺構はI・II区で確認されており、Ⅲ・IV区では検出されていない。Ⅲ・IV区の2次堆

積層から当該期の遺物が出土していることからⅢ・Ⅳ区及びその周辺に集落等が存在していた可能性が考えられるが、近世以降の地形改変によって削平されたとみられる。古墳時代については調査区全域で遺構が確認されている。特に丘陵裾部の段丘面上に設定したⅢ区において竪穴建物跡が4軒検出されており、Ⅲ区を中心に当該期の集落が展開していたと考えられる。

次の古代・中世においてもⅢ区において掘立柱建物跡が検出されており、古墳時代と同様Ⅲ区を中心に古代の官衙関連施設や中世の集落が存在していたとみられる。また、中世には小規模な地形改変が行われたとみられ、斜面部を削り平坦部を造り出したと考えられる。近世以降では調査区全体が耕作地として利用されており、特にⅢ区では丘陵裾部の緩斜面を削り棚田として利用していたと考えられる。その後、近現代には細かく分かれていた棚田を集約し区画を拡大したとみられ、丘陵裾部の段丘面は段状に削平され多くの遺構が消滅したと考えられる。

なお、下層確認調査も含めた調査総面積は2,350㎡であり、出土遺物の総点数は約21,800点を数える。

(1) I区

調査対象区域の東端部南側に位置する東西約24m、南北34mの台形状を呈する調査区で面積は290㎡である。確認された遺構は弥生時代、古墳時代、近世である。本調査区は夜須川右岸に広がる氾濫原内に存在する微高地部分と考えられるが居住域としては不向きであったとみられ、遺構密度は総じて低い。なお、遺構からの出土を含めた出土遺物の総点数は約120点と少なかった。

① 層序

本調査区では後背湿地堆積物に相当するようなシルト・粘土を主体とする堆積層が認められず、砂泥互層や泥質砂層からなる氾濫原堆積物で構成される堆積層上に弥生時代、古墳時代、近世の遺構が確認されている。

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 小礫を含む灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂質シルト層
- 第Ⅱ層 小礫を含む鉄分混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂質シルト層
- 第Ⅲ層 小礫を含む鉄分・炭化物混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂質シルト層
- 第Ⅳ層 マンガン粒を含む鉄分混じりの黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細粒～細粒砂層

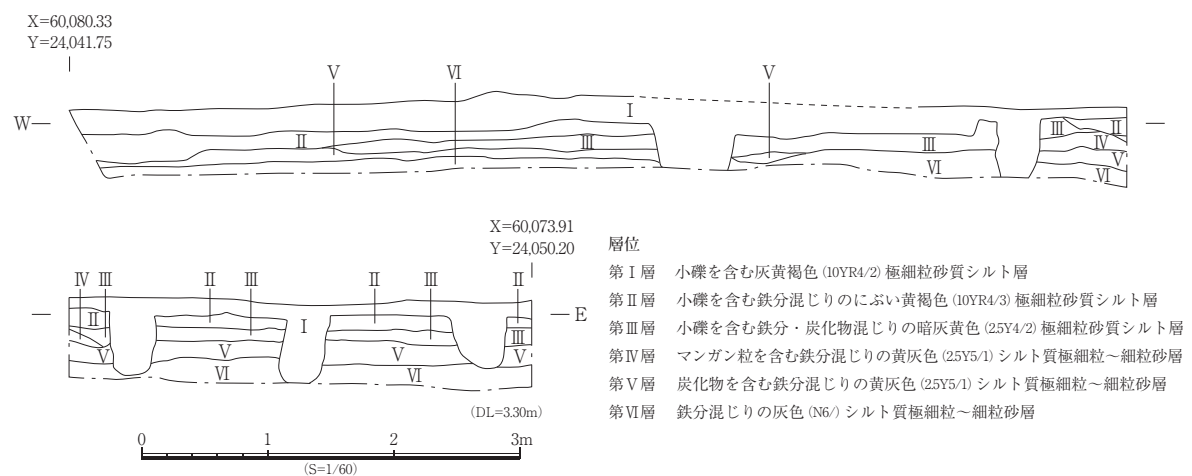


図2-1 I区北壁セクション図

2. 調査区の概要 (2) II区

第V層 炭化物を含む鉄分混じりの黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細粒～細粒砂層

第VI層 鉄分混じりの灰色(N6/)シルト質極細粒～細粒砂層

層位中、遺物包含層は第III層(近世)であり、弥生時代及び古墳時代の明確な遺物包含層は確認されなかった。遺構検出は第VI層上面で行っている。

第I層は現代の耕作層であり、厚さ10～24cmを測る。調査前は水田であった。

第II～III層は旧耕作土で、古代～近世の遺物を含む。厚さ8～25cmを測り、近世以降の耕作土と考えられる。

第IV層は部分的に存在するもので断面台形状を呈し、近世以降の畦畔と考えられる。

第V層は弥生時代から古墳時代の堆積層と考えられるが当該期の遺物出土量は極めて少ない。厚さは8～18cmを測る。

第VI層は自然堆積層で層上部の土壌化が指摘されており、上面で弥生時代と古墳時代の遺構が検出されている。

② 堆積層出土遺物

第III層出土遺物

須恵器(図2-2 1)

1は壺と考えられる口縁部破片で、外面には回転ナデ調整が残り、胎土は精良である。

土師質土器(図2-2 2・3)

2は杯の底部破片で、摩耗が著しく調整は不明である。底部切り離しは回転糸切りと考えられ、胎土は精良である。3は鍋である。口辺部から胴部にかけての破片で、口縁部内面には回転ナデ調整、外面にはヨコナデ調整を施す。胴部外面には指頭圧痕が残り、煤が付着する。胎土は精良である。

近世陶器(図2-2 4)

4は碗の体部から底部にかけての破片で、体部外面には回転ナデ調整、底部外面にはヘラ削りを施す。高台は削り出しと考えられ、見込みには砂目が残る。内面には装飾的な釉垂れがみられ、胎土は精良である。

近世磁器(図2-2 5)

5は碗の底部破片で、見込みには草花文とみられる文様を描く。高台内外面には圏線を描き、高台畳付には施釉しない。

銅製品(図2-2 6)

6は煙管で、吸口のみ残存する。

(2) II区

調査対象区域の東端部北側に位置する東西約30m、南北約33mの方形を呈する調査区で、面積は530㎡である。確認された遺構は弥生時代、古墳時代、近世である。本調査区は夜須川右岸に広がる氾濫原内に存在する微高地部分と考えられるが居住域として

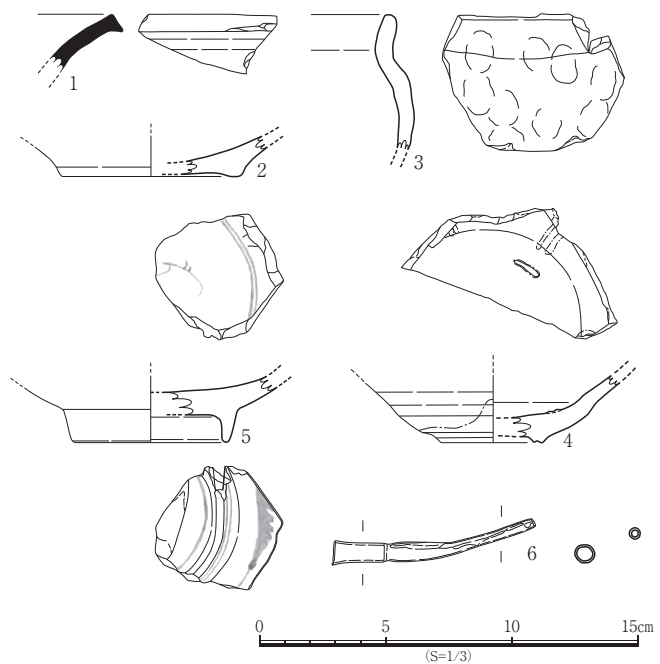


図2-2 第III層出土遺物実測図

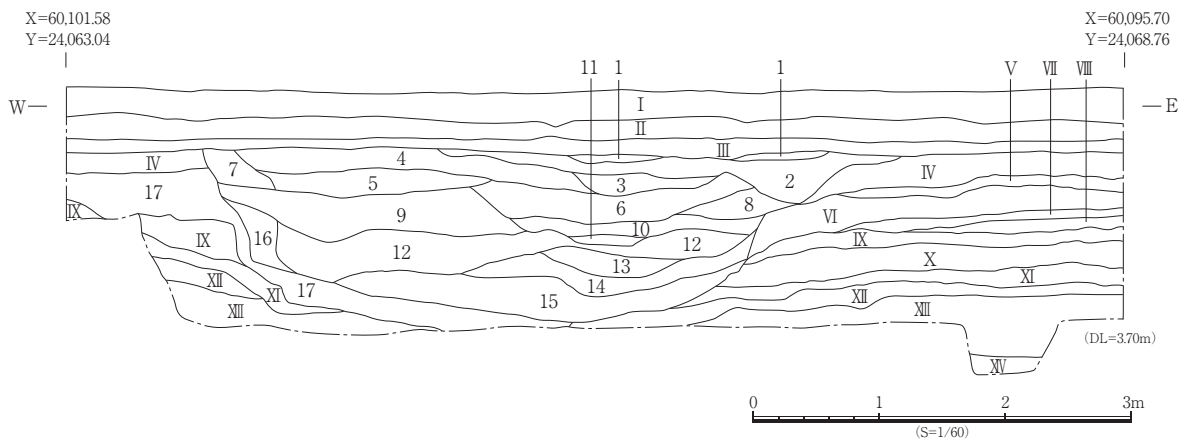
は不向きであったとみられ、遺構密度は総じて低い。なお、遺構からの出土を含めた出土遺物の総点数は約630点と少なかった。

① 層序

本調査区ではⅠ区と同様、後背湿地堆積物に相当するようなシルト・粘土を主体とする堆積層が認められず、砂泥互層や泥質砂層からなる氾濫原堆積物で構成される堆積層上に弥生時代、古墳時代、近世の遺構が確認されている。

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 小礫を含む灰褐色(7.5YR5/2)極細粒～中粒砂質シルト層
- 第Ⅱ層 小礫を含む灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細粒砂層
- 第Ⅲ層 鉄分の沈着がみられる灰黄褐色(10YR5/2)シルト質極細粒砂層
- 第Ⅳ層 鉄分の沈着がみられる黄灰色(2.5Y5/1)極細粒～中粒砂質シルト層
- 第Ⅴ層 炭化物を含む黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細粒～中粒砂層
- 第Ⅵ層 鉄分の沈着がみられ、炭化物を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細粒砂層
- 第Ⅶ層 鉄分の沈着がみられ、炭化物を含む褐灰色(10YR5/1)極細粒～細粒砂質シルト層
- 第Ⅷ層 炭化物を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～中粒砂質シルト層



層位

- 第Ⅰ層 小礫を含む灰褐色(7.5YR5/2)極細粒～中粒砂質シルト層
- 第Ⅱ層 小礫を含む灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細粒砂層
- 第Ⅲ層 鉄分の沈着がみられる灰黄褐色(10YR5/2)シルト質極細粒砂層
- 第Ⅳ層 鉄分の沈着がみられる黄灰色(2.5Y5/1)極細粒～中粒砂質シルト層
- 第Ⅴ層 炭化物を含む黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細粒～中粒砂層
- 第Ⅵ層 鉄分の沈着がみられ、炭化物を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細粒砂層
- 第Ⅶ層 鉄分の沈着がみられ、炭化物を含む褐灰色(10YR5/1)極細粒～細粒砂質シルト層
- 第Ⅷ層 炭化物を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～中粒砂質シルト層
- 第Ⅸ層 炭化物を含む小礫混じりの暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒砂質シルト層
- 第Ⅹ層 炭化物を含む小礫混じりの灰色(10Y4/1)シルト質極細粒～中粒砂質シルト層
- 第Ⅺ層 炭化物を含む小礫混じりの灰色(10Y4/1)シルト質中粒砂層
- 第Ⅻ層 炭化物を含む木片混じりの灰色(5Y4/1)極細粒砂質シルト層
- 第Ⅼ層 木片を多量に含む灰色(5Y5/1)シルト質極細粒～細粒砂層
- 第Ⅽ層 木片を含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト質極細粒～細粒砂層

遺構埋土 (SR-1)

- 1. マンガン粒を含む褐灰色(10YR5/1)シルト質極細粒～細粒砂
- 2. 炭化物を含む黒褐色(10YR3/1)極細粒砂質シルト
- 3. 小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細粒砂
- 4. マンガン粒を含む黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細粒砂
- 5. 鉄分の沈着がみられる灰色(5Y5/1)シルト質極細粒砂
- 6. 鉄分の沈着がみられ、炭化物が混じる黄灰色(2.5Y5/1)極細粒砂
- 7. 鉄分の沈着がみられ、マンガン粒を含む灰色(5Y4/1)極細粒砂
- 8. 鉄分の沈着がみられる灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂質小～中礫
- 9. 褐灰色(10YR6/1)極細粒～中粒砂質小～中礫
- 10. 木片等を含む黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細粒～中粒砂
- 11. 灰色(7.5Y6/1)中粒砂
- 12. 黄灰色(2.5Y6/1)細粒～中粒砂質小～中礫
- 13. 灰色(5Y5/1)中粒～粗粒砂質小～中礫
- 14. 黄灰色(2.5Y5/1)小～中礫質中粒砂
- 15. 褐灰色(10YR6/1)極細粒砂質シルト
- 16. 鉄分の沈着がみられ、マンガン粒を含む灰色(5Y4/1)極細粒砂
- 17. 鉄分の沈着がみられる黄灰色(2.5Y6/1)極細粒砂

図2-3 Ⅱ区北壁セクション図

2. 調査区の概要 (3) III区

第IX層 炭化物を含む小礫混じりの暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒砂質シルト層

第X層 炭化物を含む小礫混じりの灰色(10Y4/1)シルト質極細粒～中粒砂質シルト層

第XI層 炭化物を含む小礫混じりの灰色(10Y4/1)シルト質中粒砂層

第XII層 炭化物を含む木片混じりの灰色(5Y4/1)極細粒砂質シルト層

第XIII層 木片を多量に含む灰色(5Y5/1)シルト質極細粒～細粒砂層

第XIV層 木片を含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト質極細粒～細粒砂層

層位中、遺物包含層は第III層(近世)であり、弥生時代及び古墳時代の明確な遺物包含層は確認されなかった。遺構検出は第IV層上面で行っている。

第I層は現代の耕作層であり、厚さ20～24cmを測る。調査前は水田であった。

第II～III層は旧耕作土で、古代～近世の遺物を含む。厚さ8～22cmを測り、近世以降の耕作土と考えられる。

第IV～XIV層は自然堆積層で、第IV層上面で弥生時代、古墳時代、近世の遺構が検出されている。

② 堆積層出土遺物

第III層出土遺物

須恵器(図2-4 7)

7は杯身で、口辺部から体部にかけての破片である。体部内面にはナデ調整、その他は回転ナデ調整を施し、胎土には粗粒砂を含む。

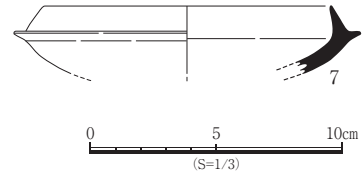


図2-4 第III層出土遺物実測図

(3) III区

調査対象区域の西端部東側に位置する東西約44m、南北約46mの方形を呈する調査区で、面積は1,110㎡である。確認された遺構は古墳時代、古代、中世である。本調査区は北側から派生した丘陵裾部に位置し、南東方向に向けて緩やかに下る斜面上で当該期の遺構が確認されている。なお、遺構からの出土を含めた出土遺物の総点数は約13,000点を数える。

① 層序

本調査区周辺では中世段階に地形改変が行われ、小規模な平坦部を造り出して居住域としていたと考えられる。その後、近現代には旧地形である丘陵裾部の緩斜面を大規模に削平し、削り出した土を盛土として段状に整地して耕作地を拡げたと考えられる。このため、本調査区北西部では旧地形は完全に削平され、遺構・遺物とも認められなかった。この箇所では削られた土は本調査区に盛られており、2次堆積と考えられる堆積層からは古墳時代から中世までの遺物が混在して出土している。本調査区の南東部に認められた緩斜面上では古墳時代、古代の遺構・遺物が確認されているが、ほぼ平坦な北西部では中世の遺構のみ検出されており、中世段階には当該期の遺構は削平されたと考えられる。

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

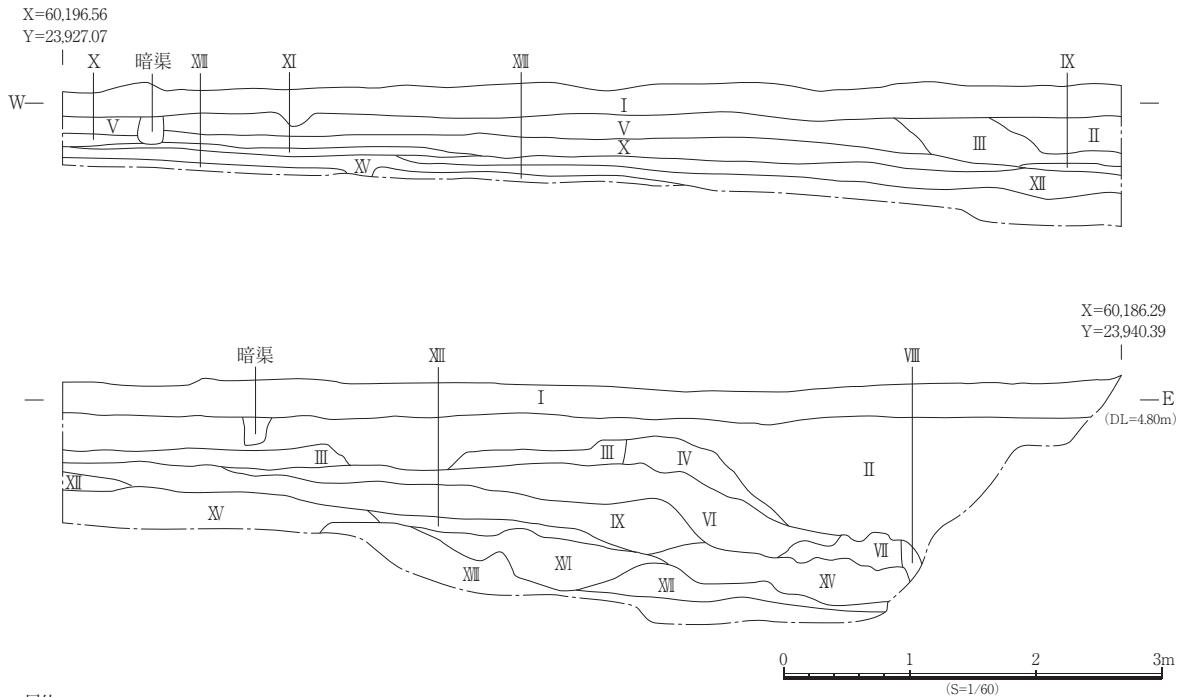
第I層 小礫を含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルト層

第II層 小～中礫を多量に含む黄褐色(10YR5/6)極細粒砂質シルト層

第III層 小礫を含む灰黄褐色(10YR6/2)極細粒砂質シルト層

第IV層 小礫を含む灰黄褐色(10YR5/2)極細粒砂質シルト層

第V層 炭化物を含む灰黄色(2.5Y6/2)極細粒砂質シルト層



層位	
第I層	小礫を含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルト層
第II層	小～中礫を多量に含む黄褐色(10YR5/6)極細粒砂質シルト層
第III層	小礫を含む灰黄褐色(10YR6/2)極細粒砂質シルト層
第IV層	小礫を含む灰黄褐色(10YR5/2)極細粒砂質シルト層
第V層	炭化物を含む灰黄色(2.5Y6/2)極細粒砂質シルト層
第VI層	小礫を含む炭化物混じりの暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～中粒砂質シルト層
第VII層	暗灰色(N3/)シルト質細粒～中粒砂層
第VIII層	黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細粒～中粒砂層
第IX層	小礫を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒砂質シルト層
第X層	炭化物を含むにぶい黄褐色(10Y5/3)極細粒砂質シルト層
第XI層	炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)極細粒砂質シルト層
第XII層	小礫混じりの灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂質シルト層
第XIII層	小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)極細粒砂質シルト層
第XIV層	炭化物を含む灰色(7.5Y5/1)シルト質極細粒～中粒砂層
第XV層	小礫混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルト層
第XVI層	小礫を多く含む灰色(5Y4/1)細粒～粗粒砂質シルト層
第XVII層	小～中礫混じりの灰色(5Y4/1)極細粒～細粒砂質シルト層
第XVIII層	明黄褐色(2.5Y6/6)シルト層

図2-5 III区中央バンクセクション図

- 第VI層 小礫を含む炭化物混じりの暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～中粒砂質シルト層
- 第VII層 暗灰色(N3/)シルト質細粒～中粒砂層
- 第VIII層 黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細粒～中粒砂層
- 第IX層 小礫を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒砂質シルト層
- 第X層 炭化物を含むにぶい黄褐色(10Y5/3)極細粒砂質シルト層
- 第XI層 炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)極細粒砂質シルト層
- 第XII層 小礫混じりの灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂質シルト層
- 第XIII層 小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)極細粒砂質シルト層
- 第XIV層 炭化物を含む灰色(7.5Y5/1)シルト質極細粒～中粒砂層
- 第XV層 小礫混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルト層
- 第XVI層 小礫を多く含む灰色(5Y4/1)細粒～粗粒砂質シルト層
- 第XVII層 小～中礫混じりの灰色(5Y4/1)極細粒～細粒砂質シルト層
- 第XVIII層 明黄褐色(2.5Y6/6)シルト層

層位中、遺物包含層は第XII層(中世)と第XV層(古代)であり、遺構検出は第XIII層上面で行っている。古墳時代の遺物包含層は残存していなかった。

2. 調査区の概要 (3) III区

第I層は現代の耕作層であり、調査前は水田であった。

第II層は近現代の盛土と考えられ、厚さ7～114cmを測る。丘陵裾部に向けて盛土を行い耕作地を拡げたものと考えられる。

第III層は近世の耕作土と考えられ、第IV層は当該期の畦畔とみられる。

第V～XI層は中近世の地形改変に伴う2次堆積層と考えられ、古墳時代から中世までの遺物を含む。

第XII層は中世の遺物包含層と考えられ、厚さ5～24cmを測る。調査区の北西部は後世の削平により残存していなかった。

第XIII・XIV層は緩斜面上から流れ込んだ自然堆積層と考えられる。

第XV層は古代の遺物包含層と考えられ、厚さ8～34cmを測る。中世の遺物包含層と同様、調査区の北西部は中世以降の地形改変により残存していなかった。

第XVI・XVII層は緩斜面上から流れ込んだ自然堆積層と考えられる。

第XVIII層は自然堆積層で、上面で古墳時代、古代、中世の遺構を検出している。

② 堆積層出土遺物

第XII層出土遺物

須恵器(図2-6 8)

8は転用硯である。内面には同心円文状のタタキ目、外面にはタタキ目とハケ目が残る。硯に転用されており、内面には使用痕がみられ部分的に墨が残る。胎土には粗粒砂を含む。

緑釉陶器(図2-6 9)

9は皿の底部と考えられる破片である。硬質系とみられ、底部外面には回転ヘラ削りを施す。底部切り離しは回転糸切りで、切り離した後丁寧にナデ消す。全面に施釉するが、摩耗が著しい。胎土は精良である。

土師質土器(図2-6 10)

10は杯で、成形はロクロ水挽とみられ、調整は摩耗が著しく不明である。底部切り離しは回転糸切りとみられ、胎土は精良である。

青磁(図2-6 11)

11は碗の口縁部破片である。龍泉窯系で口縁部内面に1条の沈線を巡らし、体部内面には草花文を施す。胎土は精良である。

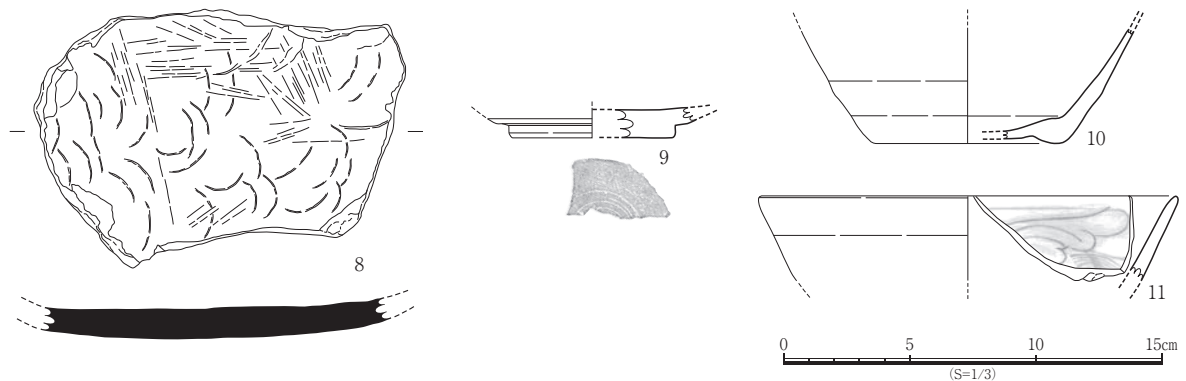


図2-6 第XII層出土遺物実測図

第Ⅳ層出土遺物

土師器(図2-7 12~16)

12~14は高杯で、脚部のみ残存する。12は脚裾部を欠損し、器面は摩耗が著しいが外面には指頭圧痕、内面にははしぼり目が残る。胎土には粗粒砂を含む。13も脚裾部を欠損し、調整は摩耗が著しく不明である。胎土には粗粒砂~小礫を含む。14は脚端部を欠損し、調整は摩耗が著しく不明である。胎土には粗粒砂~小礫を含む。

15は甕の口縁部破片で、調整は摩耗が著しく不明である。胎土には粗粒砂を多く含む。

16は羽釜の口縁部破片である。体部外面にはハケを施し、顎下側には張り付け時のヨコナデが残る。胎土には粗粒砂~小礫を含む。

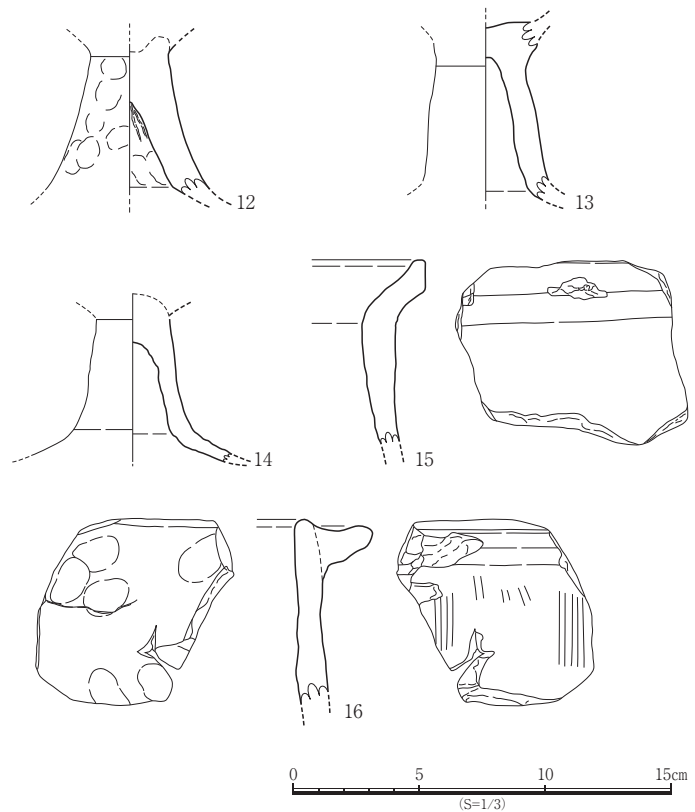


図2-7 第Ⅳ層出土遺物実測図1

須恵器(図2-8 17~38)

17~22は杯蓋で、17~20は宝珠形、21はボタン状のつまみを持つものである。17はつまみと天井部の一部が残存する。内面にはナデ調整、外面には回転ナデ調整が残り、胎土には粗粒砂を含む。18はつまみと天井部のみ残存し、内外面とも回転ナデのあとナデを施す。胎土には粗粒砂~小礫を含む。19もつまみと天井部のみ残存し、内面には回転ナデのあとナデ、外面にはナデを施す。胎土には粗粒砂を含む。20はつまみと天井部の一部のみ残存し、つまみには自然釉が残る。内面には回転ナデのあとナデを施し、外面は摩耗が著しく不明である。胎土には粗粒砂~小礫を含む。21もつまみと天井部の一部のみ残存する。内面にはナデ、外面には回転ナデを施し、胎土には粗粒砂を含む。22はつまみと天井部の一部を欠損する。天井部外面にはナデ、口縁部内外面には回転ナデを施し、胎土には細粒~粗粒砂を含む。

23~33は底部外面端部に輪高台の付く杯で、全て底部破片である。23は体部内外面とも回転ナデ、底部内面にはナデ、体部外面下端には回転ヘラ削りを施す。胎土は精良である。24は体部内外面とも回転ナデ、底部内面にはナデを施し、胎土には粗粒砂を含む。25は摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、体部外面下端には回転ヘラ削りの痕跡が残る。胎土は精良である。26は内外面とも回転ナデを施し、底部外面には回転ヘラ削りの痕跡が残る。胎土は精良である。27は摩耗が著しく調整は不明であるが、底部外面には線刻が残る。胎土には中粒~粗粒砂を含む。28は底部内面はナデ、体部外面下端には回転ヘラ削りを施し、外面には自然釉が残る。胎土は精良である。29は体部内外面に回転ナデ、底部内面にはナデを施し、底部外面の輪高台内側には高台張り付け時の回転ナデ調整が残る。胎土は精良である。30は体部外面下端に回転ヘラ削り、底部内面にはナデを施し、底部外面は摩耗が著しく調整不明である。胎土には粗粒砂を含む。31は体部外面には回転ナデ、下端には回転ヘラ削りを施

2. 調査区の概要 (3) III区

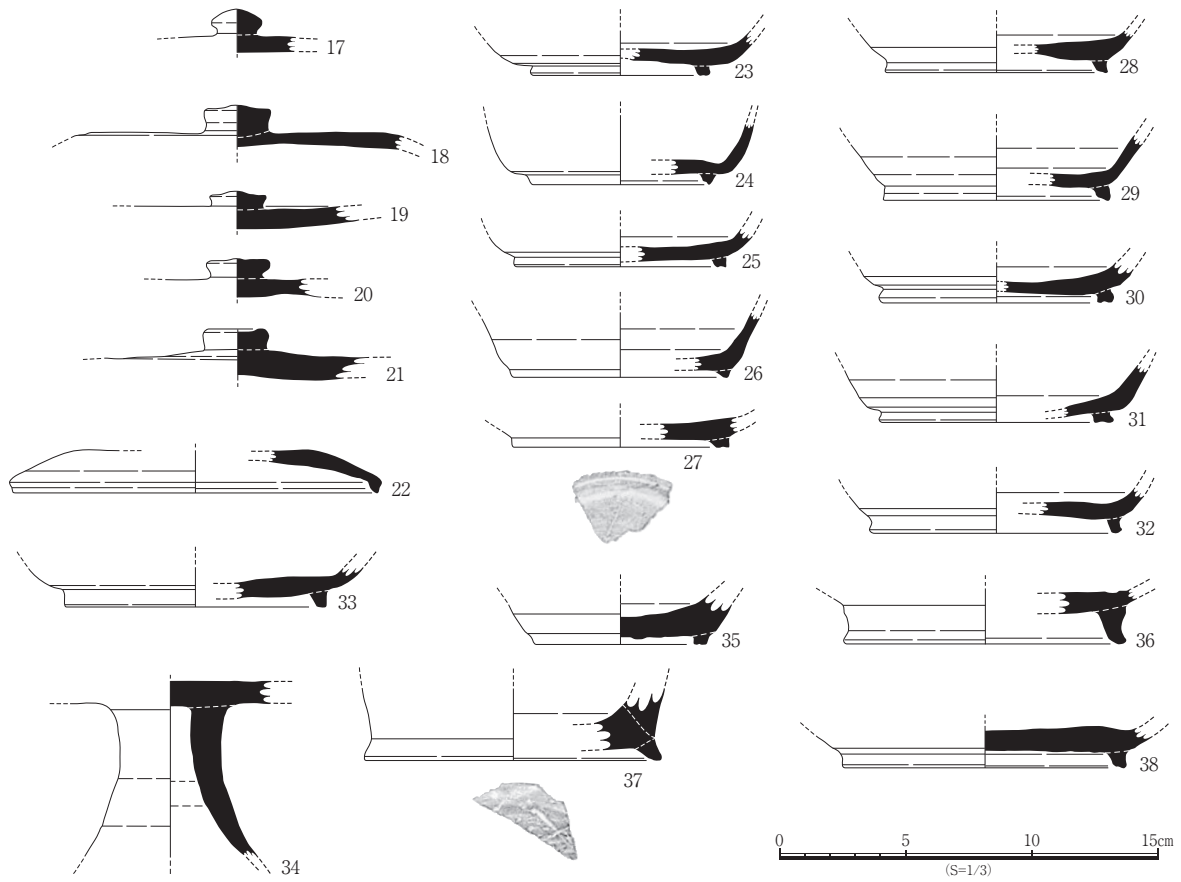


図2-8 第Ⅳ層出土遺物実測図2

し、高台外側には張り付け時のヨコナデが残る。内面は摩耗が著しく調整は不明で、胎土には小礫を少し含む。32は体部内面には回転ナデ、外面下端には回転ヘラ削り調整、底部内面にはナデ調整が認められ、底部切り離しは回転ヘラ切りで、切り離しのあとナデを施す。胎土は精良である。33は体部内外面とも回転ナデ調整、底部内面にはナデ調整が認められ、底部切り離しは回転ヘラ切りで、切り離しのあとナデを施す。胎土には粗粒砂を含む。

34は高杯で、杯部の大部分と脚裾部を欠損する。全体的に摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、脚部内外面とも回転ナデ調整の痕跡が残る。胎土には粗粒砂～小礫を含む。

35～37は壺と考えられるもので、全て底部破片である。35は体部外面下端に回転ヘラ削り調整、底部内面に回転ナデ調整が認められ、底部切り離しは回転ヘラ切りである。高台内側には張り付け時の回転ナデが残り、胎土には粗粒砂～小礫を含む。36は底部内面に回転ナデ調整とナデ調整、外面にはナデ調整が認められ、高台には回転ナデを施す。胎土は精良である。37は内外面とも回転ナデを施し、胎土は精良である。

38は転用硯である。杯を転用しており、底部のみ残存する。体部外面下端には回転ヘラ削り、底部内外面にはナデを施し、底部内面には使用痕とともに墨が付着する。胎土には粗粒砂を含む。

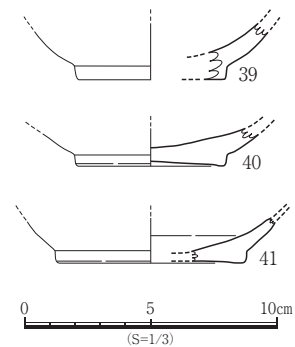


図2-9 第Ⅳ層出土遺物実測図3

緑釉陶器(図2-9 39~41)

39~41は杯で全て底部破片である。軟質系とみられ、調整は摩耗が著しく不明である。39は体部外面下端、底部内外面には部分的に釉が残り、胎土には粗粒砂を含む。40は体部外面下端に釉が残り、胎土には粗粒砂を含む。41も体部外面下端に釉が残り、胎土は精良である。

瓦(図2-10 42~45)

42~45は全て平瓦で、凹面に布目圧痕、凸面に縄目状のタタキ目が明瞭に残る。42は一部のみ残存し、側面にはヘラ削りを施す。胎土には粗粒砂を含む。43も一部のみ残存し、側面と凸面の一部にヘラ削りを施す。胎土には粗粒砂~小礫を含む。44も一部が残存し、側面の一部にヘラ削りを施す。胎土には粗粒砂~小礫を含む。45も一部のみ残存し、側面にヘラ削りを施す。胎土には粗粒砂~小礫を含む。

土師質土器(図2-11 46~61)

46~54は杯で、46・47のみ全体を窺い知ることができる。46は摩耗が著しく調整は不明である。底部切り離しは回転ヘラ切りとみられ、胎土は精良である。47も摩耗が著しく調整は不明であり、胎土には極細粒~中粒砂を含む。48~54は底部のみ残存し、全て摩耗が著しく調整は不明である。48の底部切り離しは回転ヘラ切りとみられ、胎土には粗粒砂~小礫を含む。49の底部切り離しは回転糸切りで、胎土には粗粒砂を含む。50も底部切り離しは回転糸切りで、胎土には粗粒砂を含む。51は摩耗のため底部切り離しは不明で、胎土には粗粒砂を含む。52の底部切り離しは回転糸切りとみられ、胎土は精良である。

53も底部切り離しは回転糸切りとみられ、胎土は精良である。54は白色系で、高台を有する。調整は摩耗が著しく不明で、胎土には粗粒砂を含む。

55~61は椀である。55は白色系の口縁部破片である。口縁部と体部内外面には回転ナデ、体部外面下方には回転ヘラ削りを施し、外面には火襻痕が残る。胎土は精良である。56~61は底部破片で、56~59は摩耗のため調整は不明である。56は断面台形状の高台を有し、胎土は精良である。57

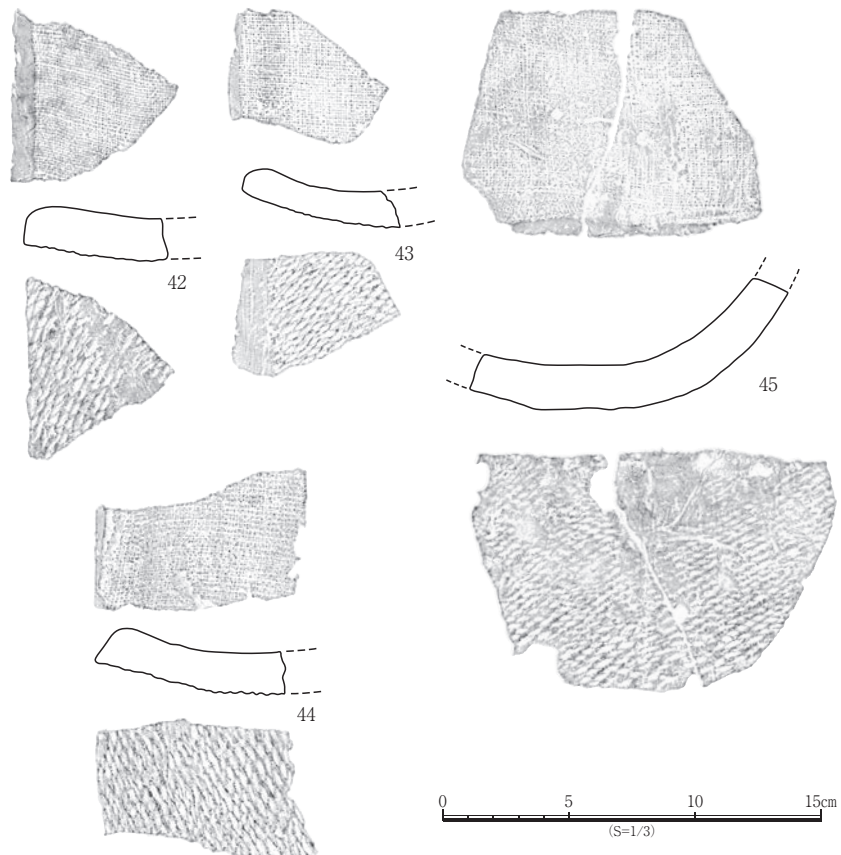


図2-10 第Ⅳ層出土遺物実測図4

2. 調査区の概要 (3) III区

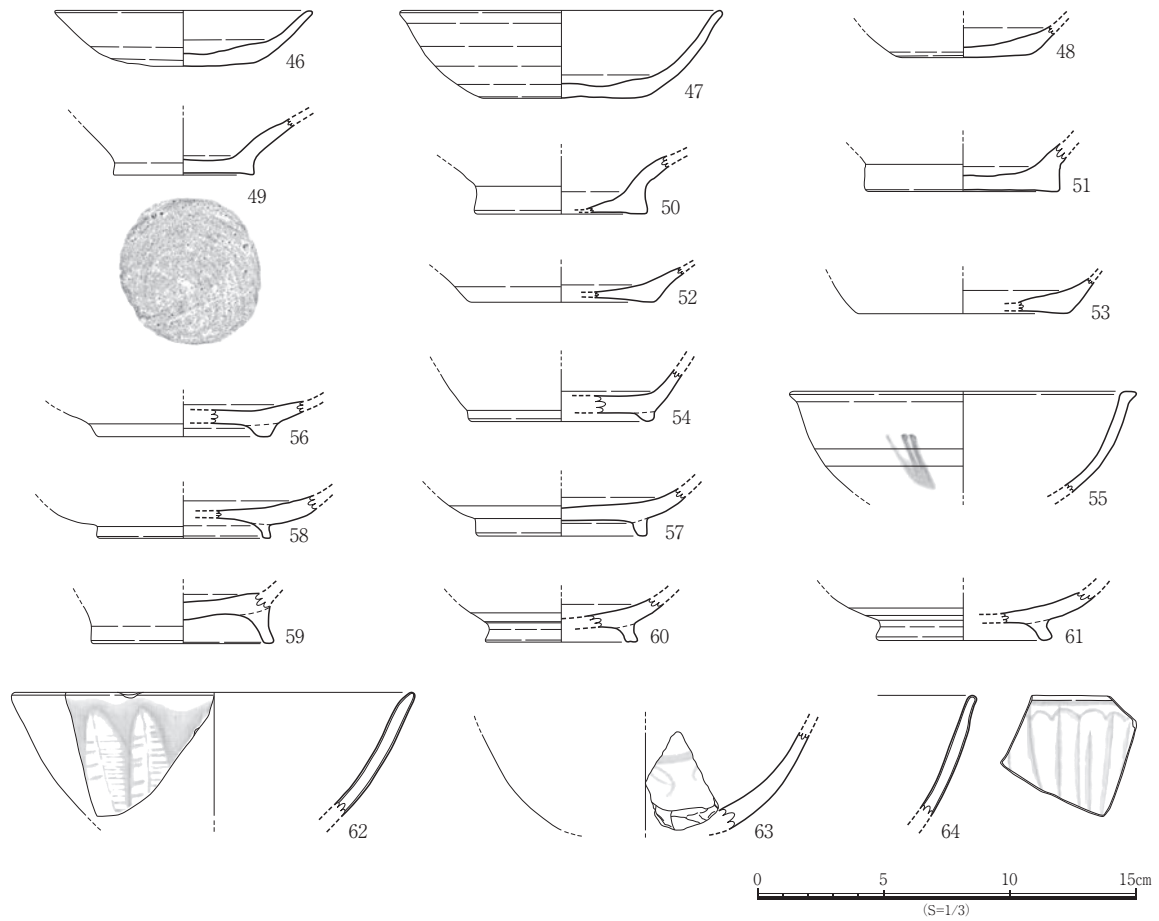


図2-11 第IV層出土遺物実測図5

は不明瞭であるが、体部外面下端に回転ヘラ削りの痕跡が残り、胎土は精良である。58・59はハの字状を呈する高台を持つものである。58は胎土には粗粒砂～小礫を含む。59は高台の大部分を欠損し、胎土は精良である。60・61は白色系で、ハの字状を呈する高台を有する。体部外面下端には回転ヘラ削りの痕跡が残り、胎土は精良である。

青磁(図2-11 62～64)

62～64は碗である。62は口縁部破片で、外面には鎬蓮弁を施す。胎土には極細粒砂を含む。63は体部破片で、内面には草花文を施す。胎土は精良である。64は口縁部破片で、剣頭が蓮弁としての単位を意識せず施される。胎土は精良である。

土製品(図2-12 65～76)

65～76は土錘で、摩耗のため調整は不明瞭である。65は両端を欠損し、胎土には粗粒砂～小礫を含む。66は一部を欠損し、胎土には粗粒砂～小礫を含む。67も一部を欠損し、胎土には小

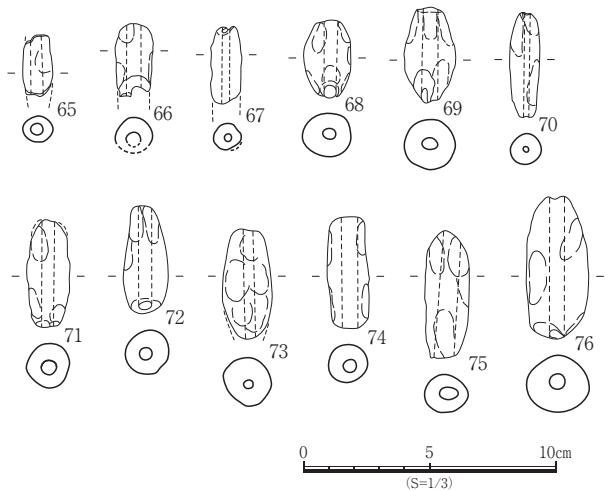


図2-12 第IV層出土遺物実測図6

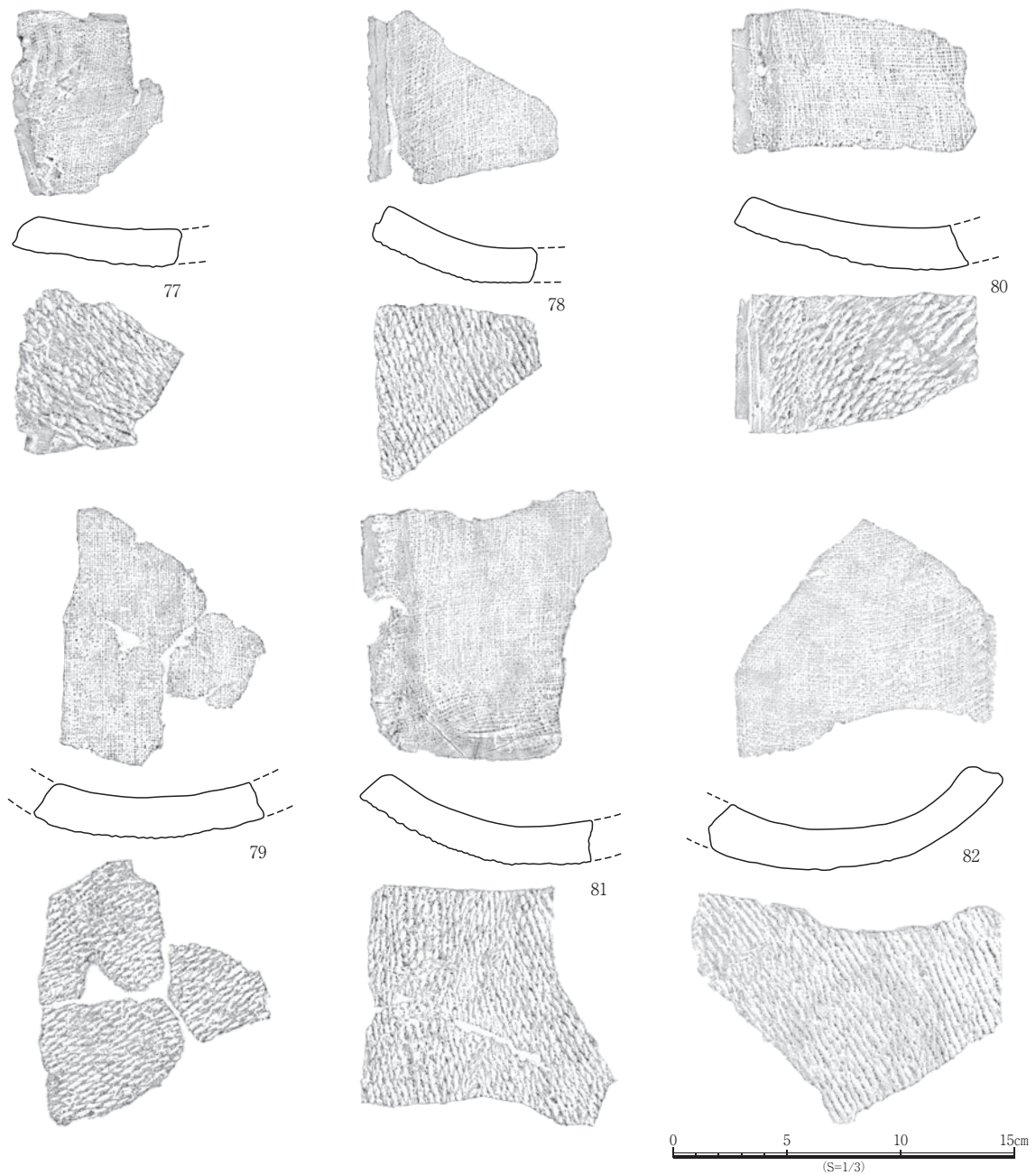


図2-13 第Ⅶ層出土遺物実測図

礫を多く含む。68はほぼ完存し、胎土には粗粒砂を含む。69は一部を欠損し、胎土には粗粒砂を含む。70はほぼ完存し、胎土には粗粒砂を含む。71は一部が欠損し、胎土には中粒砂～小礫を含む。72は完存し、胎土には粗粒砂を含む。73は一部を欠損し、胎土には粗粒砂～小礫を含む。74も一部を欠損し、胎土には粗粒砂～小礫を含む。75も一部を欠損し、胎土には粗粒砂を含む。76はほぼ完存し、胎土には粗粒砂を含む。

第Ⅶ層出土遺物

瓦(図2-13 77～82)

77～82は全て平瓦で、凹面には布目圧痕、凸面には縄目状のタタキ目が明瞭に残る。77は側面にヘラ削りを施し、胎土には粗粒砂～小礫を含む。78も側面にヘラ削りを施し、胎土には中粒砂～小礫

2. 調査区の概要 (4) IV区

を含む。79は両端を欠損し、胎土には粗粒砂～小礫を含む。80は側面にヘラ削りを施し、胎土には中粒～粗粒砂を含む。81は側面にヘラ削りを施し、胎土には中粒～粗粒砂を含む。82は側面にヘラ削りを施し、胎土には中粒～粗粒砂を含む。

(4) IV区

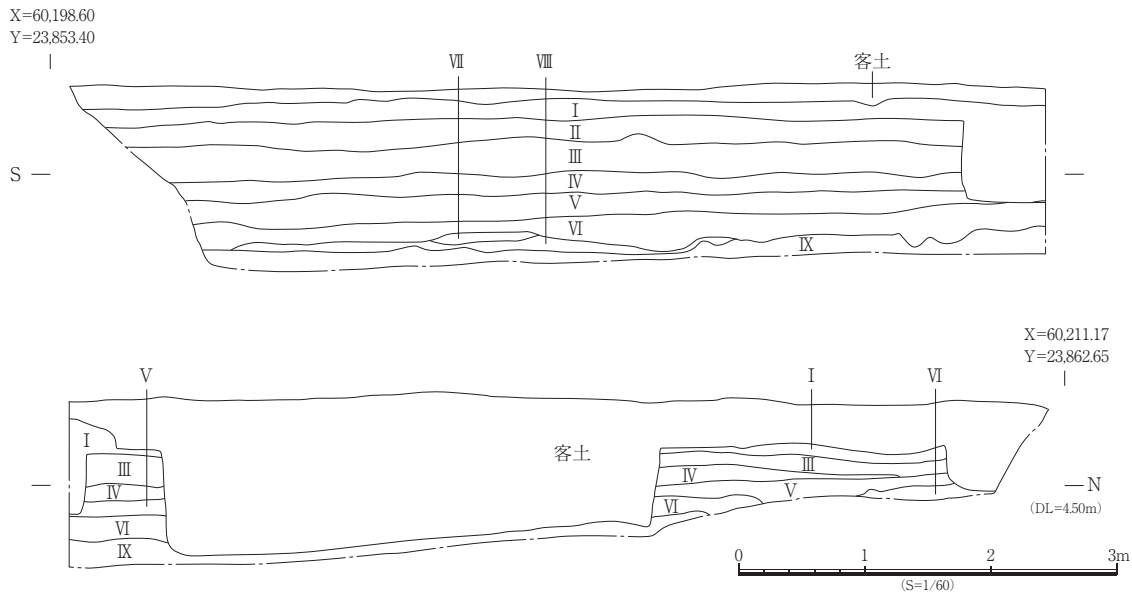
調査対象区域の西端部西側に位置する東西約38m，南北約18mの三角形を呈する調査区で，面積は420㎡である。確認された遺構は古代である。本調査区は北側から派生した丘陵裾部に位置し，南方向に向けて緩やかに下る斜面上で当該期の遺構が確認されている。なお，遺構からの出土を含めた出土遺物の総点数は約8,000点を数える。

① 層序

本調査区周辺ではⅢ区と同様中世段階に地形改変が行われ，小規模な平坦部を造り出して居住域としていたと考えられる。その後，近現代には旧地形である丘陵裾部の緩斜面を大規模に削平し，削り出した土を盛土として段状に整地して耕作地を拡げたと考えられる。このため，本調査区北部では旧地形は完全に削平され，遺構・遺物とも認められなかった。この箇所では削られた土は本調査区に盛られており，2次堆積と考えられる堆積層からは古墳時代から中世までの遺物が混在して出土している。

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 小礫を含む灰黄褐色(10YR5/2)細粒～粗粒砂質シルト層
- 第Ⅱ層 小礫を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒～中粒砂質シルト層
- 第Ⅲ層 鉄分の沈着がみられる黄灰色(2.5Y6/1)極細粒～細粒砂質シルト層



層位

- | | | | |
|-----|------------------------------------|-----|-------------------------------|
| 第Ⅰ層 | 小礫を含む灰黄褐色(10YR5/2)細粒～粗粒砂質シルト層 | 第Ⅴ層 | 炭化物を含む褐灰色(10YR5/1)細粒～中粒砂質シルト層 |
| 第Ⅱ層 | 小礫を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒～中粒砂質シルト層 | 第Ⅵ層 | 炭化物を含む褐灰色(10YR4/1)細粒～粗粒砂質シルト層 |
| 第Ⅲ層 | 鉄分の沈着がみられる黄灰色(2.5Y6/1)極細粒～細粒砂質シルト層 | 第Ⅶ層 | 炭化物を含む灰黄色(2.5Y6/2)シルト質中粒～粗粒砂層 |
| 第Ⅳ層 | 小礫を含む灰色(N5/)細粒～中粒砂質シルト層 | 第Ⅷ層 | 小礫を含む灰白色(10YR7/1)粗粒砂質シルト層 |
| | | 第Ⅸ層 | 鉄分の沈着がみられる灰色(N4/)粘土質シルト層 |

図2-14 IV区中央バンクセクション図

- 第Ⅳ層 小礫を含む灰色(N5/)細粒～中粒砂質シルト層
- 第Ⅴ層 炭化物を含む褐灰色(10YR5/1)細粒～中粒砂質シルト層
- 第Ⅵ層 炭化物を含む褐灰色(10YR4/1)細粒～粗粒砂質シルト層
- 第Ⅶ層 炭化物を含む灰黄色(2.5Y6/2)シルト質中粒～粗粒砂層
- 第Ⅷ層 小礫を含む灰白色(10YR7/1)粗粒砂質シルト層
- 第Ⅸ層 鉄分の沈着がみられる灰色(N4/)粘土質シルト層

層位中、遺物包含層は第Ⅳ～Ⅵ層であり、遺構検出は第Ⅸ層上面で行っている。前述したように各時期の遺物が混在して出土しており、明確な遺物包含層は存在しなかった。

第Ⅰ層は近現代の耕作土であり、厚さ6～36cmの客土が覆っている。調査前は放棄された園芸用ハウスが存在していた。

第Ⅱ・Ⅲ層は近世の耕作土と考えられ、厚さ15～30cmを測る。

第Ⅳ～Ⅵ層は中近世の地形改変に伴う2次堆積層と考えられ、古墳時代から中世までの遺物を含む。

第Ⅶ・Ⅷ層は緩斜面上から流れ込んだ自然堆積層と考えられる。

第Ⅸ層は自然堆積層で、上面で古代の遺構を検出している。

② 堆積層出土遺物

第Ⅳ層出土遺物

土師器(図2-15 83)

83は鉢を模したミニチュア土器である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、底部内面には指頭圧

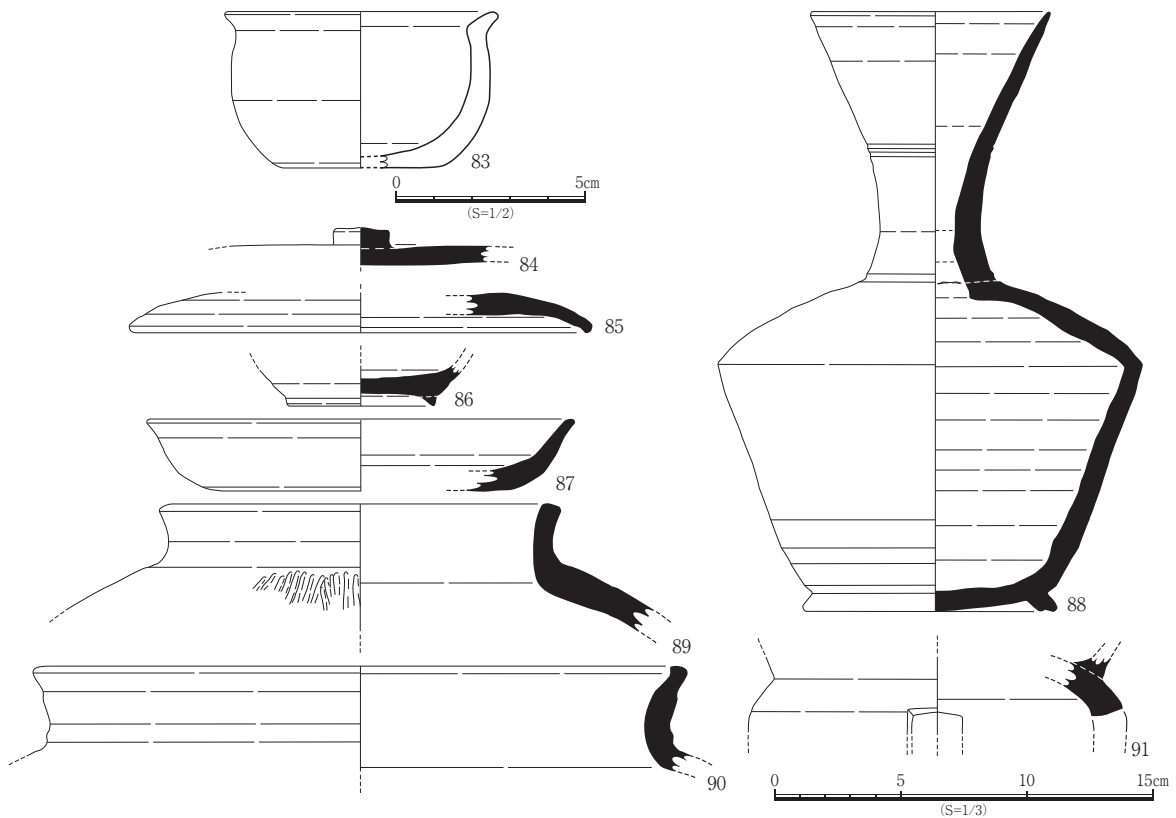


図2-15 第Ⅳ層出土遺物実測図1

2. 調査区の概要 (4) IV区

痕が残る。胎土には粗粒砂を含む。

須恵器(図2-15 84~91)

84・85は杯蓋である。84はつまみと天井部の一部が残存する。摩耗のため調整は不明瞭であるが、天井部内面には回転ナデ調整が残る。天井部外面の一部に自然釉が認められ、胎土には粗粒砂を含む。85は口縁部破片で、回転ナデ調整のあと天井部内外面にはナデを施す。胎土には粗粒砂を含む。

86は杯で、底部外面端部に輪高台が付くものである。体部内外面、底部内面には回転ナデ調整がみられ、底部切り離しのあとナデを施す。胎土は精良である。

87は皿の口縁部破片で、口縁部内外面には回転ナデ、底部内面にはナデを施し、底部切り離しは回転ヘラ切りとみられる。胎土には粗粒砂～小礫を含む。

88・89は壺である。88は長頸壺で、底部外面端部に高台を有する。口縁部と胴部内外面に回転ナデ、胴部下端に回転ヘラ削りを施し、頸部内面下方と底部内外面にはナデ調整が認められる。部分的に自然釉が残り、胎土には粗粒砂～小礫を含む。89は広口壺の口縁部破片である。口縁部内外面に回転ナデ、胴部内面にナデを施し、胴部外面にはタタキ目が認められる。胎土には粗粒砂～小礫を含む。

90は甕である。口縁部破片で、内外面とも回転ナデ、胴部内面上端にはナデを施す。胎土には粗粒砂～小礫を含む。

91は円面硯で、硯部と脚部の一部が残存する。外堤端部は欠損し、わずかに海部が残り、矩形の透かしを施す。内外面とも回転ナデ調整が認められ、胎土には粗粒砂～小礫を含む。

二彩陶器(図2-16 92)

92は壺と考えられる胴部破片である。外面に施釉するが内面は露胎で、胎土には極細粒砂を含む。

瓦(図2-16 93)

93は平瓦で両端が欠損する。凹面は摩耗のため調整不明であるが、凸面には縄目状のタタキ目が残る。胎土には極細粒砂～細粒砂を含む。

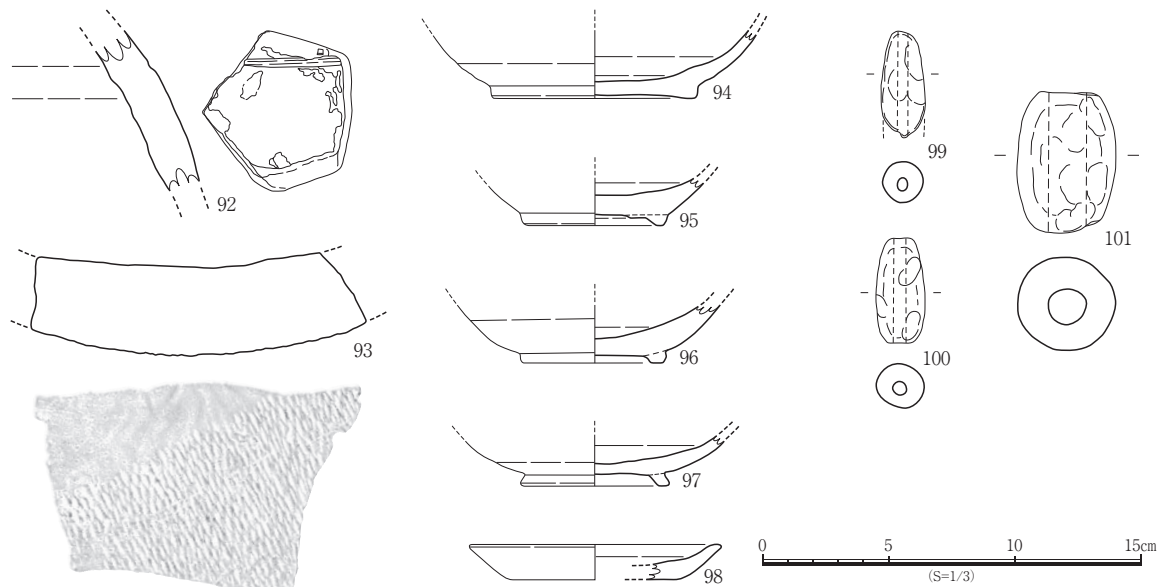


図2-16 第IV層出土遺物実測図2

土師質土器(図2-16 94~98)

94は杯で、円盤状高台を呈する。口縁部を欠損し、体部内面に回転ナデ調整が認められるが、他の部位は摩耗のため調整不明である。底部切り離しは回転糸切りとみられ、胎土は精良である。

95~97は椀である。95・96は断面台形状の高台を有するもので、口縁部を欠損する。調整は摩耗のため不明である。95は胎土に粗粒砂~小礫を含む。96は胎土に極細粒~中粒砂を含む。97はハの字状を呈する高台を有するもので、口縁部を欠損する。摩耗のため調整は不明で、胎土には極細粒~小礫を含む。

98は小皿で、底部の大部分を欠損する。摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂を含む。

土製品(図2-16 99~101)

99~101は土錘で、調整は摩耗のため不明である。99は一部を欠損し、胎土には粗粒砂~小礫を多く含む。100も一部を欠損し、胎土には粗粒砂~小礫を含む。101はほぼ完存し、胎土には粗粒砂を多く含む。

第Ⅴ層出土遺物

弥生土器(図2-17 102)

102は壺と考えられるもので、胴部下半の一部が残存する。内面には不定方向のナデ、外面にはタキを施し、胎土には粗粒砂~小礫を含む。

土師器(図2-18 103~107)

103~105は高杯である。103は脚端部を欠損し、摩耗のため調整は不明である。胎土には粗粒砂~小礫を多く含む。104は脚柱部のみ残存し、調整は摩耗のため不明である。胎土には粗粒砂~小礫を含む。105も脚柱部のみ残存し、摩耗のため調整は不明である。胎土には粗粒砂~小礫を含む。

106は鉢と考えられるもので、体部内面にはヨコナデ、底部内面には指オサエを施し、外面は摩耗

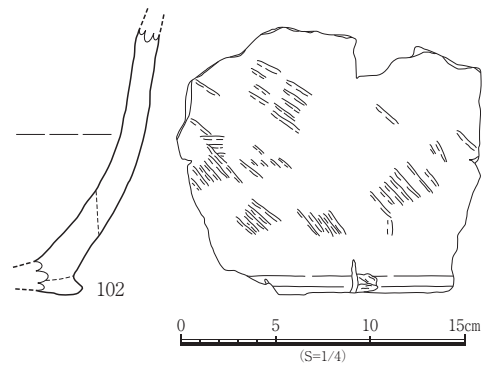


図2-17 第Ⅴ層出土遺物実測図1

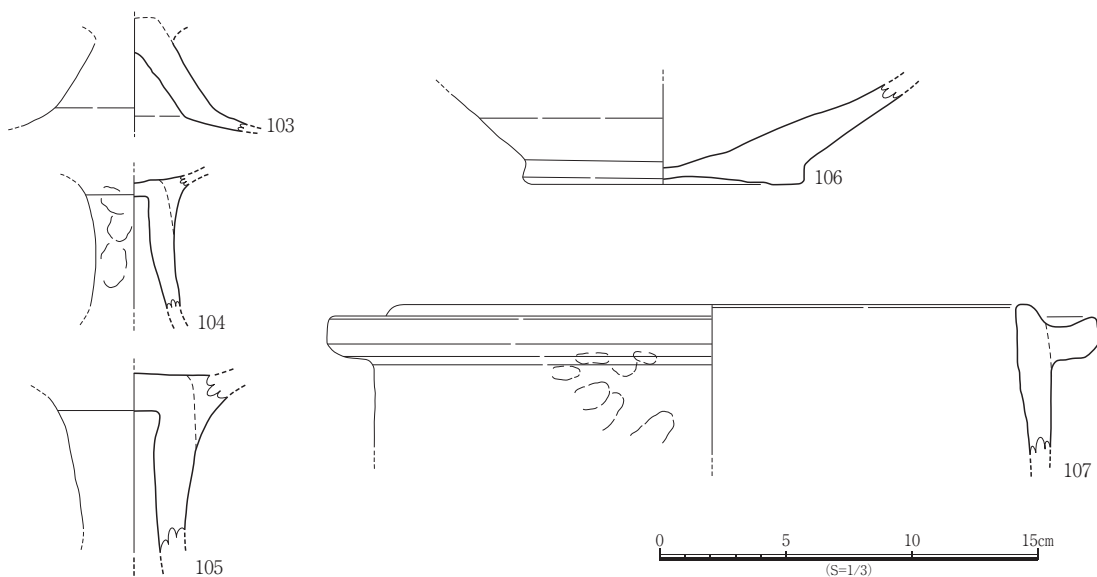


図2-18 第Ⅴ層出土遺物実測図2

2. 調査区の概要 (4) IV区

のため調整は不明である。底部切り離しはヘラ切りで、胎土には粗粒砂～小礫を含む。

107は羽釜の口縁部破片である。調整は摩耗のため不明で、胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。

須恵器(図2-19・20 108～132)

108は壺蓋である。内外面とも回転ナデ調整が認められ、その後天井部内面にナデを施す。外面には火礫痕と自然釉が残り、胎土は精良である。

109～111は杯蓋で、109・110は全体を窺い知ることができる。109は内外面とも回転ナデ調整が認められ、その後天井部内面にはナデを施す。胎土には粗粒砂～小礫を含む。110は口縁部内外面と天井部内面とも回転ナデが認められ、その後天井部内外面にナデを施す。胎土には粗粒砂を含む。111は口縁部を欠損するもので、天井部内面には回転ナデが認められ、その後天井部内外面にナデを施す。胎土には粗粒砂を含む。

112～120は杯である。112～118は底部外面端部に輪高台が付き、112・113は全体を窺い知ることができるものである。112は体部内外面と底部内面に回転ナデを施し、底部切り離しは回転ヘラ切りである。切り離しのあとナデを施し、胎土には粗粒砂を含む。113は体部内外面と底部内面に回転ナデを施し、底部切り離しは回転ヘラ切りである。胎土には粗粒砂～小礫を含む。114～118は口縁部を欠損するものである。114は体部内外面に回転ナデ、底部内面にナデを施し、胎土には粗粒砂～小礫を含む。115は体部内外面と底部内面には回転ナデ調整が認められ、底部内面にはナデ調整を加える。底部切り離し後に丁寧なナデを施し、胎土には粗粒砂を含む。116は体部内外面と底部内面には回転ナデ調整が認められ、底部切り離し後に丁寧なナデを施す。胎土には中粒～粗粒砂を含む。117も体部内外面と底部内面には回転ナデ調整が認められ、底部内面にはナデ調整を加える。底部切り離し後に丁寧なナデを施し、胎土には粗粒砂を含む。118も体部内外面と底部内面には回転ナデ調整

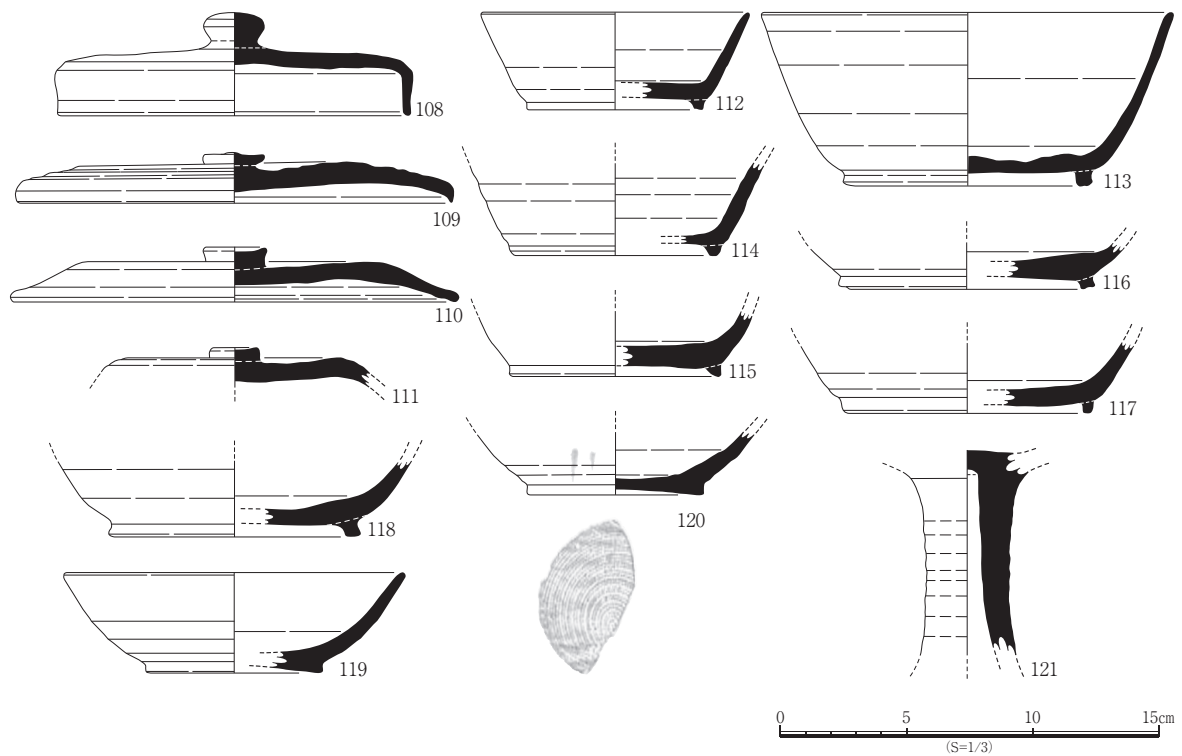


図2-19 第V層出土遺物実測図3

が認められ、底部内面にはナデ調整を加える。底部切り離し後に丁寧なナデを施し、胎土には極細粒砂を含む。119・120は円盤状高台を有するもので、119のみ全体を窺い知ることが出来る。119は体部外面下半には回転ヘラ削り、その他の部位には回転ナデを施し、底部切り離しは回転糸切りである。自然釉が内外面に残り、胎土は精良である。120は口縁部を欠損し、内外面とも回転ナデを施し、底部切り離しは回転糸切りである。体部には火轆痕が認められ、胎土は精良である。

121は高杯である。脚柱部のみ残存し、器面には回転ナデを施す。胎土は精良である。

122・123は双耳壺の上胴部破片である。122は器面に回転ナデを施し、耳部の端部には静止ヘラ削りが認められる。胎土には小礫を多く含む。123は器面に回転ナデを施し、耳部は5カ所面取りを行

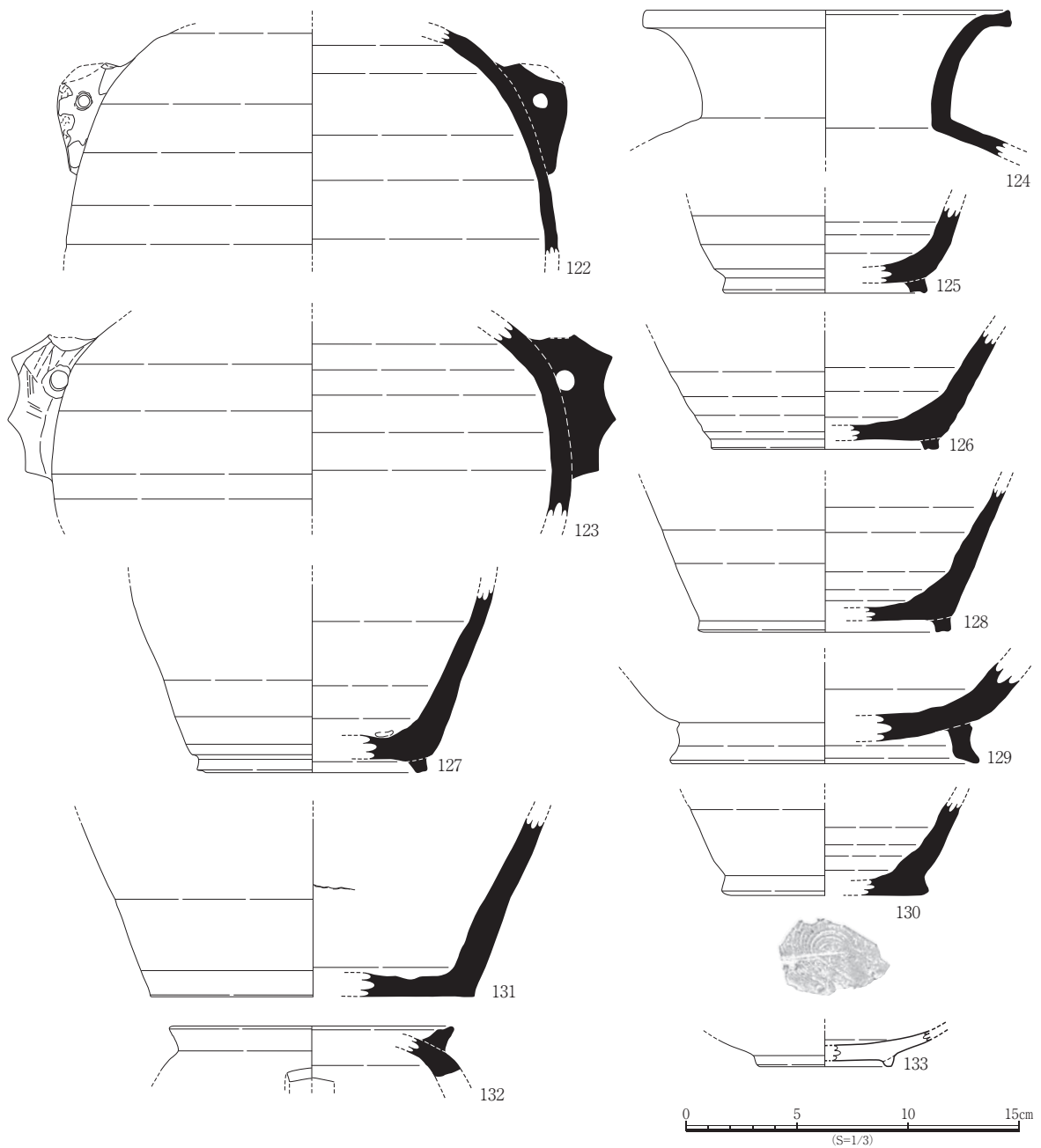


図2-20 第Ⅴ層出土遺物実測図4

2. 調査区の概要 (4) IV区

う。外面には自然釉が残り、胎土には粗粒砂～小礫を含む。

124～131は壺である。124は口縁部破片で、器面には回転ナデを施す。口縁部内面と体部外面には自然釉が残り、胎土には極細粒～中粒砂を含む。125～130は底部破片で、125～129は底部外面端部に輪高台を有するものである。125は胴部外面下半に回転ヘラ削り、その他の部位には回転ナデを施し、底部外面には切り離し後ナデを加える。高台内側には爪形状圧痕が認められ、胎土は精良である。126は器面に回転ナデを施し、底部外面は摩耗のため調整不明である。胎土には粗粒砂～小礫を含む。127は胴部外面下端に回転ヘラ削り、その他の部位には回転ナデを施し、底部内面には指頭圧痕が残る。底部外面は底部切り離しのあとナデを施し、高台張り付け時のヨコナデも認められる。胎土には粗粒砂～小礫を少し含む。128は器面に回転ナデを施し、胎土には極細粒砂を含む。129は胴部内外面に回転ナデ、底部内外面にナデを施すが、総じて調整は粗い。底部内面には自然釉が残り、胎土には極細粒砂～小礫を含む。130・131は平底を呈するものである。130は器面に回転ナデを施す。底部切り離しは回転糸切りで、胎土には粗粒砂を含む。131は胴部内外面に回転ナデ、胴部外面下端には回転ヘラ削りを施す。底部内外面には明瞭な指頭圧痕とナデ調整が認められ、胎土には粗粒砂～小礫を含む。

132は円面硯である。円足硯で硯部と脚部の一部が残存する。外堤部と僅かな海部が残り、脚台部には矩形の透かしを施す。胎土は精良である。

緑釉陶器(図2-20 133)

133は椀である。軟質系で、摩耗のため調整は不明である。底部内面と高台外側の一部に緑釉が残る。胎土は精良である。

瓦(図2-21 134～137)

134～137は平瓦で、凹面には布目圧痕、凸面には縄目状のタタキ目が残る。134は側面にヘラ削りを施し、面取りを行う。胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。135も端部と側面にヘラ削りを施し、面取りを行う。胎土には極細粒砂を含む。136は端部と側面にへ

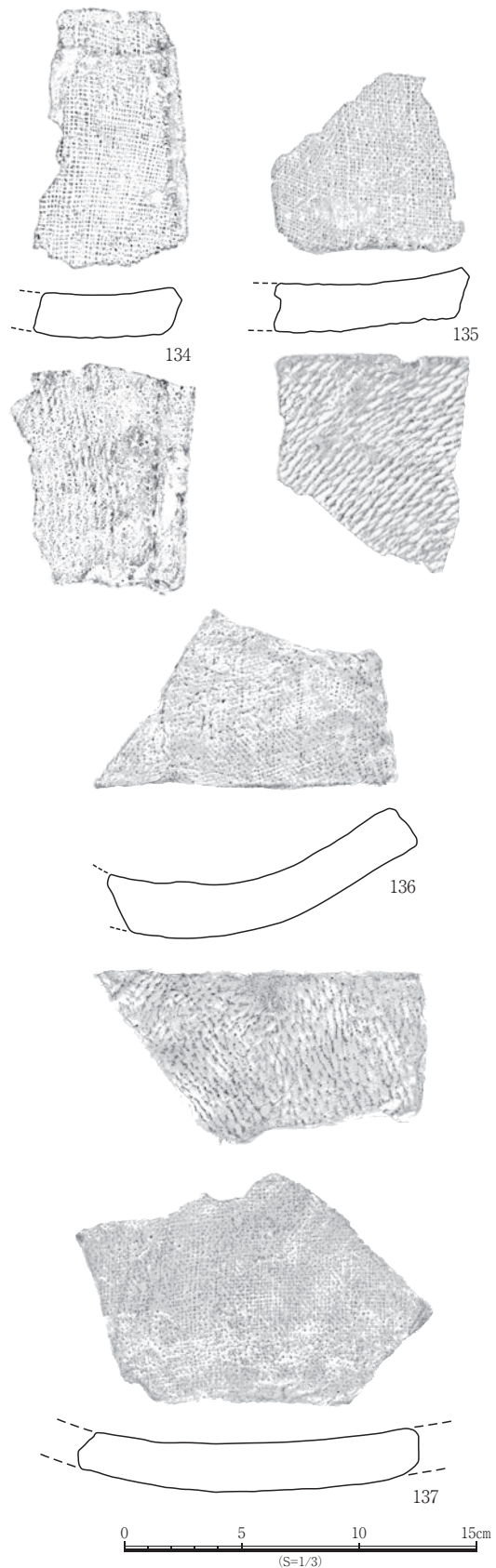


図2-21 第V層出土遺物実測図5

ラ削りを施し、面取りを行う。胎土には粗粒砂～小礫を含む。137は両側面を欠損し、端部にヘラ削りを施す。胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。

土師質土器(図2-22 138～144)

138～144は椀で、全て底部破片である。138・139は断面台形状の高台を有するもので、摩耗のため調整は不明である。138は胎土には粗粒砂を含む。139は内面に煤が付着しており、胎土には粗粒～極粗粒砂を含む。140～144はハの字状を呈する高台を持つものである。140・141は摩耗のため調整は不明で、胎土は精良である。142は体部外面下端に回転ヘラ削りが認められ、内面は摩耗のため調整は不明である。底部切り離しは回転ヘラ切りとみられ、切り離し後ナデを施す。内面及び高台には火嚢痕が残り、胎土は精良である。143は体部外面下端に回転ヘラ削りが認められるが、他の部位は摩耗のため調整は不明で、胎土は精良である。144は摩耗のため調整は不明で、胎土は精良である。

瓦質土器(図2-22 145)

145は三足鍋の脚部で、上半部のみ残存する。摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂～小礫を含む。

備前焼(図2-22 146)

146は播鉢と考えられるもので、口縁部のみ残存する。器面には回転ナデを施し、胎土には粗粒砂～小礫を含む。

土製品(図2-23 147～161)

147～161は土錘で、全て摩耗のため調整は不明である。147～156は孔を穿つもので、147～153は平面形が棒状を呈する。147はほぼ完存し、胎土には粗粒砂～小礫を含む。148は片側を欠損し、胎土には粗粒砂～小礫を含む。149～151はほぼ完存し、胎土には粗粒砂を含む。152は端部を欠損し、胎土には粗粒砂を含む。153はほぼ完存し、胎土には粗粒砂を含む。154～156は平面形が楕円状を呈するものである。154は片側を欠損し、胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。155は器面の一部を欠損し、

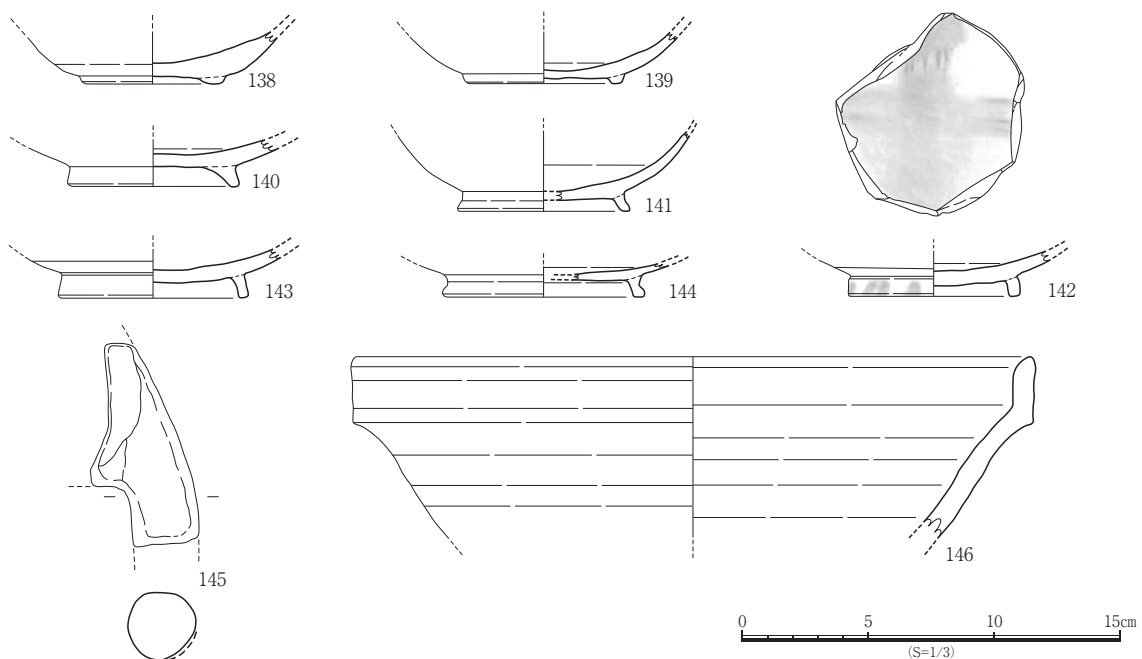


図2-22 第Ⅴ層出土遺物実測図6

2. 調査区の概要 (4) IV区

胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。156も器面の一部を欠損し、胎土には極細粒砂を含む。157～161は外周に溝を有するもので、ほぼ完存する。157は胎土に小礫を少し含む。158は胎土に極細粒～中粒砂を含む。159～161は胎土に粗粒砂～小礫を多く含む。

石製品(図2-23 162)

162は砥石である。側面の一部と片面に擦痕が明瞭に残る。石材は砂岩である。

ガラス製品(図2-23 163)

163はガラス玉で、完存する。色調は深い青色を呈し、気泡が多く含まれる。

第VI層出土遺物

土師器(図2-24 164)

164は羽釜で、口縁部のみ残存する。口縁部内外面と胴部内面にはヨコナデを施し、胴部外面にはハケ目が認められる。胎土には極細粒砂～小礫を含む。

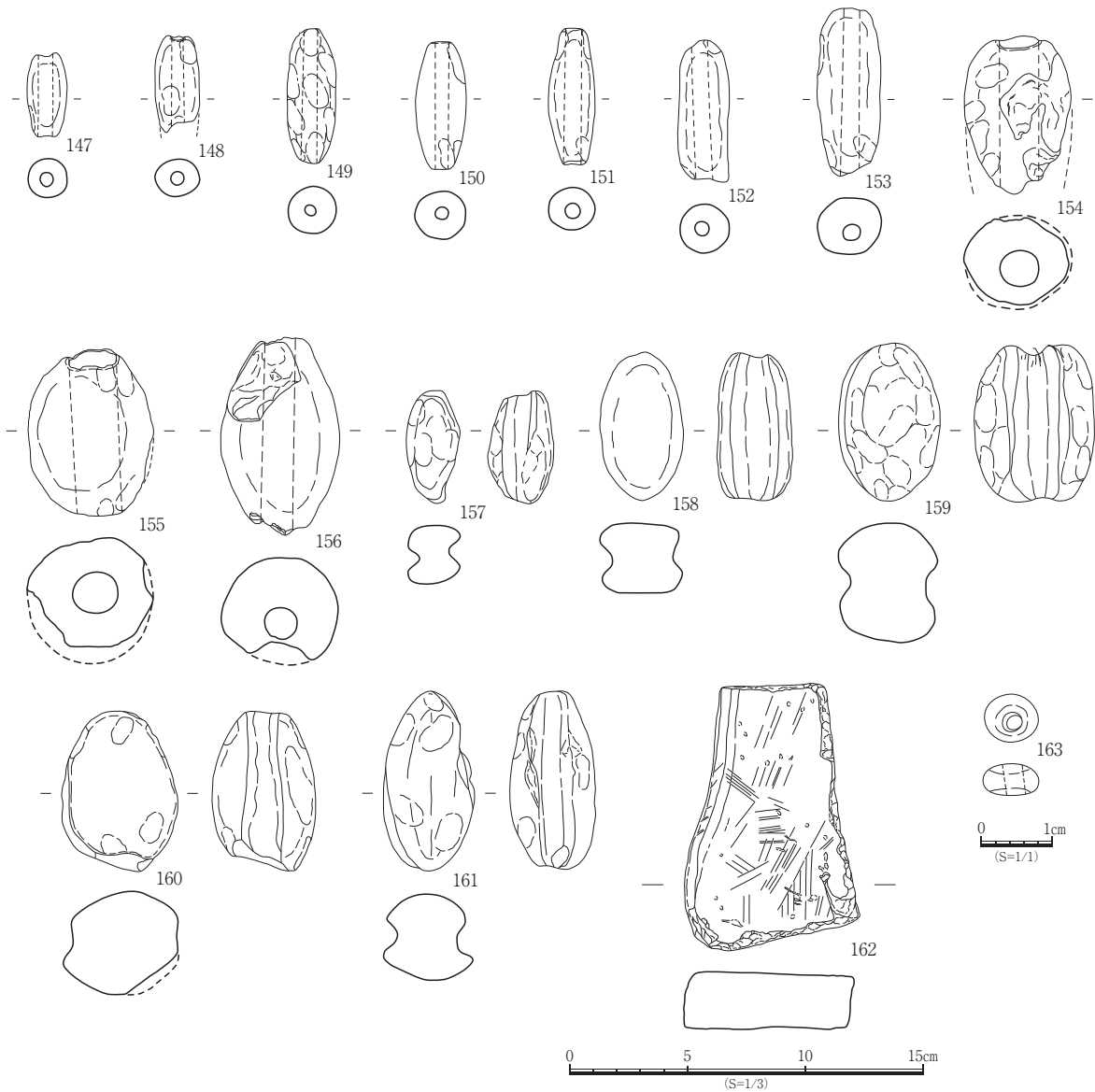


図2-23 第V層出土遺物実測図7

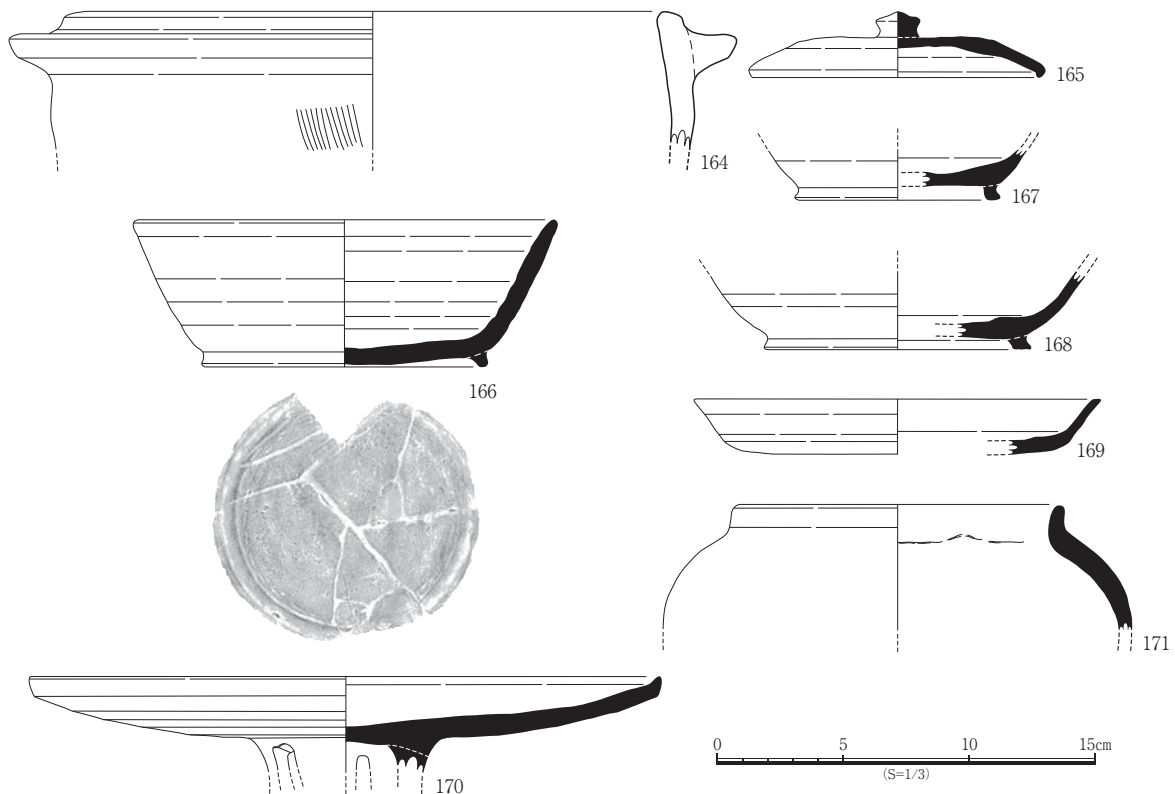


図2-24 第Ⅵ層出土遺物実測図1

須恵器(図2-24 165~171)

165は杯蓋である。口縁部内外面に回転ナデ、天井部内面には粗いナデを施す。天井部外面には切り離しのあと粗いナデを加え、胎土には極細粒砂~小礫を含む。

166~168は杯で、底部外面端部に輪高台を有するものである。166は全体を窺い知ることができ、口縁部から体部の内外面には回転ナデを施す。底部内外面は摩耗のため調整は不明で、高台内側には爪形状圧痕が残る。胎土には粗粒砂を含む。167・168は底部破片である。167は体部内外面に回転ナデ、底部内面にナデを施す。底部切り離しは回転ヘラ切りで、切り離しのあとナデを加える。高台内側には高台張り付け時のヨコナデが認められ、胎土には粗粒砂を含む。168も体部内外面に回転ナデ、底部内面にナデを施し、胎土には粗粒砂を含む。

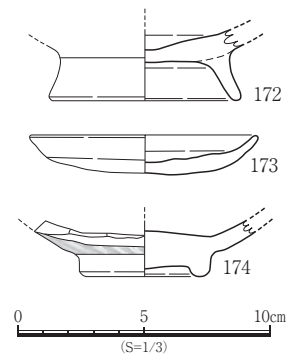
169は皿で、底部の大部分を欠損する。口縁部と底部内面には回転ナデを施し、胎土は精良である。

170は高杯で、脚の大部分を欠損する。杯体部外面には回転ヘラ削り、口縁部内外面には回転ナデを施し、杯底部内面は摩耗のため調整は不明である。脚部には矩形の透かしを4箇所施していたと考えられ、胎土には粗粒砂~小礫を含む。

171は広口壺の口縁部破片である。摩耗のため調整は不明で、焼成が極端に悪く瓦質状を呈する。胎土には粗粒砂~小礫を含む。

土師質土器(図2-25 172・173)

172は椀の底部破片である。ハの字状を呈する高台を有する。 図2-25 第Ⅵ層出土遺物実測図2



2. 調査区の概要 (4) IV区

摩耗のため調整は不明で、胎土は精良である。

173は小皿でほぼ完存する。摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂を含む。

青磁(図2-25 174)

174は碗で、底部のみ残存する。外面には蓮弁とみられる文様を施し、胎土には極細粒砂を含む。

土製品(図2-26 175~181)

175~181は土錘である。175~180は孔を穿つもので、摩耗のため調整は不明瞭である。175~179は平面形が棒状を呈する。175・176は片側を欠損し、胎土には粗粒砂~小礫を含む。177は胎土に粗粒砂、178は胎土に多くの粗粒砂~小礫、179は胎土に粗粒砂~小礫を含む。180は平面形が長方形を呈するもので、摩耗のため調整は不明である。胎土には粗粒砂~小礫を含む。181は外周に溝を有するもので、一部を欠損する。器面には指頭圧痕が残り、胎土には粗粒砂~小礫を含む。

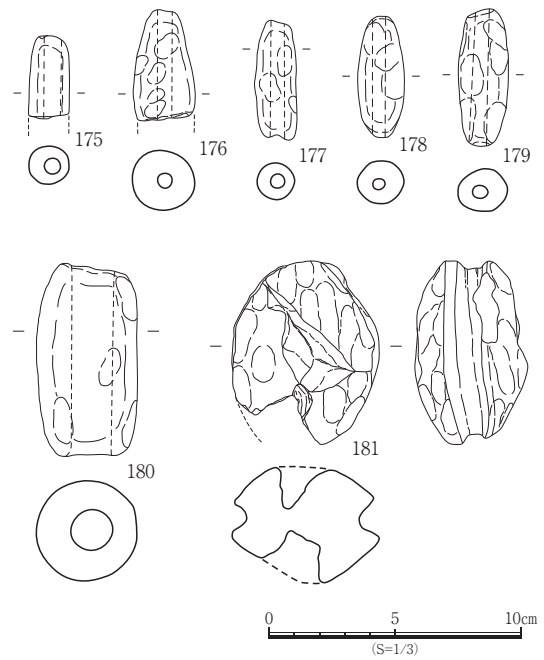


図2-26 第VI層出土遺物実測図3

第三章 遺構と遺物

1. I区

確認された遺構の時期は弥生時代, 古墳時代, 近世である。弥生時代では自然流路, 古墳時代では柱穴, 近世では土坑, 柱穴など検出されているが, 遺構密度は総じて低い。本調査区は氾濫原上に所在する微高地に位置しており, 当該期の居住域は西側に存在する丘陵裾部に存在するものと考えられる。

(1) 弥生時代

自然流路1条のみ検出されており, 北側はII区へと続く。

① 自然流路

SR-1 (図3-2)

調査区中央部で確認された自然流路で, 幅3.21~3.42m, 深さ92~111cmを測り, 延長6.80mを検出した。埋土は1層が小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細粒~細粒砂, 2層が鉄分を多く含む灰黄色(2.5Y6/2)極細粒~細粒砂質小~中礫, 3層が小礫を含む褐灰色(10YR5/1)シルト質極細粒~細粒砂, 4層が鉄分を多く含む灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂質小~中礫, 5層が小礫を含む褐灰色(10YR5/1)シルト質極細粒~細粒砂, 6層が鉄分を多く含む灰黄褐色(10YR5/2)細粒~中粒砂質小~中礫, 7層が



図3-1 I区遺構平面図(S=1/250)

1. I区 (3) 近世

小礫を含む褐灰色(10YR5/1)シルト質極細粒～細粒砂, 8層が鉄分を多く含む灰黄褐色(10YR5/2)細粒～中粒砂質小礫であった。出土遺物には弥生土器47点がみられたが, 図示できるものはなかった。

(2) 古墳時代

柱穴2個を検出しているが, 図示できる遺物は出土していない。

(3) 近世

土坑7基, 柱穴26個を検出しているが, 後世の削平を受けており遺存状態は良くない。

① 土坑

SK-1

調査区北西部で検出した隅丸長方形とみられる土坑で, 西側と北側は調査区外へ続く。確認長辺2.23m, 確認短辺0.63m, 深さ3～6cmを測り, 長軸方向はN-34°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し, 埋土は鉄分を含む炭化物混じりの黄灰色(2.5Y5/1)シルト質中粒砂で出土遺物は皆無であった。

SK-2

調査区東部で検出した長方形の土坑で, 長辺1.11m, 短辺0.23m, 深さ6cmを測り, 長軸方向はN-32°-Eを示す。断面は舟底状を呈し, 埋土は鉄分を含む黄灰色(2.5Y5/1)シルト質中粒砂で出土遺物は皆無であった。

SK-3(図3-3)

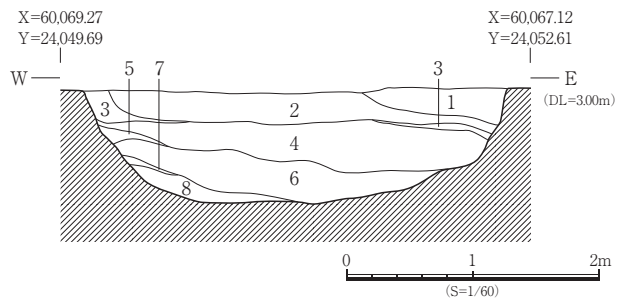
調査区東部で検出した隅丸方形の土坑で, 長辺1.02m, 短辺0.86m, 深さ7～12cmを測り, 長軸方向はN-28°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し, 埋土は1層が鉄分を含む炭化物混じりの黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細粒～細粒砂, 2層が鉄分を含む灰色(5Y6/1)シルト質極細粒砂で出土遺物は皆無であった。

SK-4

調査区東部で検出した方形とみられる土坑で, 東側は調査区外へ続き, 長辺は不明である。短辺2.22m, 深さ4～6cmを測り, 長軸方向はN-53°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し, 埋土は鉄分を含む炭化物混じりの黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細粒砂で出土遺物には土師質土器2点, 近世陶器3点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-5

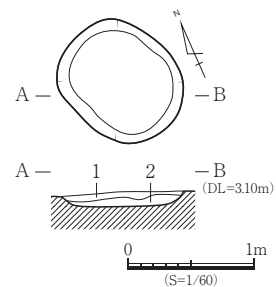
調査区東部で検出した方形の土坑で, 長辺3.33m, 短辺2.71m, 深さ6～8cmを測る。SK-6・7に切られ, 長軸方向はN-56°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し, 埋土は鉄分を含む炭化物混じりの黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細粒砂で出土遺物には弥生土器1点, 土師質土器4点, 備前焼1点, 近世磁器1点がみられたが, 図示できるものはなかった。



遺構埋土

1. 小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細粒～細粒砂
2. 鉄分を多く含む灰黄褐色(2.5Y6/2)極細粒～細粒砂質小～中礫
3. 小礫を含む褐灰色(10YR5/1)シルト質極細粒～細粒砂
4. 鉄分を多く含む灰黄褐色(2.5Y6/2)細粒砂質小～中礫
5. 3と同一
6. 鉄分を多く含む灰黄褐色(10YR5/2)細粒～中粒砂質小～中礫
7. 3と同一
8. 鉄分を多く含む灰黄褐色(10YR5/2)細粒～中粒砂質小礫

図3-2 SK-1



遺構埋土

1. 鉄分を含む炭化物混じりの黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細粒～細粒砂
2. 鉄分を含む灰色(5Y6/1)シルト質極細粒砂

図3-3 SK-3

SK-6

調査区東部で検出した方形とみられる土坑で、東側は調査区外へ続き、長辺は不明である。短辺2.03m、深さ3～8cmを測る。SK-5を切っており、長軸方向はN-56°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は鉄分を含む炭化物混じりの黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細粒砂で出土遺物には土師質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7

調査区東部で検出した方形の土坑で、長辺1.42m、短辺1.13m、深さ8cmを測る。SK-5を切っており、長軸方向はN-35°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は鉄分を含む炭化物混じりの黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細粒砂で出土遺物は皆無であった。

2. II区

確認された遺構の時期は弥生時代、古墳時代、近世である。弥生時代では自然流路、古墳時代では土坑・柱穴、近世では畝状遺構・柱穴など検出されている。I区と同じ立地条件であり、遺構密度は総じて低い。

(1) 弥生時代

自然流路1条のみ検出されており、南側はI区へ続く。

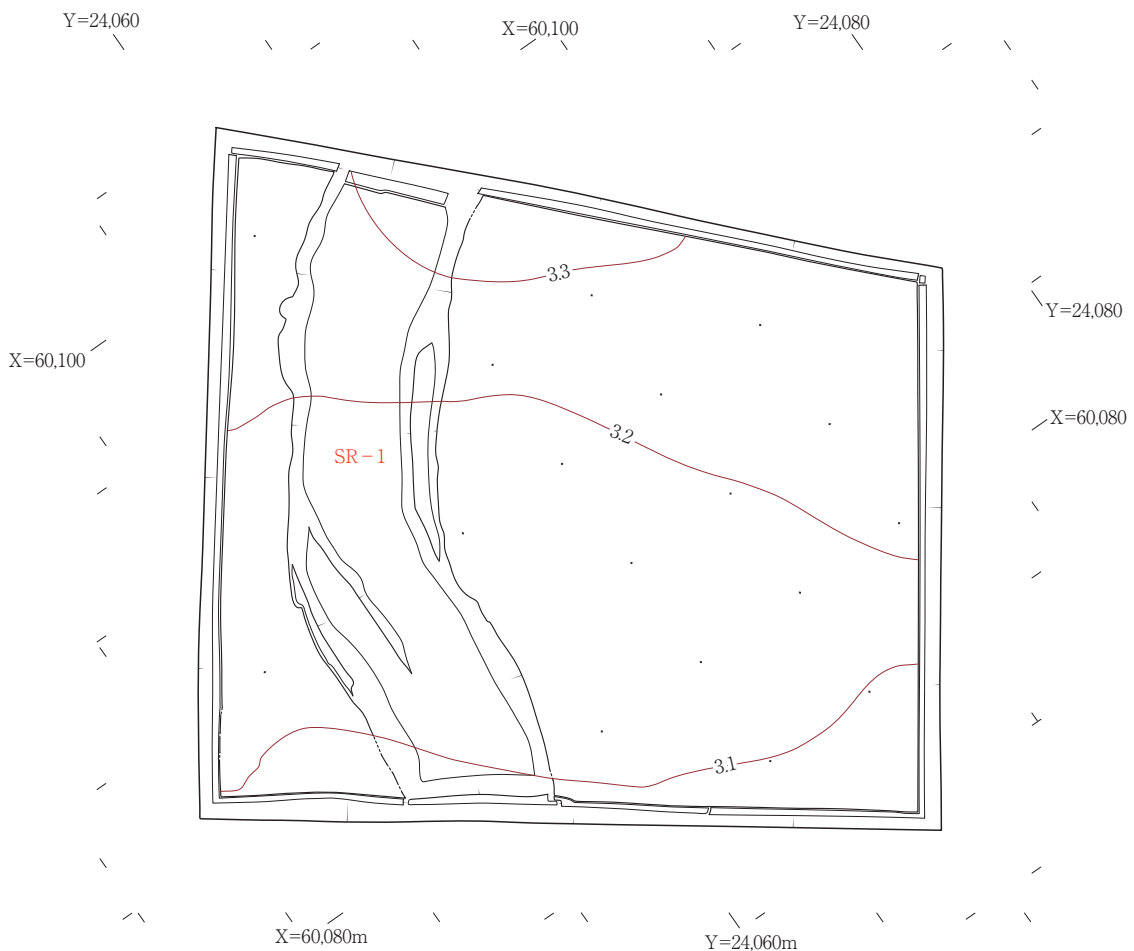


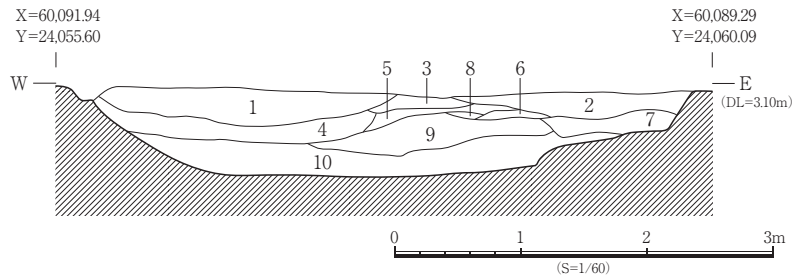
図3-4 II区遺構平面図_弥生時代(S=1/250)

2. II区 (2) 古墳時代

① 自然流路

SR-1 (図3-5)

調査区北西部で確認された自然流路で、幅4.92～5.67m、深さ68～95cmを測り、延長21.60mを検出した。埋土は1層が灰褐色(7.5YR4/2)極細粒～粗粒砂質小～中礫、2層が鉄分を含む褐灰色(10YR6/1)シルト質極細粒砂、3層が鉄分を含む黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細粒～細粒砂質シルト、4層が褐灰色(7.5YR5/1)細粒～粗粒砂質小～中礫、5層が鉄分を含む黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細粒～細粒砂、6層が鉄分を含む灰色(5Y6/1)極細粒～細粒砂、7層が鉄分を含む灰色(5Y5/1)シルト質極細粒～中粒砂、8層が灰褐色(5YR5/2)細粒～粗粒砂質小～中礫、9層が灰褐色(7.5YR4/2)粗粒砂質小～大礫、10層がにぶい褐色(7.5YR5/3)中粒～粗粒砂質小～大礫であった。出土遺物には弥生土器148点がみられ、弥生土器3点(182～184)が図示できた。



遺構埋土

- | | |
|-------------------------------------|--------------------------------|
| 1. 灰褐色(7.5YR4/2)極細粒～粗粒砂質小～中礫 | 6. 鉄分を含む灰色(5Y6/1)極細粒～粗粒砂 |
| 2. 鉄分を含む褐灰色(10YR6/1)シルト質極細粒砂 | 7. 鉄分を含む灰色(5Y5/1)シルト質極細粒～中粒砂 |
| 3. 鉄分を含む黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細粒～細粒砂質シルト | 8. 灰褐色(5YR5/2)細粒～粗粒砂質小～中礫 |
| 4. 褐灰色(7.5YR5/1)細粒～粗粒砂質小～中礫 | 9. 灰褐色(7.5YR4/2)粗粒砂質小～大礫 |
| 5. 鉄分を含む黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細粒～細粒砂 | 10. にぶい褐色(7.5YR5/3)中粒～粗粒砂質小～大礫 |

図3-5 SR-1

(5Y6/1)極細粒～細粒砂、7層が鉄分を含む灰色(5Y5/1)シルト質極細粒～中粒砂、8層が灰褐色(5YR5/2)細粒～粗粒砂質小～中礫、9層が灰褐色(7.5YR4/2)粗粒砂質小～大礫、10層がにぶい褐色(7.5YR5/3)中粒～粗粒砂質小～大礫であった。出土遺物には弥生土器148点がみられ、弥生土器3点(182～184)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-6 182～184)

182は壺と考えられる底部破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。

183は脚付有孔鉢と考えられるもので、摩耗のため調整は不明である。底部に孔を穿ち、胎土には中粒砂～小礫を含む。

184は高杯で、脚柱部のみ残存する。摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にはしぼり目、外面には指頭圧痕が残る。胎土には粗粒砂～小礫を含む。

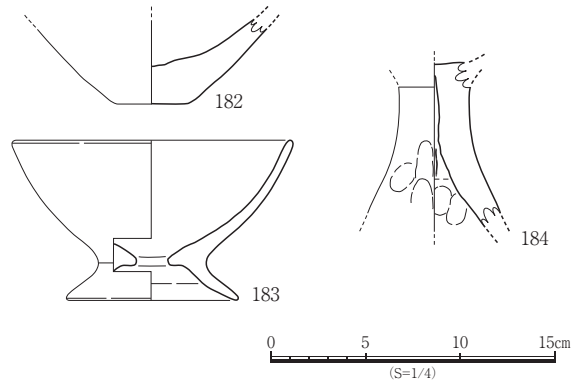


図3-6 SR-1出土遺物実測図

(2) 古墳時代

土坑2基、溝跡3条、柱穴8個を検出しているが、後世の削平を受けており遺存状態は良くない。なお、SD-1～3は弥生時代の自然流路に沿う形で検出されており、当該流路が埋没する最終時期に地形を利用して掘削されたものと考えられる。

① 土坑

SK-1 (図3-8・9)

調査区中央部で検出した円形の土坑で、長径1.94m、短径1.83m、深さ6～12cmを測り、長軸方向

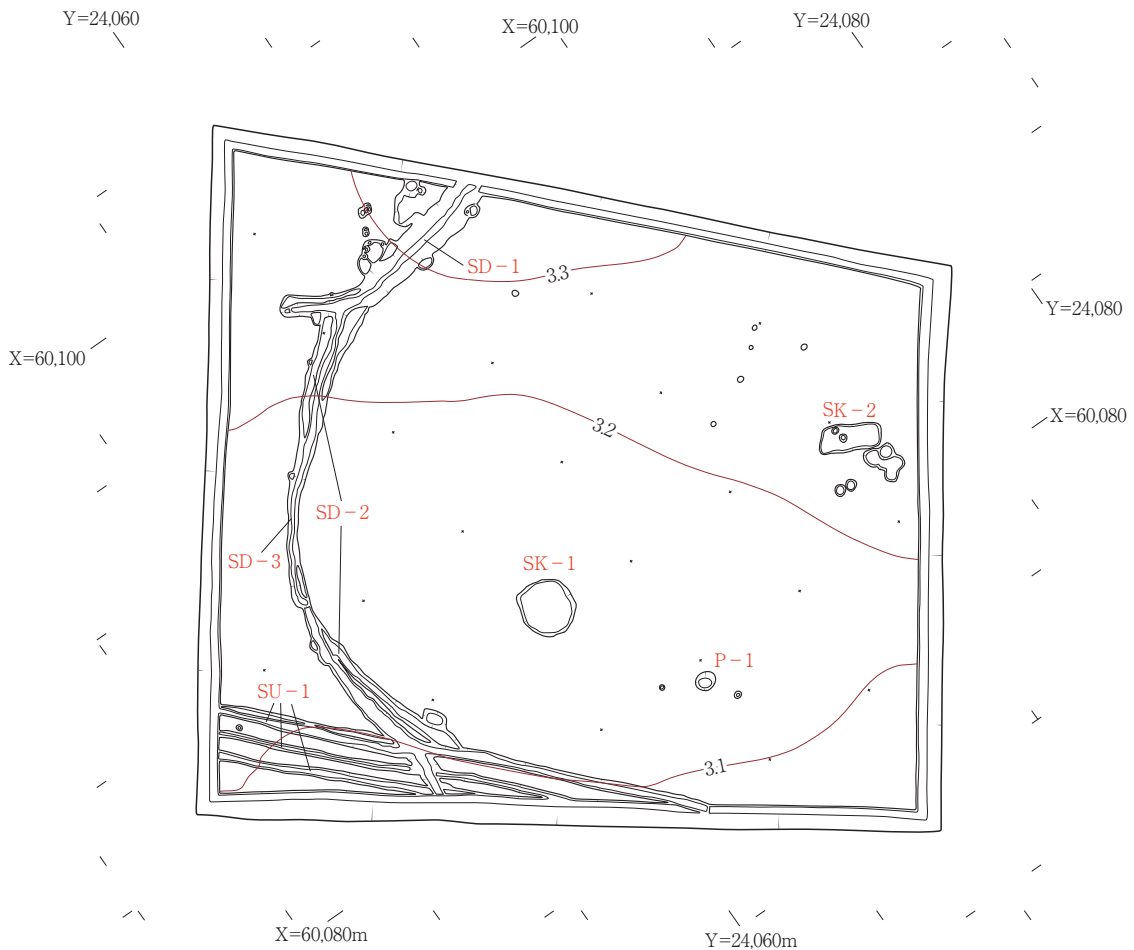


図3-7 II区遺構平面図_古墳時代・近世(S=1/250)

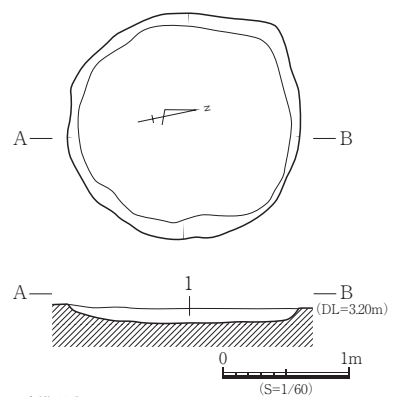
はN - 16° - Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は鉄分を含む黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細粒～細粒砂であった。出土遺物には土師器636点がみられ、土師器6点(185～190)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-12 185～190)

185は椀である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面には煤が付着する。胎土には中粒砂～小礫を含む。

186～190は高杯で、186～188は全体を窺い知ることができる。186は摩耗のため調整は不明瞭であるが、杯部外面にヨコナデ調整, 脚柱部内面にナデ調整, 脚裾部外面にハケ調整が認められる。胎土には細粒砂～小礫を含む。187も摩耗のため調整は不明瞭であるが、杯部外面にヨコナデ調整, 脚柱部内面にはナデ調整が認められる。胎土には極細粒～中粒砂を含む。188も摩耗のため調整は不明瞭であるが、脚柱部外面にハケ調整, 内面にヨコナデ調整が認められる。胎土には粗粒砂を含む。189は杯部のみ残存し外面にヨコナデを施すが、内面は摩耗のため調整は不明である。胎土には粗粒砂～小礫を含む。190は脚部のみ残存し、摩耗のため調整は不明瞭であるが、脚裾部内外面にヨコナデ調整, 脚柱部内面にはナデ調整が認められる。胎土には粗粒砂



遺構埋土
1. 鉄分を含む黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細粒～細粒砂

図3-8 SK-1

2. II区 (2)古墳時代

～小礫を含む。

SK-2

調査区東部で検出した長方形の土坑で、長辺1.98m、短辺0.85m、深さ5～7cmを測り、長軸方向はN-61°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含む褐灰色(10YR4/1)極細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

② 溝跡

SD-1 (図3-10)

調査区北部で検出した東西溝跡で、東側は調査区外へ続く。幅0.69～1.21m、深さ21～39cmを測り、基底面は西(2.997m)から東(2.912m)に傾斜し、7.90mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が小～中礫を含む黒褐色(10YR3/1)極細粒砂質シルト、2層が小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)極細粒～細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器45点がみられ、土師器2点(191・192)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-12 191・192)

191は壺である。口辺部外面にヨコナデ、胴部外面上半部にタタキとヨコナデ、胴部外面中央部にヘラ削り、胴部外面下半部にタタキを施す。内面は摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部上端に明瞭な接合痕がみられ、指頭圧痕も残る。胎土には粗粒砂～小礫を含む。

192は高杯の杯部破片で、口縁部を欠損する。摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂～小礫を含む。

SD-2 (図3-11)

調査区西部で検出した屈曲する南北溝跡で、北側はSD-1に切られ南側は調査区外へ続く。幅0.29～0.61m、深さ10～14cmを測り、基底面は北(3.108m)から南(3.034m)に傾斜し、16.90mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は小礫を含む褐灰色(10YR5/1)極細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器8点がみられ、土師器1点(193)が図示できた。

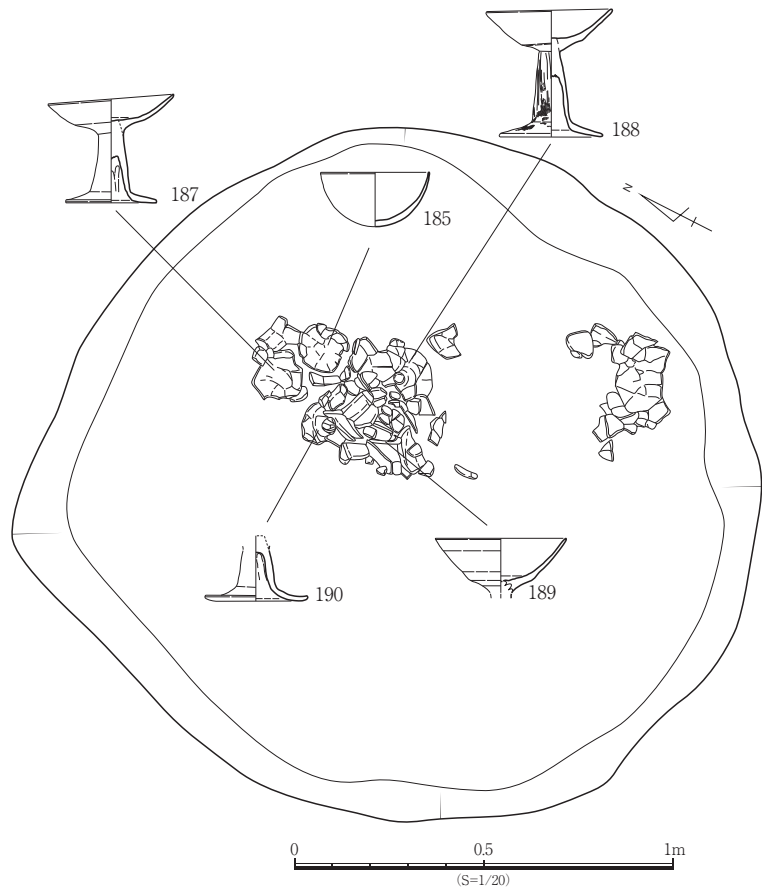
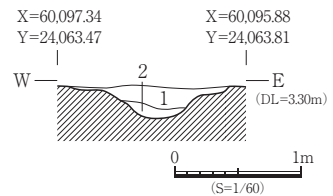


図3-9 SK-1遺物出土状態

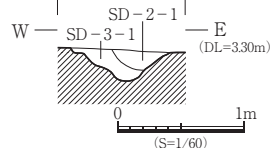


遺構埋土

1. 小～中礫を含む黒褐色(10YR3/1)極細粒砂質シルト
2. 小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)極細粒～細粒砂質シルト

図3-10 SD-1

X=60,094.83 X=60,094.03
Y=24,058.23 Y=24,058.87



遺構埋土

- SD-2-1 小礫を含む褐灰色(10YR5/1)極細粒砂質シルト
- SD-3-1 小礫を含む黒褐色(10YR3/1)極細粒砂質シルト

図3-11 SD-2・3

出土遺物

土師器(図3-12 193)

193は壺で口辺部を欠損する。摩耗のため調整は不明であるが、胴部外面にはヘラ削りの痕跡が残る。胎土には粗粒砂を含む。

SD-3(図3-11)

調査区西部で検出した屈曲する南北溝跡で、ほぼSD-2と重なるように存在し大部分が切られている。幅0.33~0.49m、深さ19~23cmを測り、基底面は南(2.980m)から北(2.945m)に傾斜し、18.10mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/1)極細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

③ 柱穴

P-1

調査区南東部で検出された柱穴である。長径32cm、短径30cmの楕円形で、深さ22cmを測る。埋土は鉄分、マンガン粒を含む小礫混じりの黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質シルトで、出土遺物には土師器1

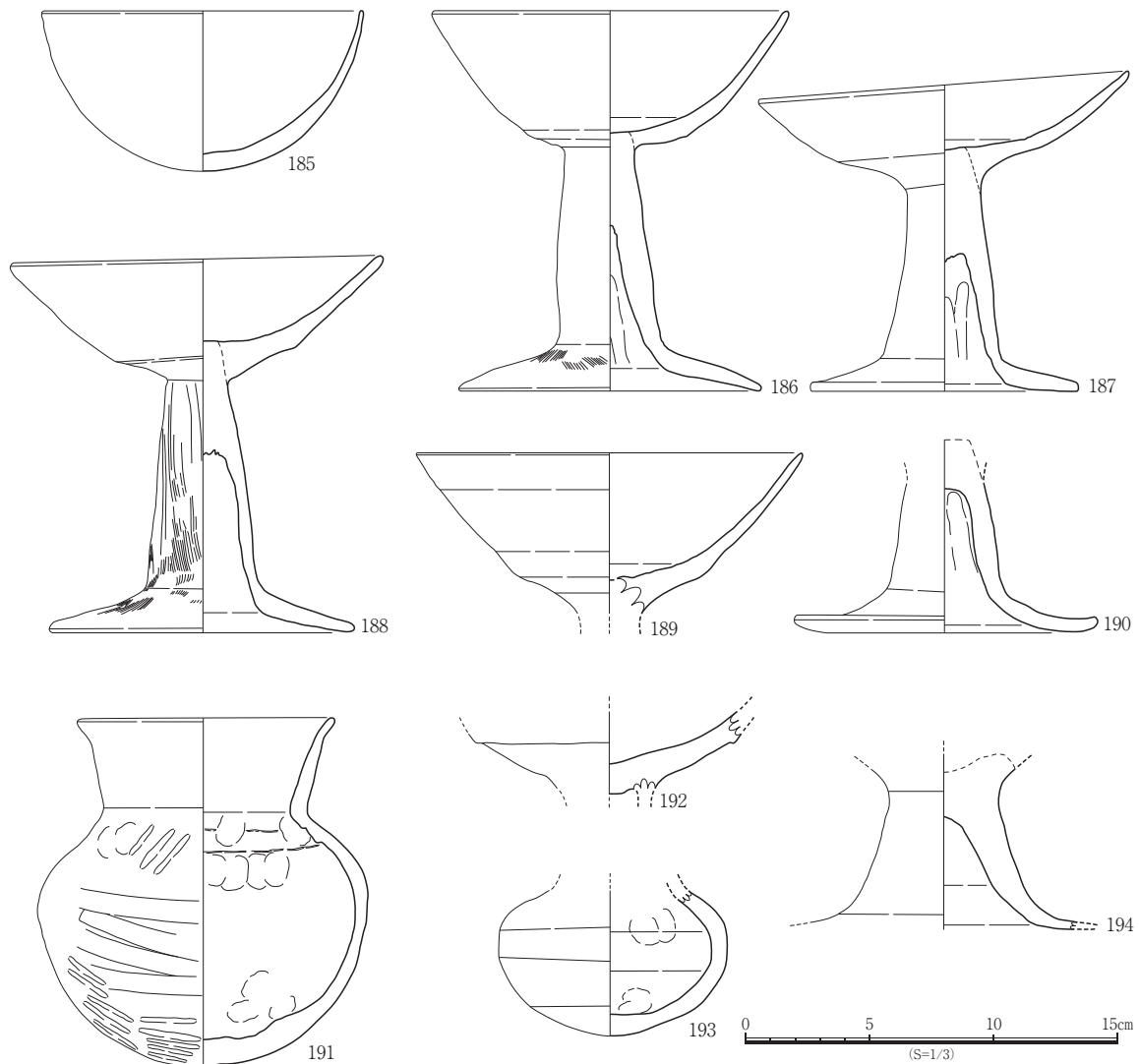


図3-12 SK-1, SD-1・2, P-1出土遺物実測図

3. Ⅲ区 (1) 古墳時代

点がみられ、土師器1点(194)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-12 194)

194は高杯の脚部破片で、脚端部を欠損する。摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂～小礫を含む。

(3) 近世

畝状遺構1箇所、柱穴8個を検出しているが、後世の削平を受けており遺存状態は良くない。

① 畝状遺構

SU-1(図3-13)

調査区南部で畝間の痕跡を3条検出した。検出長9.80～16.60m、幅0.19～0.36m、深さ4～21cmを測り、主軸方向はN-44°-Wを示す。畝間は0.60～0.70m間隔で平行に延び、畝幅は0.20～0.50mを測る。埋土は鉄分、炭化物混じりの黄灰色(2.5Y5/1)極細粒～細粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器1点、瓦質土器1点、近世陶器1点がみられ、瓦質土器1点(195)が図示できた。

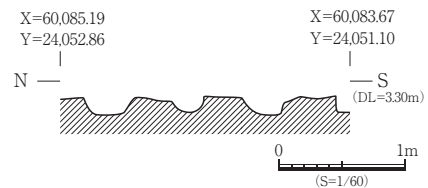


図3-13 SU-1

出土遺物

瓦質土器(図3-14 195)

195は鍋である。口縁部内外面と胴部内面はヨコナデ、胴部外面はナデと指オサエを施す。外面には被熱痕が認められ、胎土は精良である。

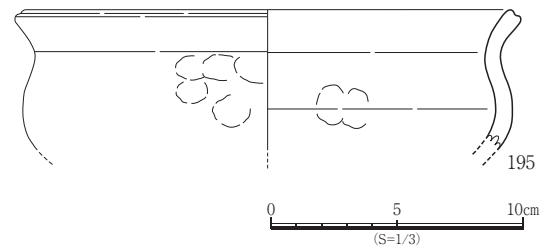


図3-14 SU-1出土遺物実測図

3. Ⅲ区

確認された遺構の時期は古墳時代、古代、中世である。古墳時代では竪穴建物跡4軒を始めとして集落を構成する遺構を検出した。古代では官衙関連とみられる掘立柱建物跡を中心に奈良時代から平安時代の遺構を検出した。隅丸方形の掘方を持つ建物跡は4棟を数え、当該期の建物群が展開していたものと考えられる。中世では調査区北西部の平坦面に掘立柱建物跡2棟が検出されており、当該期の集落が存在していたことが窺える。

また、本調査では廃土置き場の関係で北側と南側に分けて調査を行ったが、本報告では一つの調査区として報告する。

(1) 古墳時代

竪穴建物跡を始めとした遺構は調査区中央部から南東部にかけて分布している。調査区北西部は中世段階の地形改変により削平されたと考えられ、当該期の遺構が存在していた可能性も考えられる。

確認された遺構は竪穴建物跡、土坑などであるが、後世の削平を受けており遺存状態は良くない。

① 竪穴建物跡

ST-1(図3-16)

調査区北東部で検出した方形を呈する竪穴建物跡で、SK-6、SD-3・4に切られる。一辺は4.28～4.40mを測り、主軸方向はN-82°-Wを示す。遺存する壁高は2～13cmと浅く、床面の標高は4.287

～4.384mを測る。付属遺構として、壁溝と15個の柱穴を確認した。このうち、主柱穴と考えられる柱穴は位置関係と深さからP-1・2とみられ、2本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-1は径28cmの円形で、深さ27cm、P-2は径32～39cmの楕円形で、深さ40cmを測る。柱間寸法は1.35mである。壁溝はほぼ壁に沿って巡っていたとみられ、幅8～13cm、深さ1～3cm、延長5.04mを測る。また、中央ピットは確認できなかった。埋土は1層が小礫を含む黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルト、2層が小礫を含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には土師器1,108点、須恵器7点、石製品2点がみられ、土師器12点(196～207)、須恵器1点(208)、石製品1点(209)が図示できた。

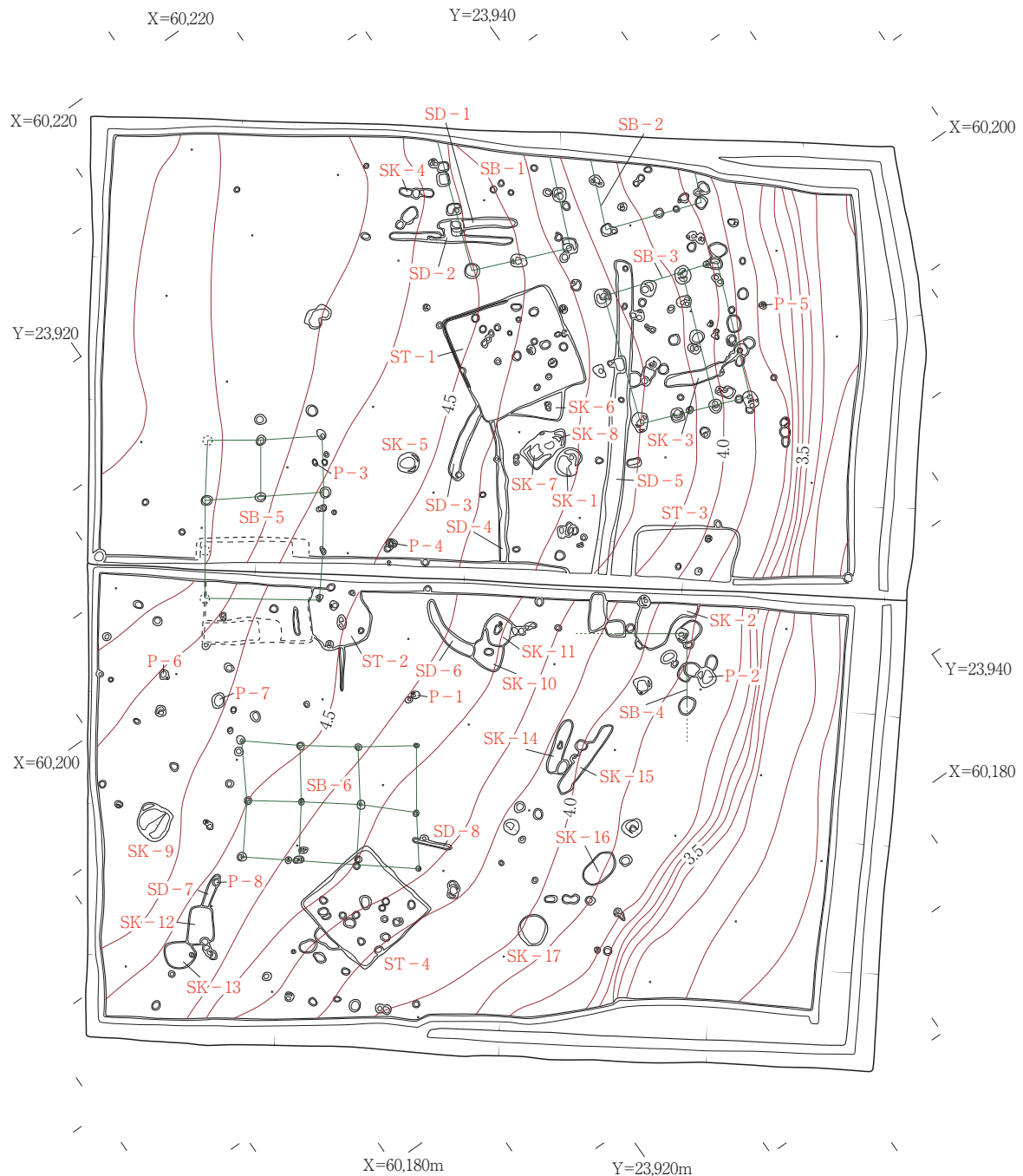


図3-15 Ⅲ区遺構平面図(S=1/250)

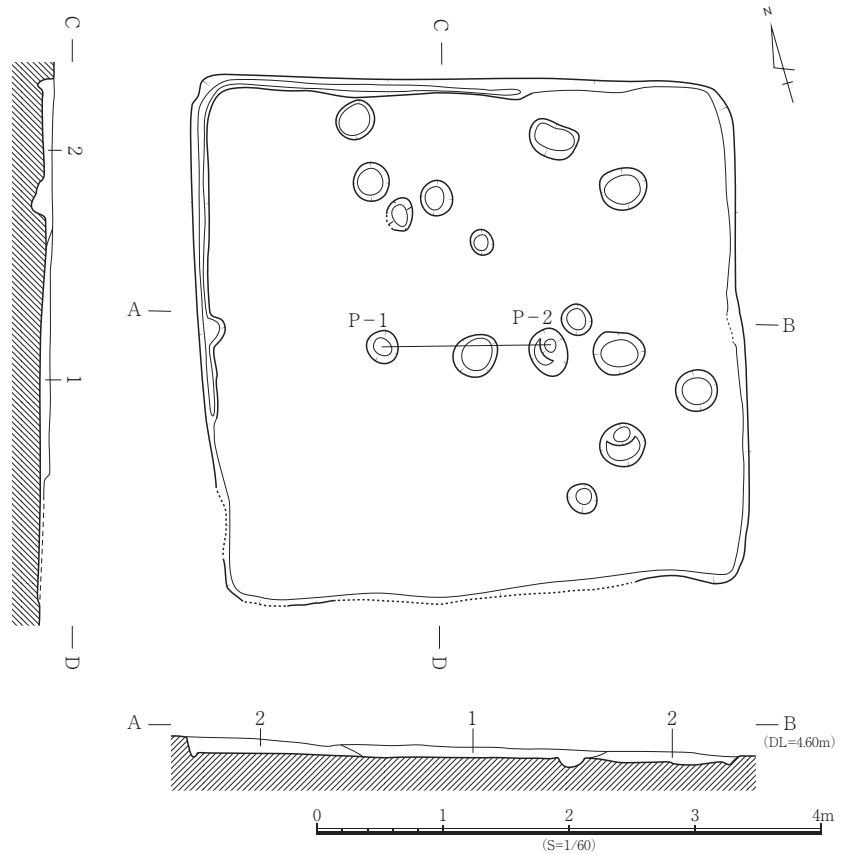
3. Ⅲ区 (1) 古墳時代

出土遺物

土師器

(図3-17 196~207)

196~203は高杯で、196・197は杯部のみ残存する。196は摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂~小礫を多く含む。197も摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂~小礫を含む。198は杯口縁部と脚裾部を欠損する。摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂~小礫を多く含む。199~203は脚部のみ残存し、脚裾部を欠損する。199は摩耗のため調整は不明で、脚柱部内面にはしほり目が残る。胎土には粗粒砂~小礫を含む。200・201も摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂~小礫を含む。202も脚柱部外面は摩耗



遺構埋土

1. 小礫を含む黒褐色 (10YR3/1) 細粒砂質シルト
2. 小礫を含む灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂質シルト

図3-16 ST-1

のため調整は不明であるが、内面にはヘラ削りの痕跡が残る。胎土には粗粒砂~小礫を含む。203は摩耗のため調整は不明瞭であるが、脚柱部外面には指頭圧痕が認められる。胎土には粗粒砂~小礫を含む。

204は鉢で、全体を窺い知ることが出来る。平底を呈し、器面は摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂~小礫を多く含む。

205・206は壺である。205は全体を窺い知ることができるもので、器面は摩耗のため調整は不明である。胎土には粗粒砂~小礫を多く含む。206は口辺部のみ残存し、器面は摩耗のため調整は不明である。胴上半部内面には接合痕が残り、胎土には粗粒砂~小礫を含む。

207は甕で、口辺部のみ残存する。摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂~小礫を含む。

須恵器(図3-17 208)

208は甗と考えられるもので、円孔は残存していない。口辺部と底部を欠損し、胴上半部から胴中央部外面には回転ナデ、胴下半部には回転ヘラ削りを施し、内面には回転ナデ調整が認められる。胴上半部と頸部には櫛描波状文がみられ、胎土は精良である。

石製品(図3-17 209)

209は叩石である。両面と三つの側面に敲打痕が認められ、石材は砂岩である。

ST-2(図3-18)

調査区西部で検出した隅丸方形を呈する竪穴建物跡で、西側は試掘トレンチに切られ、北東側は

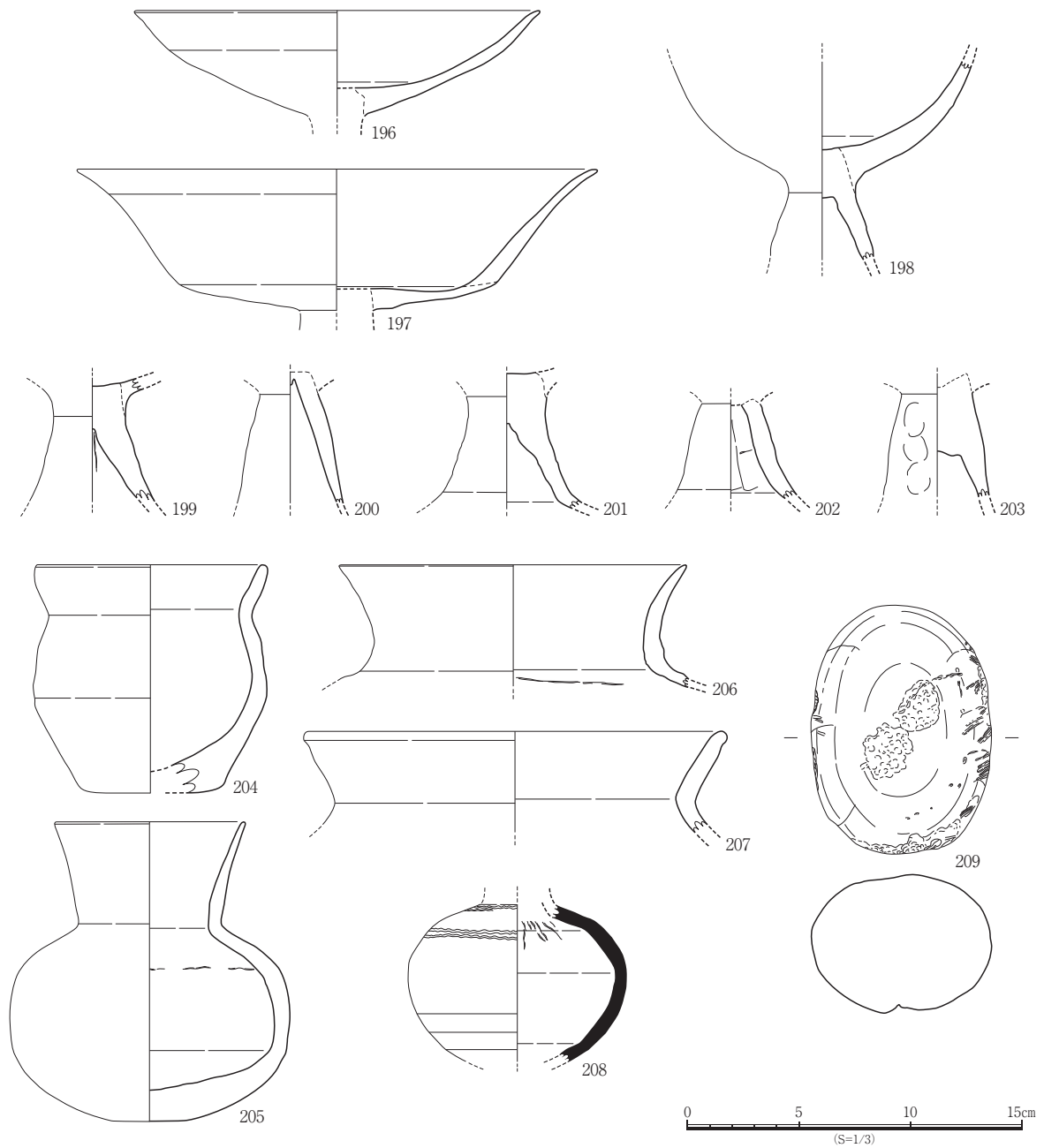


図3-17 ST-1出土遺物実測図

調査方法の都合により残った未調査箇所へ続く。一辺は2.36mを測り、主軸方向はN-23°-Eを示す。遺存する壁高は4~8cmと浅く、床面の標高は4.386~4.458mを測る。付属遺構として中央ピットと5個の柱穴を確認した。このうち、主柱穴と考えられる柱穴は位置関係と深さからP-2~5とみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径26cmの円形で、深さ47cm、P-3は径19~24cmの楕円形で、深さ51cm、P-4は径23cmの円形で、深さ41cm、P-5は径27~34cmの楕円形で、深さ37cmを測る。柱間寸法は1.22~1.82mである。中央ピット(P-1)は長径56cm、短径34cmの楕円形で深さ9cmを測る。埋土は1層が小礫を含む黒褐色(10YR3/1)極細粒砂質シルト、2層が明黄褐色(10YR6/6)極細粒砂質シルトで、中央ピットの埋土は炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)極細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器46点がみられたが、図示できるものはなかった。

3. Ⅲ区 (1) 古墳時代

ST-3 (図3-19)

調査区東部で検出した方形を呈する竪穴建物跡で、南西側は調査方法の都合により残った未調査箇所へ続く。一辺は3.90～4.05mを測り、主軸方向は不明である。遺存する壁高は3～22cmと浅く、床面の標高は3.868～3.972mを測る。付属遺構として3個の柱穴を確認したが、どれも浅く主柱穴として断定できなかった。埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルトで、出土遺物には土師器361点、須恵器14点がみられ、土師器4点(210～213)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-20 210～213)

210～213は高杯である。210は杯部のみ残存し、口縁端部を欠損する。摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。211は脚部のみ残存し、脚裾部を欠損する。摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂～小礫を含む。212は杯部の一部と脚柱部のみ残存し、摩耗のため調整は不明である。胎土には粗粒砂～小礫を含む。213は脚柱部のみ残存し、脚裾部を欠損する。摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂～小礫を含む。

ST-4 (図3-21)

調査区西部で検出した方形を呈する竪穴建物跡である。一辺は3.39～3.51mを測り、主軸方向はN-12°-Wを示す。遺存する壁高は6～16cmと浅く、床面の標高は4.008～4.116mを測る。付属遺構として、12個の柱穴を確認した。このうち、主柱穴と考えられる柱穴は位置関係からP-1～4とみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-1は径26～32cmの楕円形で、深さ10cm、P-2は径24cmの円形で、深さ20cm、P-3は径32cmの円形で、深さ13cm、P-4は径29cmの円形で、深さ9cmを測る。柱間寸法は2.10～2.34mである。また、中央ピットは確認できなかった。埋土は1層が小礫を含む黒褐色(10YR4/2)細粒～粗粒砂質シルト、2層が小礫を含む灰黄褐色(10YR4/2)極細粒～細粒砂質シルト、3層が小礫を含む灰褐色(7.5YR4/2)極細粒～細粒砂質シルト、4層が小礫を含む黒褐色(10YR3/1)極細粒砂質シルトで、出土遺物には土師器897点、須恵器12点がみられ、土師器20点(214～233)、石製品1点(234)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-22 214～233)

214～228は高杯で、214～221は脚部のみ残存する。214は摩耗のため調整は不明で、胎土には

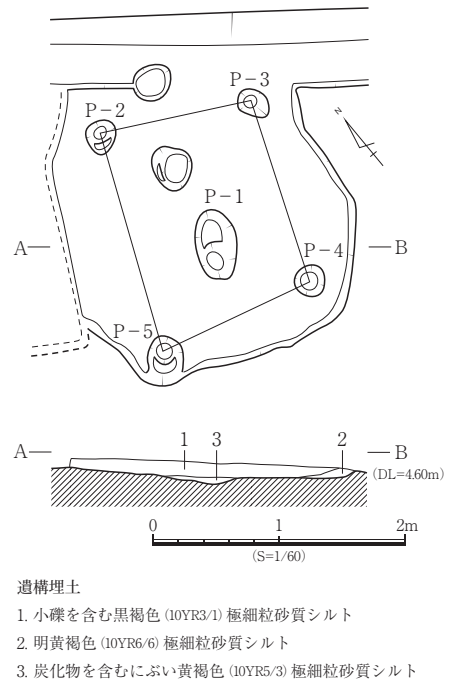


図3-18 ST-2

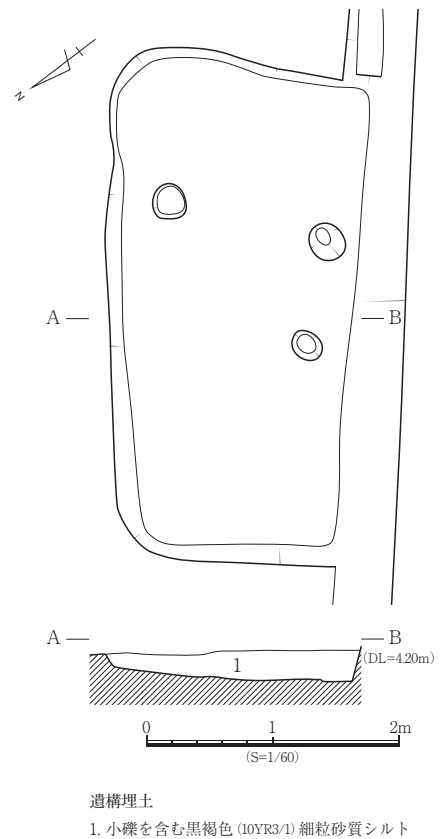


図3-19 ST-3

粗粒砂～小礫を含む。215は大きく歪んでおり、調整は摩耗のため不明で、胎土には粗粒砂～小礫を含む。

216も摩耗のため調整は不明で、胎土には極細粒砂～小礫を含む。

217は脚柱部内面にヘラ削りが認められるが、他の部位は摩耗のため調整は不明である。胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。

218は摩耗のため調整は不明だが、外面に指頭圧痕が残る。胎土には粗粒砂～小礫を含む。

219は脚柱部内面にヘラ削りが認められるが、他の部位は摩耗のため調整は不明である。胎土には粗粒砂～小礫を含む。

220は摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂～小礫を含む。221は脚裾部外面にヨコナデが認められるが、他の部位は摩耗のため調整は不明である。胎土には粗粒砂を含む。

222～228は脚柱部のみ残存するものである。222・223は摩耗のため調整は不明であるが、内外面に指頭圧痕が残る。胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。

224も摩耗のため調整は不明であるが、内外面に指頭圧痕、内面にしぼり目が残る。胎土には粗粒砂～小礫を含む。

225は摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂～小礫を含む。226は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にナデの痕跡が残る。胎土には粗粒砂～小礫を含む。

227・228は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にしぼり目が残る。227の胎土には多くの粗粒砂～小礫、228の胎土には粗粒砂を含む。

229～232は甕である。229は全体を窺い知ることができるもので、器面は摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴上半部内面にはハケ目が残る。胴下半部には径0.5cmの円孔を焼成のあと内側から穿

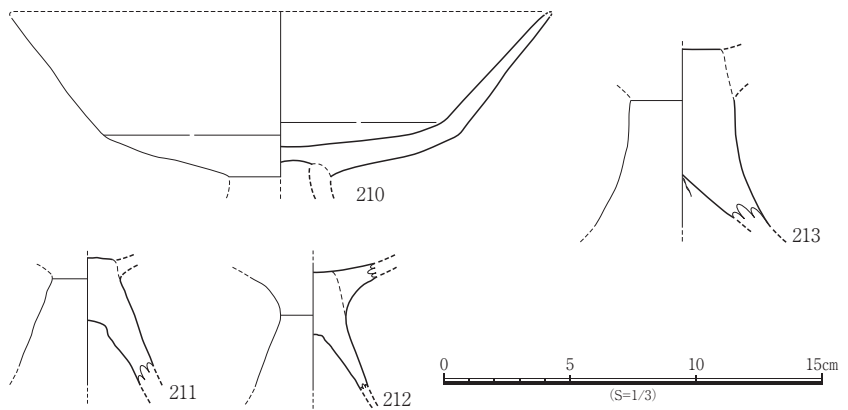
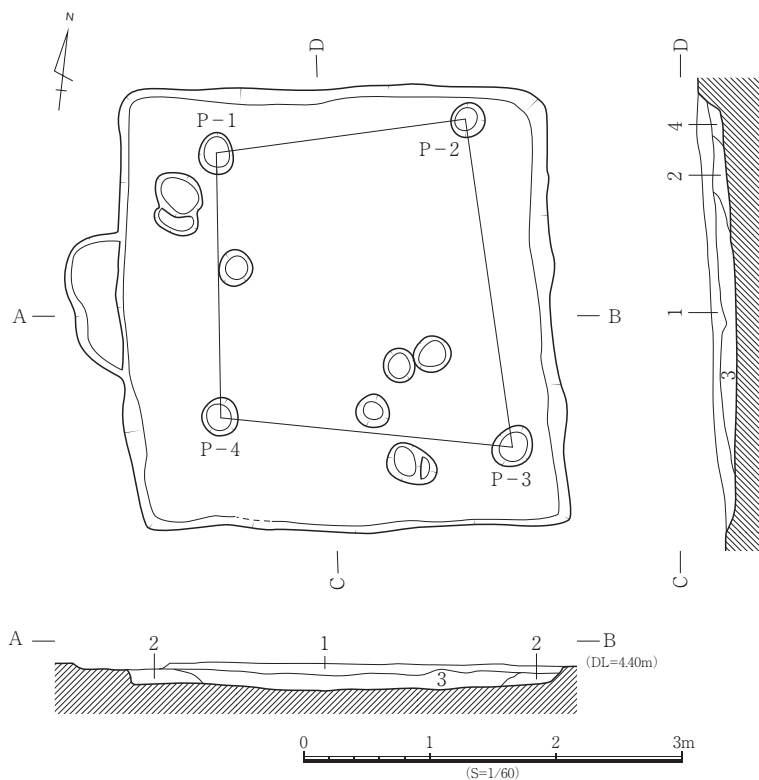


図3-20 ST-3出土遺物実測図



遺構埋土

1. 小礫を含む黒褐色 (10YR4/2) 細粒～粗粒砂質シルト
2. 小礫を含む灰黄褐色 (10YR4/2) 極細粒～細粒砂質シルト
3. 小礫を含む灰褐色 (7.5YR4/2) 極細粒～細粒砂質シルト
4. 小礫を含む黒褐色 (10YR3/1) 極細粒砂質シルト

図3-21 ST-4

3. Ⅲ区 (1) 古墳時代

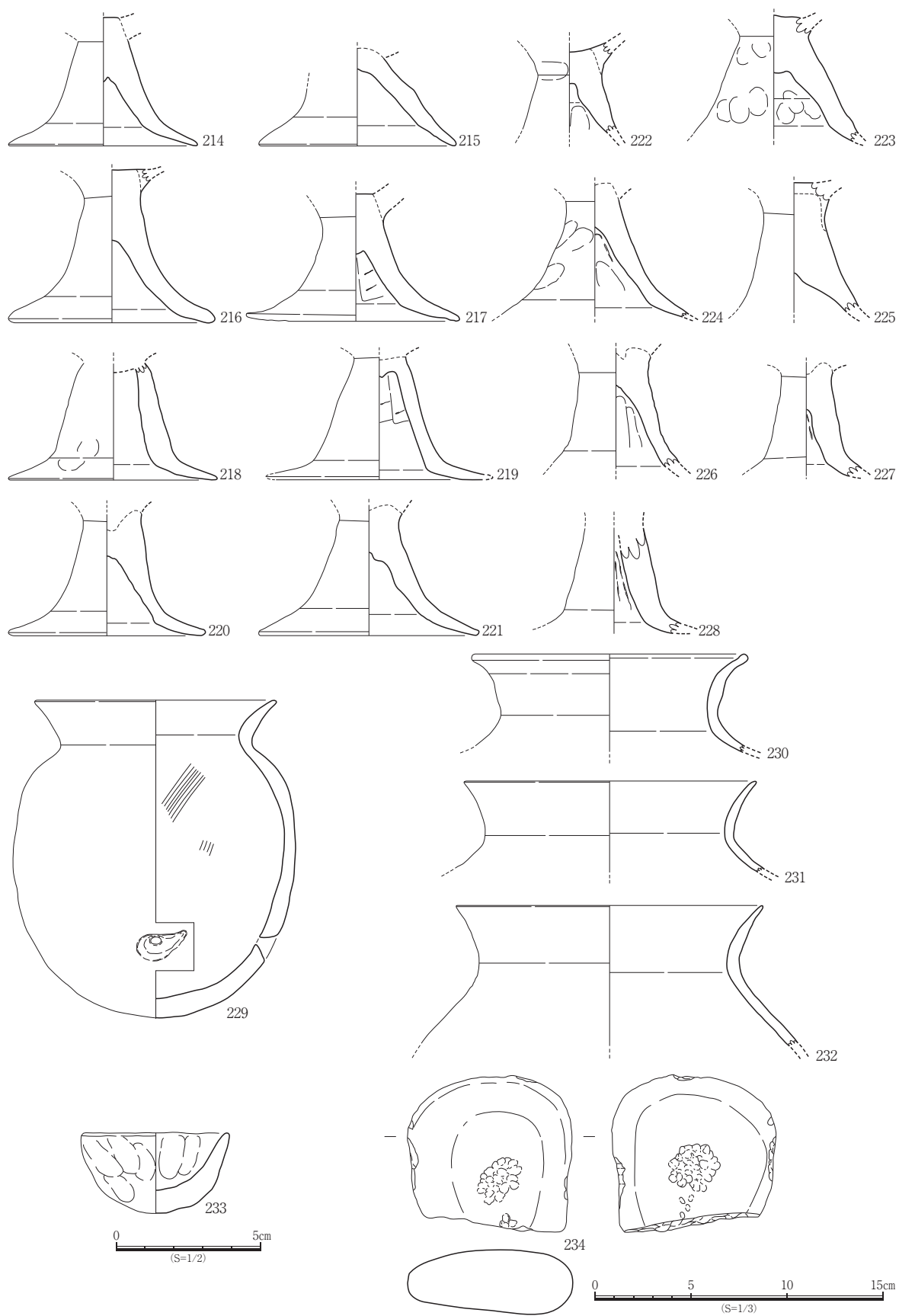


图3-22 ST-4出土遺物実測図

ち、胎土には粗粒砂～小礫を含む。230～232は口辺部から胴部にかけての破片で、すべて摩耗のため調整は不明である。胎土には230は粗粒砂～小礫、231は極細粒～極粗粒砂、232は粗粒砂～小礫を多く含む。

233は手づくね土器である。ほぼ完存し、内外面とも摩耗が著しいが指頭圧痕が認められる。胎土には細粒～粗粒砂を含む。

石製品(図3-22 234)

234は叩石で、一部欠損する。両面中央部と側面に強い敲打痕が認められ、石材は砂岩である。

② 土坑

SK-1(図3-23)

調査区中央部で検出した楕円形の土坑で、長径1.18m、短径0.83m、深さ6～15cmを測り、長軸方向はN-73°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は小礫を含む褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器22点、須恵器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-2(図3-24)

調査区東部で検出した不整形の土坑で、北東側は調査方法の都合により残った未調査箇所へ続くため、長辺は不明である。短辺1.39m、深さ4～9cmを測り、長軸方向はN-53°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は小礫を含む褐灰色(10YR5/1)細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器31点、須恵器1点がみられ、土師器3点(235～237)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-25 235～237)

235～237は高杯で、脚部のみ残存する。235は脚裾端部を欠損するもので、摩耗のため調整は不明瞭であるが、内外面に指頭圧痕が残る。胎土には粗粒砂～小礫を含む。236・237は脚柱部のみ残存するもので、236は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面に指頭圧痕が残る。胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。237は摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂～小礫を含む。

(2) 古代

掘立柱建物跡を始めとした遺構は調査区中央部から東部にかけて分布している。調査区北西部は中世段階の地形改変により古墳時代の遺構と同様に削平されたと考えられ、当該期の遺構が存在していた可能性も考えられる。

確認された遺構は掘立柱建物跡4棟のほか、土坑、柱穴などであるが、後世の削平を受けており遺存状態は良くない。

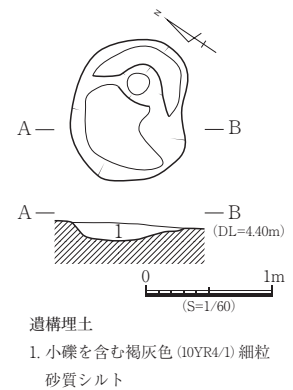


図3-23 SK-1

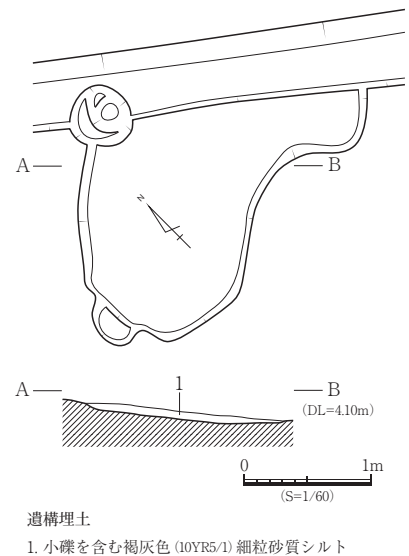


図3-24 SK-2

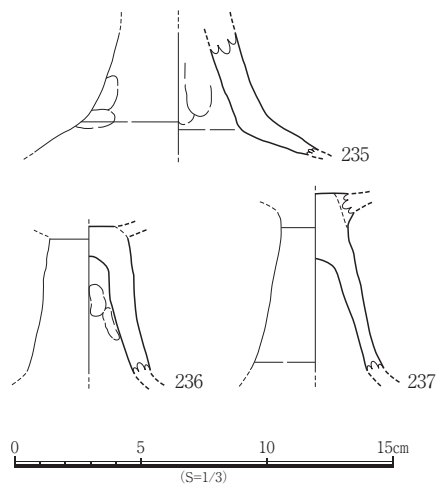


図3-25 SK-2出土遺物実測図

3. Ⅲ区 (2) 古代

① 掘立柱建物跡

SB-1 (図3-26)

調査区北東部, SB-2の西隣で検出した桁行2間(4.20m)以上, 梁行2間(4.05m)の南北棟建物跡で, 北側は調査区外へ続き, 棟方向はN-16°-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(南北)が1.80~2.40m(6~8尺), 梁行(東西)が1.95~2.10m(6.5~7尺)である。柱穴の平面形は円形を呈するものも一部にはみられるが, 基本的には方形で, 一辺36~62cmを測り, 深さは10~65cmである。柱穴の埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/1)細粒~粗粒砂質シルトで, 出土遺物には土師器60点, 須恵器15点, 土師質土器92点, 土製品1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

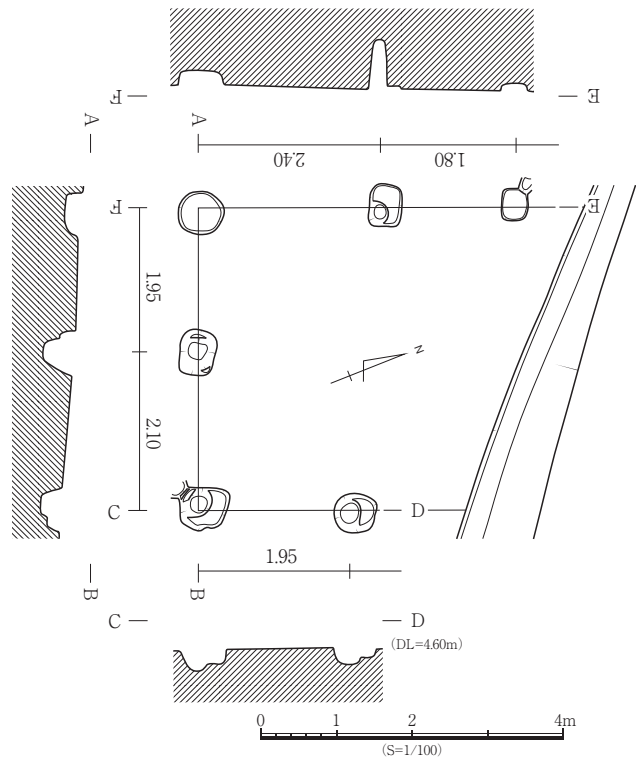


図3-26 SB-1

SB-2 (図3-27)

調査区北東部, SB-1の東隣, SB-3の北隣で検出した桁行1間(1.95m)以上, 梁行2間(3.60m)の南北棟建物跡で, 北側は調査区外へ続き, 棟方向はN-18°-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(南北)が1.95m(6.5尺), 梁行(東西)が1.65~1.95m(5.5~6.5尺)である。柱穴の平面形は円形を呈するものも一部にはみられるが, 基本的には方形で, 一辺34~47cmを測り, 深さは8~17cmである。柱穴の埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/1)細粒~粗粒砂質シルトで, 出土遺物には土師器9点, 須恵器1点, 土師質土器2点, 緑釉陶器1点がみられ, 西側柱南から1間目の柱穴から出土した土師質土器1点(238), 緑釉陶器1点(239)が図示できた。

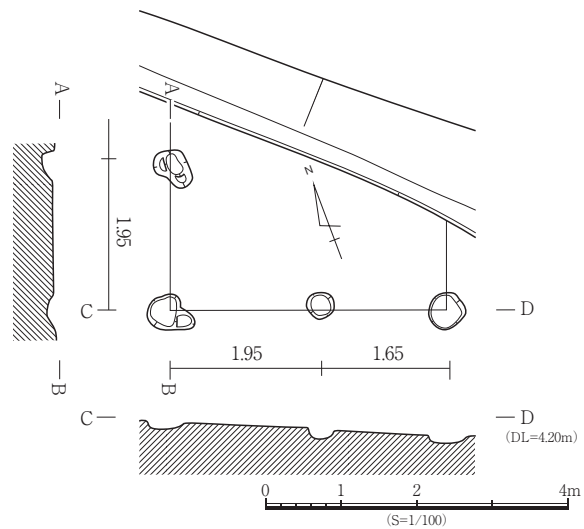


図3-27 SB-2

出土遺物

土師質土器(図3-28 238)

238は杯で, ほぼ完存する。摩耗のため調整は不明であるが, 底部切り離しは回転ヘラ切りとみられる。胎土には粗粒砂を少し含む。

緑釉陶器(図3-28 239)

239は杯の底部破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが, 体部外面に回転ヘラ削りが認められる。高台外側に緑釉がわずかに残り, 胎土には粗粒砂を少し含む。

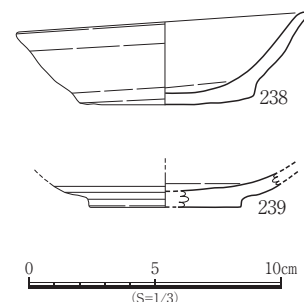


図3-28 SB-2出土遺物実測図

SB-3 (図3-29)

調査区北東部, SB-2の南隣で検出した桁行2間(4.95m), 梁行2間(3.00m)の南北棟建物跡で, 棟方向はN-15°-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(南北)が2.25~2.70m(7.5~9尺), 梁行(東西)が1.35~1.65m(4.5~5.5尺)である。また, 東側には庇と考えられる桁行と同じ柱間寸法である2間の柱列が沿っている。柱穴の平面形は円形を呈するものも一部にはみられるが, 基本的には方形で, 一辺45~79cmを測り, 深さは5~45cmで

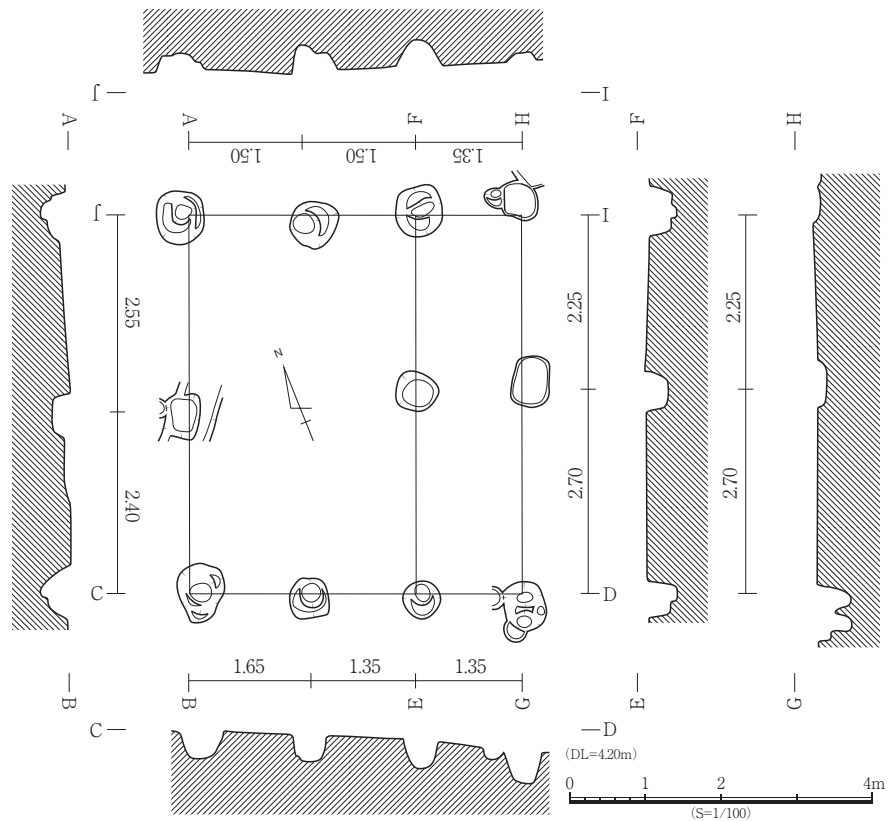
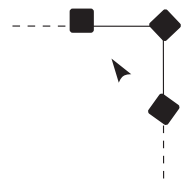


図3-29 SB-3

ある。柱穴の埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/1)細粒~粗粒砂質シルトで, 出土遺物には土師器7点, 土師質土器18点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SB-4 (図3-30)

調査区南東部で検出した掘立柱建物跡で, 後世の削平の影響を受け, 遺存状態が良くなかった。桁行2間(2.70m)以上, 梁行2間(2.70m)と考えられる南北棟建物跡で, 棟方向はN-36°-Eを示す。検出できた柱穴の柱間寸法は, 桁行(南北)が1.35m(4.5尺), 梁行(東西)が1.35m(4.5尺)である。柱穴の平面形は円形状を呈するものも一部にはみられるが, 基本的には方形で, 一辺54~72cmを測り, 深さは4~57cmである。柱穴の埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/1)細粒~粗粒砂質シルトで, 出土遺物には土師器3点, 須恵器2点, 土師質土器5点がみられたが, 図示できるものはなかった。



② 土坑

SK-3

調査区東部で検出した長方形の土坑で, 長辺2.34m, 短辺0.52m, 深さ8~16cmを測り, 長軸方向はN-67°-Wを示す。断面は舟底状を呈し, 埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/1)細粒~粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器33点がみられたが, 図示できるものはなかった。

③ 柱穴

本調査区では建物等に復元できなかったが, 当該期の柱穴が多数検出されている。ここでは図示できた遺物が出土している柱穴2個を報告する。

3. Ⅲ区 (3) 中世

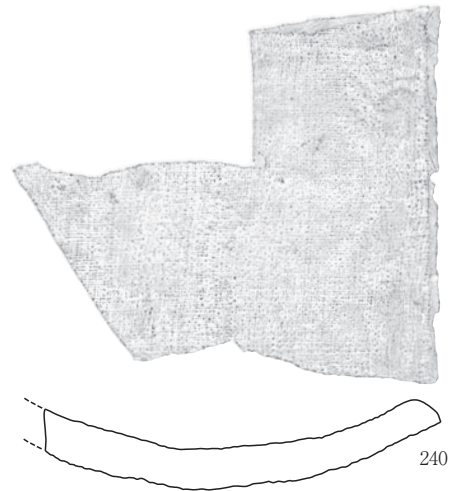
P-1

調査区中央部で検出した柱穴である。径 29 cm の円形で、深さ 41 cm を測る。埋土は小礫を含む黒褐色 (10YR3/1) 細粒～粗粒砂質シルトで、出土遺物には瓦 2 点がみられ、瓦 1 点 (240) が図示できた。

出土遺物

瓦 (図3-31 240)

240 は平瓦で、凹面に布目圧痕、凸面に縄目状のタキ目が残る。側面にヘラ削りを行い、胎土には粗粒砂～小礫を含む。



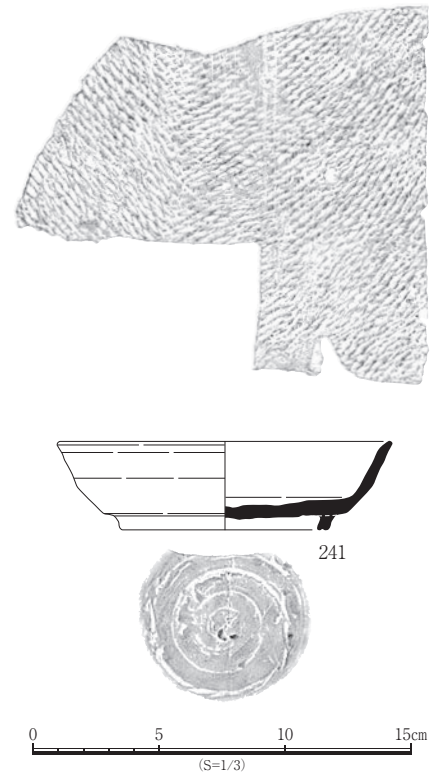
P-2

調査区南東部で検出した柱穴である。平面形は隅丸方形を呈し、長辺 72 cm、短辺 67 cm、深さ 52 cm を測る。埋土は小礫を含む黒褐色 (10YR3/1) 細粒～粗粒砂質シルトで、出土遺物には土師器 12 点、須恵器 2 点がみられ、須恵器 1 点 (241) が図示できた。

出土遺物

須恵器 (図3-31 241)

241 は杯である。器面には回転ナデを施し、底部切り離しは回転ヘラ切りである。高台内側には爪形状圧痕が明瞭に残り、胎土には粗粒砂～小礫を含む。



(3) 中世

掘立柱建物跡を始めとした遺構は調査区全域に分布している。調査区北西部は中世段階の地形改変によって造成された平坦面には掘立柱建物跡 2 棟が検出されており、当該期の地形改変は居住域として利用するためと考えられる。

確認された遺構は掘立柱建物跡 2 棟のほか、土坑、柱穴などであるが、調査区北西部は近世以降の削平を受けており遺存状態は良くない。

① 掘立柱建物跡

SB-5 (図3-32)

調査区北西部、SB-6 の北隣で検出した桁行 3 間 (6.20m)、梁行 2 間 (4.60m) の南北棟建物跡で、北から 1 間目の柱通りに間仕切り柱が立つ。また、北西隅の柱穴と試掘トレンチによって削平された南西隅とそこから 1 間目の柱穴は未検出である。棟方向は N-35°-E を示す。柱間寸法は、桁行 (南北) が 1.80~2.20m、梁行 (東西) が 2.10~2.40m である。柱穴の平面形は不整形を呈するものも一部にはみられるが、基本的には円形で、径 18~42cm を測り、深さは 19~42cm である。柱穴の埋

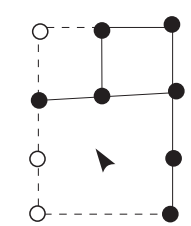


図3-31 P-1・2出土遺物実測図

図3-32 SB-5



図3-33 SB-5・6出土遺物実測図

土は小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物には土師器56点、須恵器11点、土師質土器90点、瓦1点がみられ、土師質土器2点(242・243)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-33 242・243)

242は椀で、底部のみ残存する。しっかりとした輪高台を持ち、摩耗のため調整は不明である。胎土には粗粒砂～小礫を含む。

243は小皿で、底部のみ残存する。摩耗のため調整は不明であるが、底部切り離しは回転糸切りとみられる。胎土は精良である。

SB-6(図3-34)

調査区西部、SB-5の南隣で検出した桁行3間(6.60～6.70m)、梁行2間(4.40～4.60m)のやや歪みのある総柱東西棟建物跡である。棟方向はN-53°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が2.00～2.40m、梁行(南北)が2.10～2.50mと散つきがみられる。柱穴は径17～32cmの円形で、深さは7～47cmである。柱穴の埋土は小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物には土師器17点、須恵器4点、土師質土器11点、瓦質土器1点がみられ、土師器1点(244)、土師質土器1点(245)が図示できた。

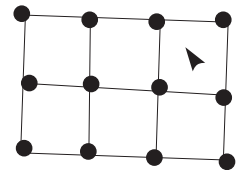


図3-34 SB-6

出土遺物

土師器(図3-33 244)

244は羽釜である。口辺部のみ残存し、器面の摩耗のため調整は不明である。胴部外面には煤が附着しており、胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。

土師質土器(図3-33 245)

245は小皿である。ほぼ完存し、器面は内外面とも摩耗が著しく調整は不明であるが、底部外面には回転ヘラ切り痕が明瞭に残る。胎土には極粗粒砂を含む。

② 土坑

SK-4

調査区北部で検出した溝状を呈する長方形の土坑で、長辺1.33m、短辺0.31m、深さ5～10cmを測り、長軸方向はN-51°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器16点、須恵器1点、土師質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-5(図3-35)

調査区中央部で検出した楕円形の土坑で、長径0.84m、短径0.76m、深さ20～22cmを測り、長軸方向はN-59°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は小～大礫を含む褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シ

3. Ⅲ区 (3) 中世

ルトであった。出土遺物には土師器 55 点, 須恵器 4 点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-6

調査区中央部で検出した長方形の土坑で, ST-1 を切っていた。長辺 3.21m, 短辺 1.32m, 深さ 2~3cm を測り, 長軸方向は N-46°-W を示す。断面は逆台形状を呈し, 埋土は小礫を含む褐灰色(10YR4/1)細粒~中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器 138 点, 須恵器 10 点, 瓦 1 点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-7 (図3-36)

調査区中央部で検出した長方形の土坑で, SK-8 に切られている。長辺 1.45m, 短辺 0.98m, 深さ 6~44cm を測り, 長軸方向は N-84°-E を示す。断面は逆台形状を呈し, 埋土は小礫を含む褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器 4 点, 須恵器 1 点, 土師質土器 2 点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-8

調査区中央部で検出した長方形の土坑で, SK-7 を切っている。長辺 0.91m, 短辺 0.69m, 深さ 12~26cm を測り, 長軸方向は N-72°-W を示す。断面は逆台形状を呈し, 埋土は小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)細粒~中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器 5 点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-9 (図3-37・38)

調査区西部で検出した不整形の土坑で, 長辺 1.74m, 短辺 1.38m, 深さ 13~26cm を測り, 長軸方向は N-21°-E を示す。断面は舟底状を呈し, 埋土は小礫を含む灰黄褐色(10YR6/2)細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器 29 点, 須恵器 7 点, 土師質土器 47 点, 瓦質土器 5 点がみられ, 土師質土器 3 点(246~248)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (図3-39 246~248)

246・247 は杯である。246 は全体を窺い知ることができるもので, 器面には回転ナデを施し, 底部切り離しは回転糸切りである。胎土には極細粒砂を含む。247 は底部破片で, 器面は摩耗のため調整は不明で, 胎土は精良である。

248 は小皿である。手づくね成形で, 内外面ともナデを施す。底部には焼成前に円孔を穿ち, 胎土には極細粒砂を含む。

SK-10

調査区中央部で検出した方形の土坑で, SK-11, SD-6 を切っている。長辺 1.21m, 短辺 1.08m, 深さ 4~10cm を測り, 長軸方向は N-29°-W を示す。断面は逆台形状を呈し, 埋土は小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)細粒~中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器 16 点,

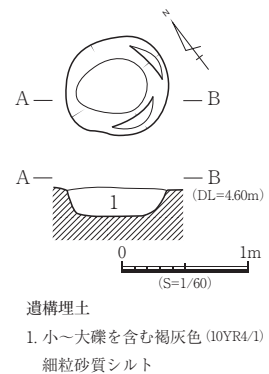


図3-35 SK-5

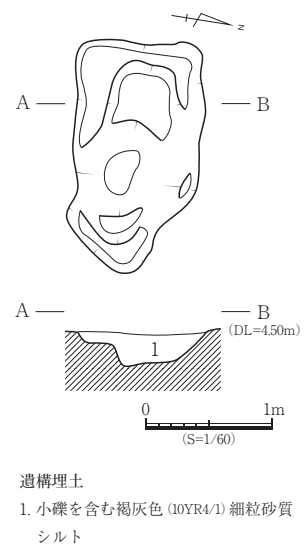


図3-36 SK-7

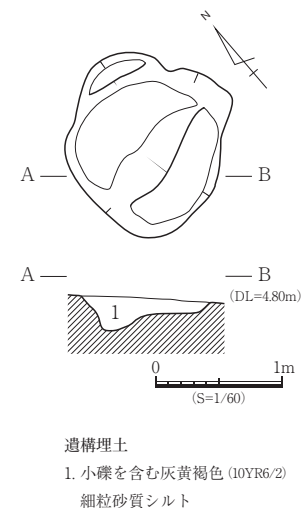


図3-37 SK-9

須恵器 11 点, 土師質土器 27 点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-11

調査区中央部で検出した方形の土坑で, SK-10 に切られている。長辺 1.18m, 短辺 1.04m, 深さ 4~12cm を測り, 長軸方向は N-54°-E を示す。断面は逆台形状を呈し, 埋土は小礫を含む黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒~中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器 10 点, 須恵器 1 点, 土師質土器 9 点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-12

調査区西部で検出した方形の土坑で, SK-13, SD-7 を切っている。長辺 1.48m, 短辺 0.97m, 深さ 2~4cm を測り, 長軸方向は N-29°-E を示す。断面は逆台形状を呈し, 埋土は小礫を含む黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒~中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器 20 点, 土師質土器 24 点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-13

調査区西部で検出した楕円形の土坑で, SK-12 に切られている。長径 1.21m, 短径 1.05m, 深さ 1~2cm を測り, 長軸方向は N-51°-W を示す。断面は逆台形状を呈し, 埋土は小礫を含む黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒~中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器 6 点, 須恵器 2 点, 土師質土器 7 点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-14

調査区南部で検出した溝状を呈する長方形の土坑で, 長辺 2.15m, 短辺 0.51m, 深さ 2~6cm を測り, 長軸方向は N-54°-E を示す。断面は逆台形状を呈し, 埋土は小礫を含む褐灰色 (10YR4/1) 細粒~中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器 9 点, 須恵器 4 点, 土師質土器 7 点, 土製品 1 点がみられ, 土製品 1 点 (249) が図示できた。

出土遺物

土製品 (図 3-39 249)

249 は土錘である。一部を欠損し, 摩耗のため調整は不明である。胎土には粗粒砂~小礫を含む。

SK-15

調査区南部で検出した溝状を呈する長方形の土坑で, 長辺 3.23m, 短辺 0.54m, 深さ 8~11cm を測り, 長軸方向は N-73°-E を示す。断面は逆台形状を呈し, 埋土は小礫を含む褐灰色 (10YR4/1) 細粒~中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器 3 点, 須恵器 1 点, 土師質土器 7 点がみられたが, 図示できるものはなかった。

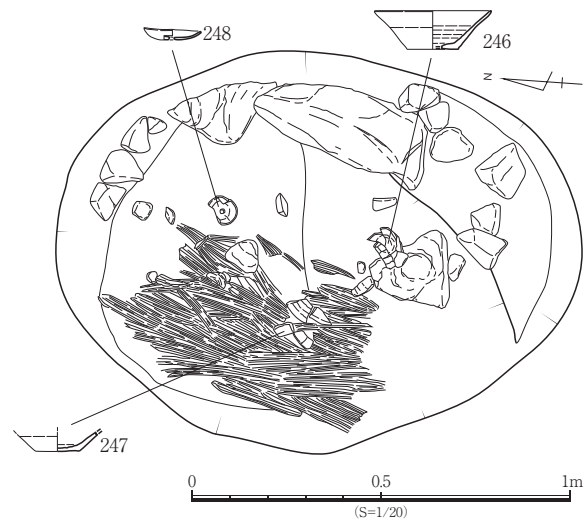


図 3-38 SK-9 遺物出土状態

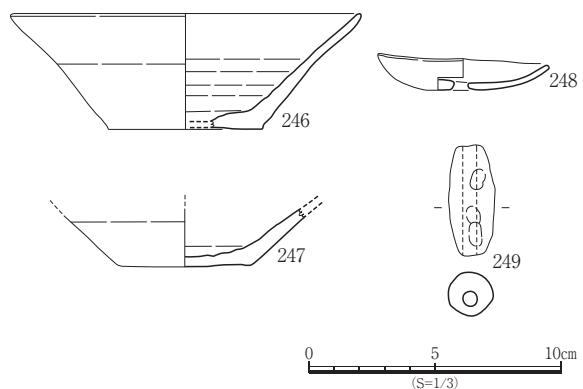


図 3-39 SK-9・14 出土遺物実測図

3. Ⅲ区 (3) 中世

SK-16

調査区南部で検出した楕円形の土坑で、長径1.50m、短径0.85m、深さ4～6cmを測り、長軸方向はN-79°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には瓦質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

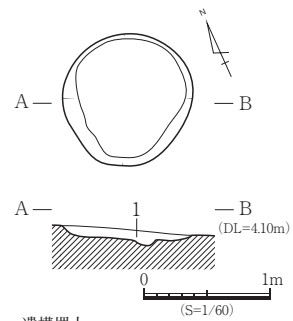


図3-40 SK-17

SK-17 (図3-40)

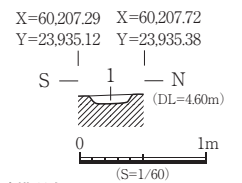
調査区南部で検出した円形の土坑で、長径1.16m、短径1.11m、深さ6～13cmを測り、長軸方向はN-19°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器2点、土師質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

遺構埋土
1. 小礫を含む灰黄褐色(10YR4/2)
細粒～中粒砂質シルト

③ 溝跡

SD-1 (図3-41)

調査区北部で検出した東西溝跡で、SD-2の北に位置する。幅0.36～0.40m、深さ2～6cmを測り、基底面は西(4.506m)から東(4.328m)に傾斜し、3.10mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は炭化物を含む灰黄褐色(10YR6/2)粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器5点、須恵器2点がみられたが、図示できるものはなかった。



遺構埋土
1. 炭化物を含む灰黄褐色(10YR6/2)
粗粒砂質シルト

図3-41 SD-1

SD-2

調査区北部で検出した東西溝跡で、SD-1の南に位置する。幅0.23～0.35m、深さ2～5cmを測り、基底面は西(4.603m)から東(4.382m)に傾斜し、4.80mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含む褐灰色(10YR4/1)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器16点、須恵器22点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-3

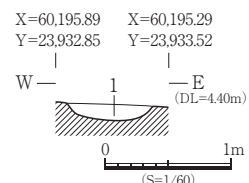
調査区中央部で検出した東西溝跡で、ST-1を切る。幅0.39～0.46m、深さ2～7cmを測り、基底面は西(4.437m)から東(4.392m)に傾斜し、3.80mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含む褐灰色(10YR4/1)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器11点、須恵器3点、土師質土器20点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-4

調査区中央部で検出した南北溝跡で、ST-1を切る。幅0.24～0.42m、深さ2～4cmを測り、基底面は北(4.384m)から南(4.328m)に傾斜し、5.70mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含む褐灰色(10YR4/1)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器32点、須恵器7点、土師質土器51点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-5 (図3-42)

調査区東部で検出した南北溝跡で、SB-5・6に伴う区画溝と考えられる。幅0.66～0.71m、深さ7～16cmを測り、基底面は北(4.090m)から南(4.029m)に傾斜し、14.30mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は小礫を含む褐灰色(10YR4/1)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器264点、須恵器71点、土師質土器207点がみられたが、図示できるものはなかった。



遺構埋土
1. 小礫を含む褐灰色(10YR4/1)
細粒～中粒砂質シルト

図3-42 SD-5

SD-6

調査区中央部で検出した屈曲する南北溝跡で、SK-10に切られている。幅0.34～0.48m、深さ3～6cmを測り、基底面は北(4.385m)から南(4.260m)に傾斜し、3.20mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器3点、須恵器1点、土師質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-7

調査区西部で検出した東西溝跡で、SK-12、P-8に切られている。幅0.32～0.36m、深さ2～5cmを測り、基底面は東(4.449m)から西(4.430m)に傾斜し、1.40mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には須恵器3点、土師質土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-8

調査区南西部で検出した東西溝跡で、幅0.18m、深さ2～4cmを測り、基底面は西(4.163m)から東(4.126m)に傾斜し、1.60mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は小礫を含む褐灰色(10YR4/1)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器1点、土師質土器1点、瓦質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

④ 柱穴

本調査区では建物等に復元できなかつたが、当該期の柱穴が多数検出されている。ここでは図示できた遺物が出土している柱穴6個を報告する。

P-3

調査区北部で検出した柱穴である。平面形は楕円形を呈し、長径30cm、短径18cm、深さ21cmを測る。埋土は小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物には土師器4点、土師質土器15点がみられ、土師質土器2点(250・251)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-43 250・251)

250は椀である。全体を窺い知ることができ、底部外面端部に輪高台が付く。摩耗のため調整は不明で、胎土は精良である。

251は小皿である。摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂を含む。

P-4

調査区中央部で検出した柱穴である。径39cmの円形で、深さ42cmを測る。埋土は小礫を含む褐灰色(10YR4/1)細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物には土師器18点、須恵器4点、土師質土器85点がみられ、土師質土器1点(252)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-43 252)

252は椀である。底部のみ残存し、摩耗のため調整は不明である。底部内面には接合痕が明瞭に残り、胎土は精良である。

P-5

調査区東部で検出した柱穴である。径26cmの円形で、深さ15cmを測る。埋土は小礫を含む褐灰色(10YR4/1)細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物には土師器6点、須恵器1点、土師質土器8点がみられ、

3. Ⅲ区 (3) 中世

須恵器1点(253)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-43 253)

253は壺と考えられるもので、底部のみ残存する。胴部内面には回転ナデ、胴部外面には回転ヘラ削り、底部内面にはナデを施す。底部切り離しは回転ヘラ切りで、切り離しのあとのナデ調整が認められる。胎土は精良である。

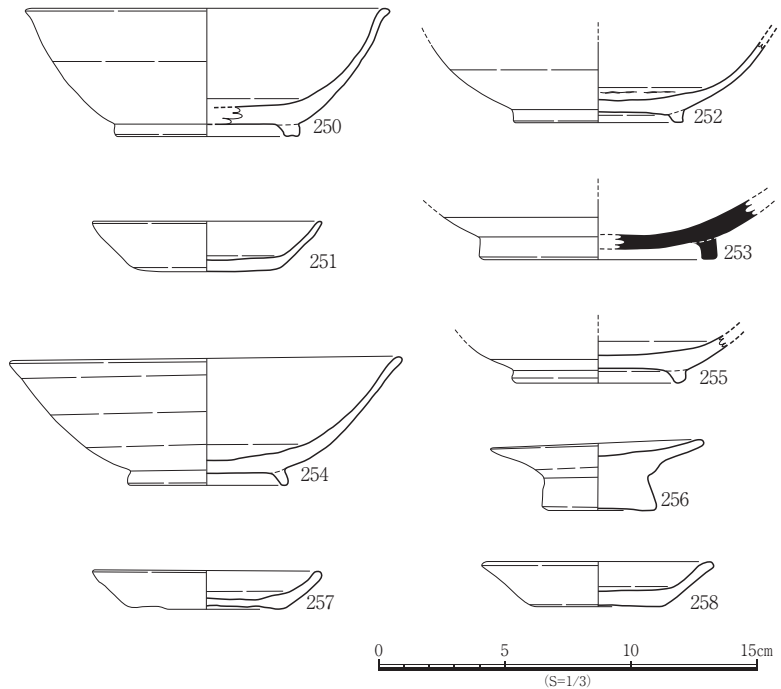


図3-43 P-3~8出土遺物実測図

P-6
調査区西部で検出した柱穴である。径41cmの円形で、深さ37cmを測る。埋土は小礫を含む褐灰色(10YR4/1)細粒~中粒砂質シルトで、出土遺物には土師器5点、須恵器1点、土師質土器7点、瓦質土器1点がみられ、土師質土器3点(254~256)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-43 254~256)

254・255は椀である。254は全体を窺い知ることができるもので、ほぼ完存する。摩耗のため調整は不明瞭であるが、体部外面下端には回転ナデ調整、底部内面にはナデ調整が認められる。ハの字状を呈する高台を有し、胎土には極細粒~中粒砂を含む。255は底部のみ残存し、摩耗のため調整は不明瞭であるが、体部外面下端に回転ヘラ削りの痕跡が残る。胎土には粗粒砂を含む。

256は小皿で、柱状高台を有する。ほぼ完存し、摩耗のため調整は不明瞭であるが、口辺部内面には回転ナデ調整が認められる。胎土には極粗粒~中粒砂を含む。

P-7

調査区西部で検出した柱穴である。平面形は楕円形を呈し、長径58cm、短径49cm、深さ28cmを測る。埋土は小礫を含む褐灰色(10YR4/1)細粒~中粒砂質シルトで、出土遺物には土師器5点、土師質土器6点がみられ、土師質土器1点(257)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-43 257)

257は小皿で、ほぼ完存する。摩耗のため調整は不明瞭であるが、底部切り離しは回転糸切りと考えられる。胎土には細粒砂~小礫を含む。

P-8

調査区西部で検出した柱穴で、SD-7を切っている。径50cmの円形で、深さ23cmを測る。埋土は小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)細粒~中粒砂質シルトで、出土遺物には土師器18点、須恵器6点、土師質土器4点がみられ、土師質土器点(258)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-43 258)

258は小皿である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。胎土には粗粒砂を含む。

4. IV区

本調査区は北側から派生した丘陵裾部に位置し、南方向に向けて緩やかに下る斜面上で古代の遺構が確認されているが、丘陵裾部の下端と考えられ低湿地の状況を呈しており、遺構密度は低い。

また、本調査では廃土置き場の関係で東側と西側に分けて調査を行ったが、本報告では一つの調査区として報告する。

(1) 古代

本調査区内では当該期の遺構を検出しているが、遺構密度は低い。当該期の遺構は本調査区北東側のⅢ区を中心に存在するものと考えられる。堆積層もシルトを中心とした低湿地の状況を呈しており、本調査区は本遺跡の南限にあたとみられる。

① 土坑

SK-1(図3-45)

調査区中央部で検出

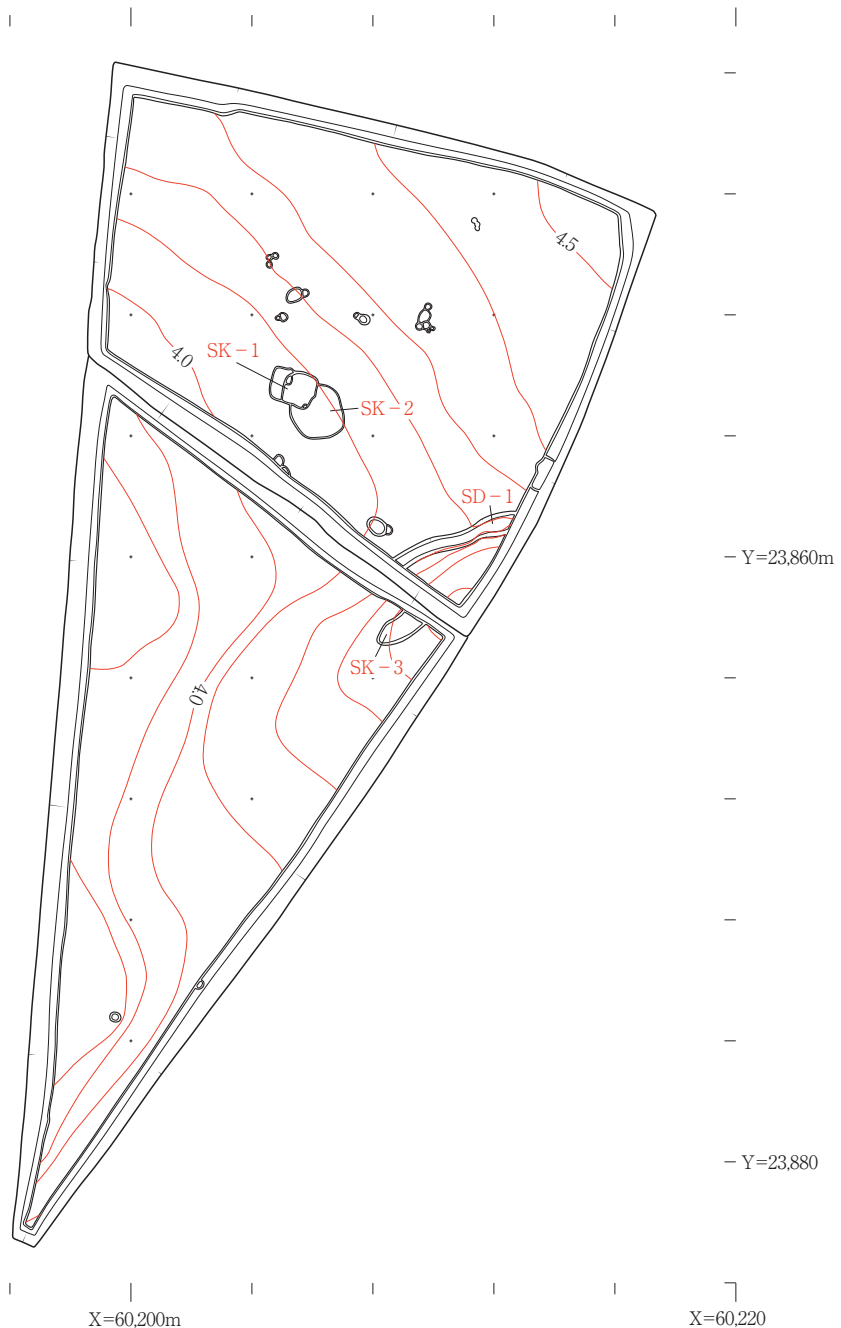


図3-44 IV区遺構平面図

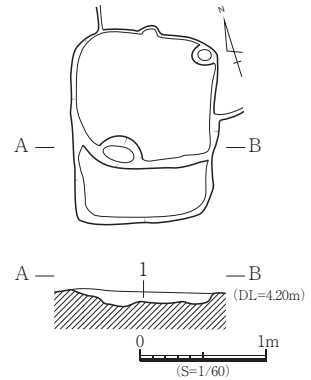
した方形の土坑で、SK-2を切る。長辺1.53m、短辺1.17m、深さ4~10cmを測り、長軸方向はN-16°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は炭化物を含む褐灰色(10YR5/1)シルト質極細粒~細粒

4. IV区 (1) 古代

砂であった。出土遺物には土師器1点、須恵器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-2

調査区中央部で検出した楕円形の土坑で、SK-1に切られる。長径1.92m、短径1.76m、深さ2~4cmを測り、長軸方向はN-46°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は炭化物を含む灰黄褐色(10YR6/2)シルト質細粒~粗粒砂であった。出土遺物には土師器1点がみられたが、図示できるものはなかった。



遺構埋土
1. 炭化物を含む褐色(10YR5/1)シルト質極細粒~細粒砂

図3-45 SK-1

SK-3

調査区北部で検出した楕円形とみられる土坑で、北西側は調査方法の都合により残った未調査箇所へ続く。確認長径1.52m、短径0.84m、深さ4~14cmを測り、長軸方向はN-33°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物を含む灰黄褐色(10YR6/2)シルト質細粒~粗粒砂であった。出土遺物には土師器2点、須恵器2点がみられ、須恵器1点(259)が図示できた。

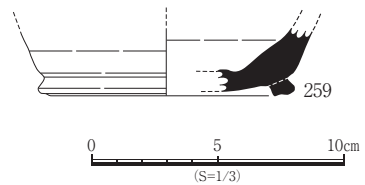


図3-46 SK-3出土遺物実測図

出土遺物

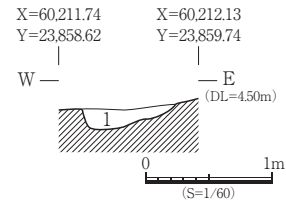
須恵器(図3-46 259)

259は壺と考えられる底部破片である。器面には回転ナデを施し、底部内面には自然釉が残る。胎土には粗粒砂~小礫を多く含む。

② 溝跡

SD-1(図3-47)

調査区北部で検出した南北溝跡で、北側は調査区外へ続く。幅0.52~0.83m、深さ13~23cmを測り、基底面は北(4.142m)から南(4.079m)に傾斜し、4.30mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物を含む灰黄褐色(10YR6/2)シルト質極細粒砂であった。出土遺物には土師器7点がみられたが、図示できるものはなかった。



遺構埋土
1. 炭化物を含む灰黄褐色(10YR6/2)シルト質極細粒砂

図3-47 SD-1

第Ⅳ章 自然科学分析

1. はじめに

坪井遺跡は、夜須川下流部の沖積低地の氾濫原に位置する(図4-1・2)。今回の調査区は、夜須川左岸の氾濫原から丘陵裾部の段丘面、およびそれを開析する谷部付近に調査区が設定された。分析試料は、そのうち氾濫原上に立地するⅡ区で採取を行った。調査区やその周辺の古環境変遷についての検討を目的として、Ⅱ区では、遺跡の現地調査、花粉分析、植物珪酸体分析、出土木材の樹種同定、粒度分析、放射性炭素年代測定を実施した。以下にその結果について述べる。

2. 試料

試料採取位置を示した柱状図とその地点を、後に示す図4-3に示す。Ⅱ区で採取された分析試料のうち、花粉・植物珪酸体分析については、3地点の試料番号3(3-3)、4地点の試料番号1~5(4-1~4-5)、古墳時代の溝埋土(SD-1)の1点の7点について実施する。出土木材の樹種同定は、SR-1内で検出された埋没林1点、その近辺の木材集積部より3点を採取して合計4点分を実施する。樹種同定については、埋没林を試料番号1、木材集積部を試料番号2~4として分析を進める。粒度分析は、2地点の試料番号1~3(2-1~2-3)、4地点の試料番号3~6(4-3~4-6)について実施する。放射性炭素年代測定は、4地点の試料番号1から採取した木材(C14-1)と3地点の試料番号2から採取した植物遺体(C14-2)の2点について実施する。

3. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

分析は、AMS法で実施する。試料表面の汚れをピンセット、超音波洗浄など等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する。



図4-1 調査地点位置図

3. 分析方法 (2) 花粉分析

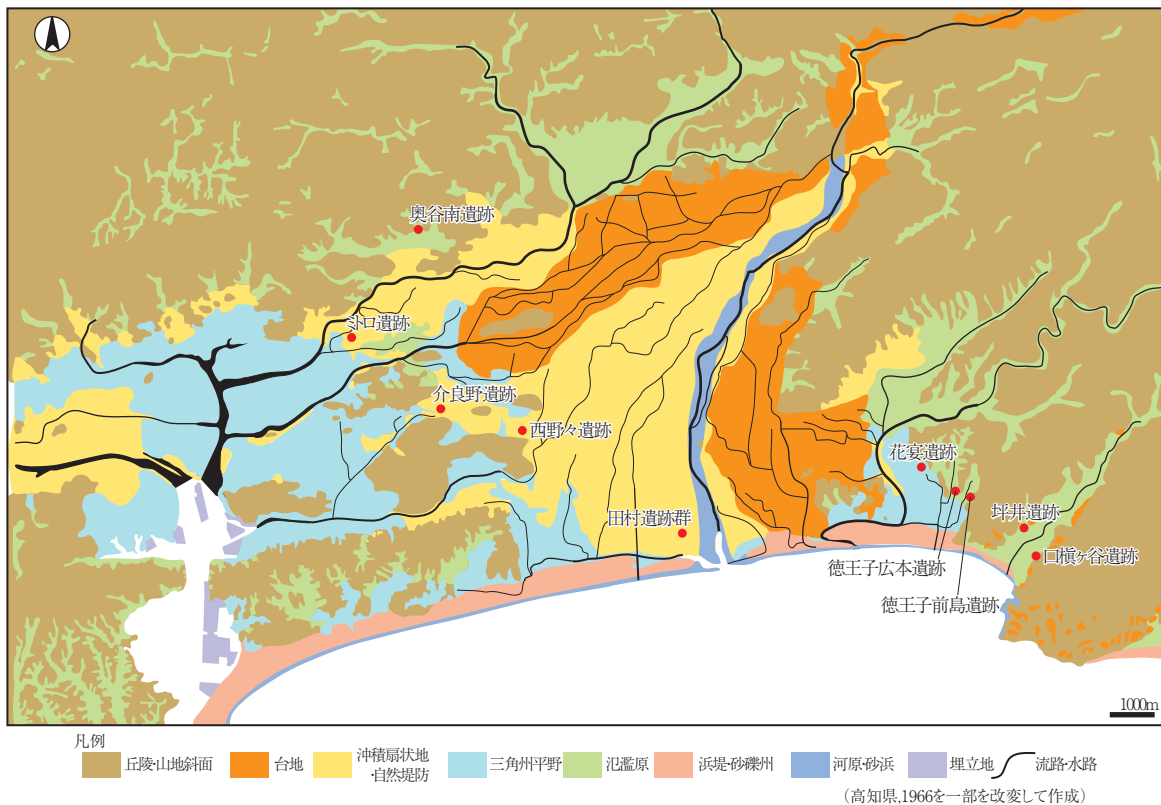


図4-2 坪井遺跡周辺の地形分類図

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(Ⅱ)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-Ⅱ)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてσ13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma: 68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986 - 2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。なお、測定については、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで

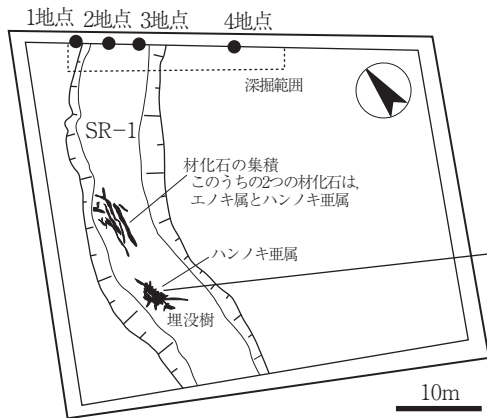
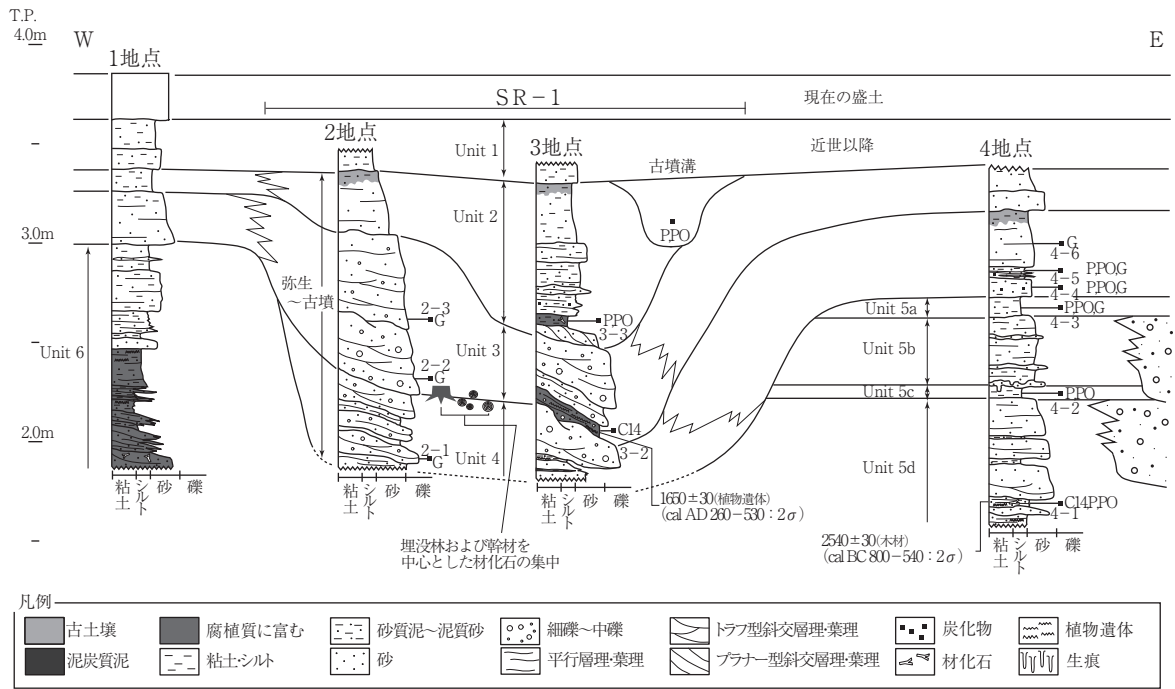


写真1 II区SR-1内の埋没樹
堆積ユニット4最上部に生育し、堆積ユニット3の河床堆積物によって埋没する。樹種はハンノキ亜属



写真2 II区調査区北壁断面 (SR-1付近)



写真3 II区調査区北壁断面 (SR-1付近)

図4-3 II区北壁断面図の柱状模式図及び分析試料採取位置並びにSR-1遺構配置図

3. 分析方法 (5) 粒度分析

封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示すとともに植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

(4) 樹種同定

各試料の最も外側の部分から2cm角程度の木片を採取し、剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製する。切片をガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

(5) 粒度分析

公文・立石編(1998)の方法を参考に礫・砂粒子画分は篩別法、シルト・粘土粒子画分はピペット法で行った。また、粒径区分はWentworth(1922)に従った。以下に分析操作工程を示す。

試料を風乾して2mmφ篩でふるい分ける。2mmφ篩上粒子は水洗して重量を測定する。一方、2mmφ篩下粒子は40.00gをビーカーに秤量し、蒸留水と30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物分解を行う。分解終了後、蒸留水と分散剤(4%カルゴン)を加え、攪拌しながら30分間音波処理を行う。沈底瓶にこの懸濁液を移し、往復振とう機で1時間振とうする。振とう終了後、水で全量を1000mlにする。この沈底瓶を1分間手で激しく振り、直ちに静置する。ピペット法に準じて所定時間に所定深度から粘土・シルト画分(0.063mm>)、粘土画分(0.0039mm>)を10ml採取し、105℃で24時間乾燥させた後、重量を測定し加積通過率(質量%)を求める。ピペット法終了後、懸濁液を63μm篩で水洗いする。63μm篩残留物を105℃で24時間熱乾後、1.0, 0.5, 0.25, 0.125mmφ篩でふるい分け、各篩毎に篩上残留物の質量を測定し、加積通過率(質量%)を求める。ピペット法およびふるい分けで求められる加積通過率(質量%)から粒径加積曲線を描き、Wentworth(1922)の粒径区分毎の質量を算出する。

4. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表4-1に示す。また、暦年較正值を表4-2に示す。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

得られた年代値は、C14-1が 2540 ± 30 yrs BP、C14-2が 1650 ± 30 yrs BPであった。 2σ の確率に該当する暦年較正年代値は、C14-1がCal BC 799-544、C14-2がCal AD 261-532である。

(2) 花粉分析

結果を表4-3・4、図4-4に示す。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。全体的に花粉の産出状況が悪く、産出される花粉の保存状態も良好とはいえない。

試料名	地点	試料番号	試料の質	補正年代	$\delta^{13}\text{C}$	測定年代	Code.No.
				BP	(‰)	BP	
C14-1	4地点	1	植物遺体	2540 ± 30	-27.43 ± 0.66	2580 ± 30	IAAA-62326
C14-2	3地点	2	木材	1650 ± 30	-29.22 ± 0.68	1720 ± 40	IAAA-62627

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表4-1 放射性炭素年代測定結果

試料番号	補正年代(BP)	暦年較正年代(cal)											相対比	Code No.		
		σ	cal	BC	793	-	cal	BC	750	cal	BP	2,743			-	2,700
C14-1	2540 ± 32	σ	cal	BC	686	-	cal	BC	667	cal	BP	2,636	-	2,617	0.217	IAAA-62326
			cal	BC	638	-	cal	BC	618	cal	BP	2,588	-	2,568	0.133	
			cal	BC	615	-	cal	BC	594	cal	BP	2,565	-	2,544	0.168	
			cal	BC	615	-	cal	BC	594	cal	BP	2,565	-	2,544	0.168	
		2σ	cal	BC	799	-	cal	BC	731	cal	BP	2,749	-	2,681	0.402	
			cal	BC	691	-	cal	BC	66	cal	BP	2,641	-	2,016	0.181	
C14-2	1651 ± 33	σ	cal	AD	346	-	cal	AD	371	cal	BP	1,604	-	1,579	0.235	IAAA-62327
			cal	AD	377	-	cal	AD	429	cal	BP	1,573	-	1,521	0.765	
		2σ	cal	AD	261	-	cal	AD	281	cal	BP	1,689	-	1,669	0.037	
			cal	AD	325	-	cal	AD	464	cal	BP	1,625	-	1,486	0.853	
			cal	AD	482	-	cal	AD	532	cal	BP	1,468	-	1,418	0.110	
			cal	AD	482	-	cal	AD	532	cal	BP	1,468	-	1,418	0.110	

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

表4-2 暦年較正結果

4. 結果 (2) 花粉分析

試料番号3-3の花粉群集組成をみると、木本花粉が優占する。木本花粉では、マツ属とコナラ属アカガシ亜属が多産し、シイノキ属、ツガ属、コナラ属コナラ亜属などを伴う。草本花粉はわずかであるが、イネ科、タデ属、ヨモギ属などが認められる。

試料番号4-2をみると、木本花粉と草本花粉が同程度の割合で検出される。木本花粉ではアカガシ亜属、ツガ属、マツ属、ハンノキ属、コナラ亜属、シイノキ属などが多く認められる。草本花粉はイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属などを伴う。また、わずかではあるが、ガマ属、オモダカ属、スプタ属、ミズアオイ属などの水湿地生植物に由来する花粉が検出される。

試料番号4-1, 4-3~4-5は、花粉化石産出状況が悪く、定量解析を行えるだけの個体数を得ることができなかった。わずかに検出された種類をみると、木本花粉ではツガ属、マツ属、ハンノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、シイノキ属などが、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科などが認めら

種 類	上段：分析地点 下段：試料番号						
	3地点	4地点					古墳溝
	3-3	4-1	4-2	4-3	4-4	4-5	
木本花粉							
マキ属	1	-	-	-	-	-	-
モミ属	5	1	10	1	-	-	-
ツガ属	19	4	26	7	-	-	2
マツ属複雑管束亜属	21	1	6	-	-	-	-
マツ属(不明)	42	7	17	1	-	-	1
コウヤマキ属	2	-	5	1	-	-	-
スギ属	3	1	10	-	-	-	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	-	2	-	-	-	-
ヤマモモ属	7	-	9	-	-	-	1
サワグルミ属	-	-	2	-	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	7	-	5	-	-	-	-
カバノキ属	-	-	1	-	-	-	-
ハンノキ属	7	2	29	1	1	-	1
ブナ属	2	-	3	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	13	2	27	3	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	60	4	44	3	-	-	-
クリ属	6	-	6	-	-	-	-
シイノキ属	31	-	18	2	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	2	1	1	-	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	3	-	-	-	-	-	-
フウ属	1	-	-	-	-	-	-
キハダ属	-	-	1	-	-	-	-
モチノキ属	2	1	-	-	-	-	-
カエデ属	1	-	-	-	-	-	-
ノブドウ属	4	-	-	-	-	-	-
グミ属	1	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	6	-	-	-	-	-	-
ミズキ属	1	-	-	-	-	-	-
ツツジ科	-	-	1	-	-	-	-
カキ属	1	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属	2	-	-	-	-	-	1
イボタノキ属	4	-	-	-	-	-	1
スイカズラ属	2	1	-	-	-	-	-
合 計							
木本花粉	257	25	223	19	1	0	7

表4-3 花粉分析結果1

れる。いずれも試料番号4-2で多産した種類である。古墳溝の試料も、花粉化石の産出状況が悪い。木本花粉ではツガ属, マツ属, ヤマモモ属, ハンノキ属, ハイノキ属, イボタノキ属が, 草本花粉ではヨモギ属が, わずかに1~2個体検出されるのみである。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表4-5, 図4-5に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの, 保存状態が悪く, 表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

試料番号3-3では, 植物珪酸体含量が1,400個/g程度であり, ネザサ節を含むタケ亜科やヨシ属などがわずかに認められるに過ぎない。またイネ科起源の他に, 樹木起源珪酸体の第Ⅲグループや第Ⅳグループ(近藤・ピアスン,1981)が検出される。第Ⅲグループは「Y」あるいは「く」の字状の形態を呈し, 第Ⅳグループは網目模様の付いた紡錘形を呈する。

古墳溝では, 植物珪酸体含量が約1,200個/g程度であり, ネザサ節を含むタケ亜科などがわずかに

種 類	上段:分析地点 下段:試料番号						
	3地点	4地点					古墳溝
	3-3	4-1	4-2	4-3	4-4	4-5	
草本花粉							
ガマ属	-	-	1	-	-	-	-
オモダカ属	-	-	1	-	-	-	-
スブタ属	-	-	1	-	-	-	-
イネ科	7	14	229	4	-	-	-
カヤツリグサ科	1	4	15	1	-	-	-
ミズアオイ属	-	-	1	-	-	-	-
クワ科	1	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	2	-	1	1	-	-	-
タデ属	5	1	-	-	-	-	-
アカザ科	-	-	2	-	-	-	-
キンポウゲ属	-	1	-	-	-	-	-
キンポウゲ科	2	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	1	-	-	-	-	-	-
ワレモコウ属	-	-	1	-	-	-	-
バラ科	1	-	1	-	-	-	-
マメ科	-	-	1	-	-	-	-
セリ科	1	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	3	1	7	-	-	-	1
キク亜科	2	1	1	-	-	-	-
タンポポ亜科	-	-	1	-	-	-	-
不明花粉	13	2	11	1	-	-	-
シダ類孢子							
ヒカゲノカズラ属	-	1	1	2	-	2	-
イノモトソウ属	21	3	5	56	32	8	7
ミズワラビ属	-	1	-	-	-	-	-
他のシダ類孢子	73	22	34	88	29	9	13
合 計							
木本花粉	257	25	223	19	1	0	7
草本花粉	26	22	263	6	0	0	1
不明花粉	13	2	11	1	0	0	0
シダ類孢子	94	27	40	146	61	19	20
総計(不明を除く)	377	74	526	171	62	19	28
その他							
シャジクモ類	-	-	1	-	-	-	-

表4-4 花粉分析結果2

4. 結果 (3) 植物珪酸体分析

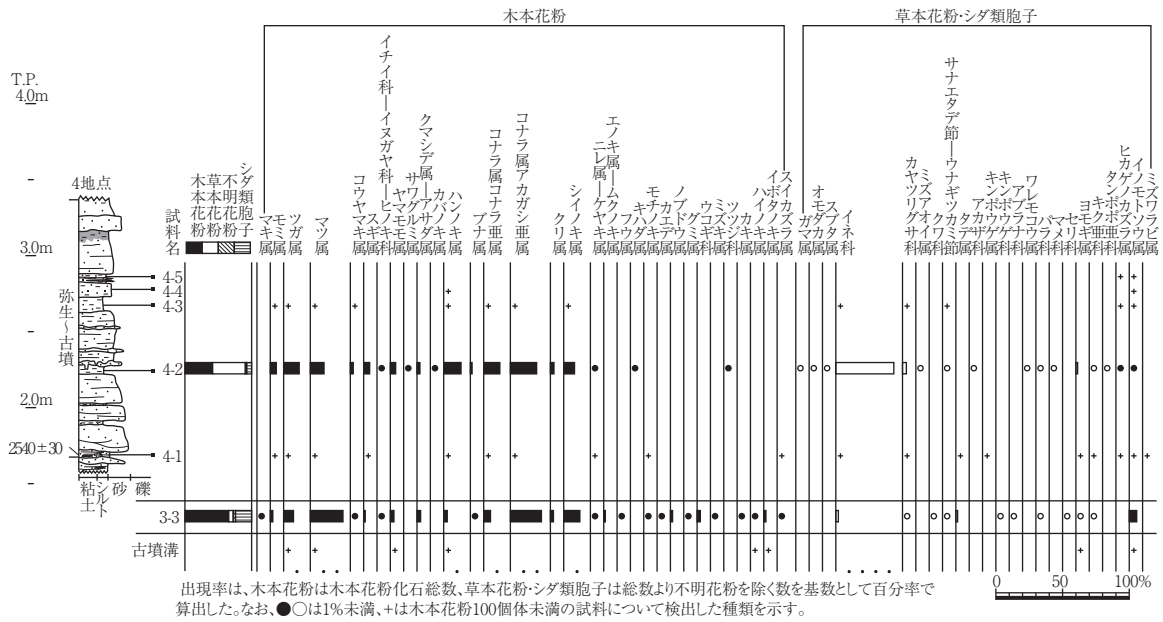


図4-4 花粉化石群集の層位分布

(個/g)

種類	上段：分析地点 下段：試料番号						
	3地点	4地点					古墳溝
		3-3	4-1	4-2	4-3	4-4	
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属	-	-	<100	<100	-	-	-
タケ亜科ネザサ節	<100	100	900	3,500	600	<100	-
タケ亜科	100	600	1,600	4,100	2,200	100	600
ヨシ属	<100	<100	300	500	200	<100	-
ウシクサ族ススキ属	-	-	<100	200	-	-	-
イチゴツナギ亜科	-	-	<100	-	<100	-	-
不明キビ型	<100	300	200	400	300	<100	-
不明ヒゲシバ型	-	-	300	700	200	-	-
不明ダンチク型	<100	100	400	1,000	300	-	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属	-	-	600	300	<100	-	-
タケ亜科ネザサ節	200	800	2,600	3,100	1,200	500	200
タケ亜科	100	300	600	1,200	1,200	100	100
ヨシ属	<100	100	300	500	400	<100	-
ウシクサ族	-	-	<100	<100	-	<100	-
不明	400	400	2,300	1,500	1,100	300	200
樹木起源							
第Ⅲグループ	200	<100	100	200	100	<100	-
第Ⅳグループ	100	300	200	300	<100	<100	-
合計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	300	1,200	3,900	10,300	3,800	200	700
イネ科葉身機動細胞珪酸体	800	1,500	6,600	6,700	3,900	1,000	500
樹木起源	300	300	300	400	200	100	0
総計	1,400	3,000	10,800	17,500	7,900	1,300	1,200

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

<100: 100個体未満

なお、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。

表4-5 植物珪酸体含量

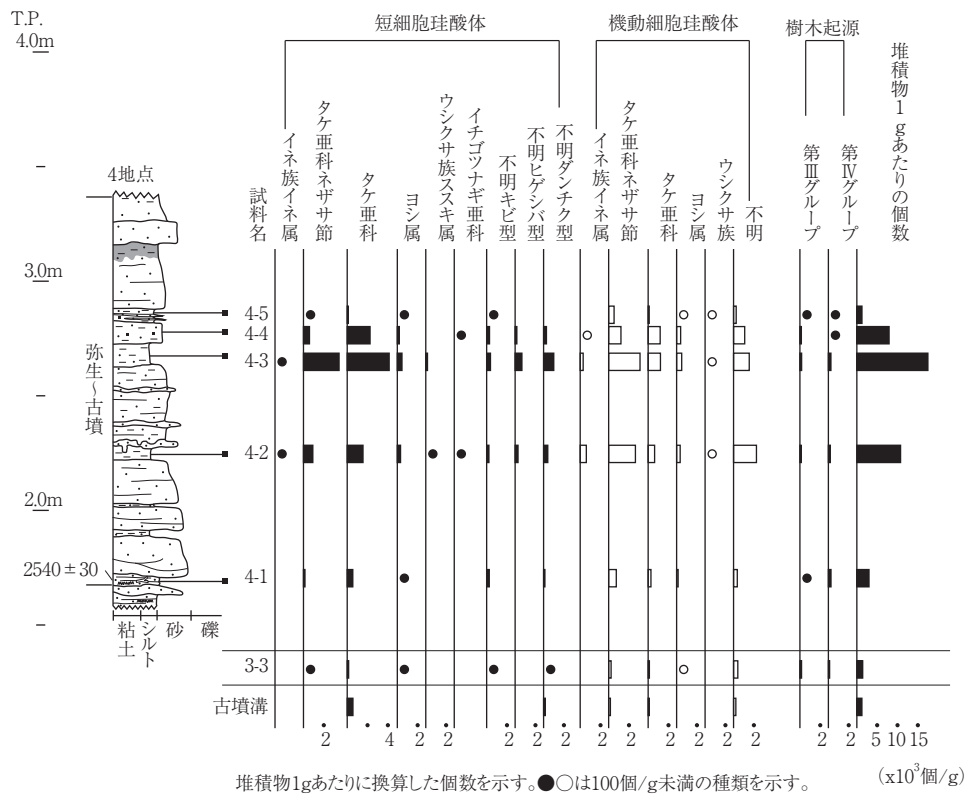


図4-5 植物珪酸体含量

認められる程度である。

4地点の植物珪酸体含量は、試料番号4-5が約1,300個/g、試料番号4-4が約8,000個/g、試料番号4-3が約1.8万個/g、試料番号4-2が約1.1万個/g、試料番号4-1が約3,000個/gである。試料番号4-4、4-3、4-2では、栽培植物のイネ属が検出され、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が認められる。イネ属機動細胞含量は、4-2で600個/g、4-3で300個/g、4-4で100個/g以下である。これらの試料は産状が同様であり、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属や樹木起源珪酸体が認められ、ススキ属を含むウシクサ族やイチゴツナギ亜科がわずかに見られる。

(4) 樹種同定

樹種同定結果を表4-6に示す。同定試料である自然木では、落葉広葉樹2種類(ハンノキ属ハンノキ亜属・エノキ属)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

① ハンノキ属ハンノキ亜属(Alnus subgen. Alnus) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2-4個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと集合放射組織とがある。

② エノキ属(Celtis) ニレ科

環孔材で、孔圏部は2-5列、孔圏外への移行は比較的緩やかで、晩材部では3-6個が塊状または接線状に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-8細胞幅、1-

5. 考察 (1) II 区の堆積環境変遷と地形発達

地区	遺構	層準	時代	試料名	樹種	備考
II 区	SR-1	流路底部	弥生-古墳	試料番号1	エノキ属	No.3
		流路底部	弥生-古墳	試料番号2	ハンノキ属ハンノキ亜属	埋没林
		流路底部	弥生-古墳	試料番号3	ハンノキ属ハンノキ亜属	切株
		流路底部	弥生-古墳	試料番号4	エノキ属	丸太

表4-6 樹種同定結果

粒径区分	礫					砂				
	中礫				細礫	極粗粒砂	粗粒砂	中粒砂	細粒砂	極細粒砂
	64~	32~	16~	8~	4~	2.00~	1.00~	0.50~	0.25~	0.125~
試料名	32mm	16mm	8mm	4mm	2mm	1.00mm	0.50mm	0.25mm	0.125mm	0.063mm
2-1	13.8	10.6	12.6	14.3	8.6	3.0	4.9	12.6	6.5	1.8
2-2	0.0	20.5	33.8	15.3	4.3	0.4	1.4	7.2	5.3	1.9
2-3	0.0	20.6	18.1	15.1	6.9	0.9	3.2	11.6	6.8	2.4
4-3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.2	2.1	11.9	17.3
4-4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	1.4	9.6	16.9	13.0
4-5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	2.9	12.2	19.7
4-6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.1	13.7	19.9

注) 単位は重量%で表示。

表4-7 坪井遺跡の粒度組成1

粒径区分	シルト				粘土 0.0039mm>
	粗粒シルト	中粒シルト	細粒シルト	微粒シルト	
	0.063~	0.031~	0.016~	0.008~	
試料名	0.031mm	0.016mm	0.008mm	0.0039mm	
2-1	1.6	1.8	1.7	1.6	4.7
2-2	1.7	1.6	1.5	1.3	3.8
2-3	2.1	2.3	2.3	1.9	5.8
4-3	14.1	11.9	8.3	6.8	26.9
4-4	11.5	10.2	7.8	6.2	23.3
4-5	16.0	12.6	8.2	6.2	22.1
4-6	17.1	11.9	8.1	6.2	22.1

注) 単位は重量%で表示。

表4-8 坪井遺跡の粒度組成2

50細胞高で鞘細胞が認められる。

(5) 粒度分析

粒度分析結果を表4-7・8, Folk & Ward (1957)による評価を総合して結果を表4-9に示す。また, 粒度分析結果について各粒径頻度分布のグラフを図4-6, Folk (1954)の礫・砂・泥からなる堆積物区分を示した三角ダイアグラムを図4-7に示す。図4-7からは, 2-1~2-3が泥質砂質礫, 4-3・4-4・4-6が泥質砂, 4-5が砂質泥に区分される。なお分級度は, すべての試料で非常に悪いに区分される。

5. 考察

(1) II 区の堆積環境変遷と地形発達

① 堆積ユニットの分布と特徴

現地調査では, II 区において調査終了段階に, 調査区北壁部分をバックホーによって深掘トレンチを掘削し, SR-1および遺構検出面下の断面記載と分析試料の採取を行った。

調査区北壁の深掘断面では, 層理面・再侵食面の分布と層相から, 堆積ユニット1~6の6つの単位の層序区分を試みた。図4-3には, II 区北壁の深掘断面の柱状模式断面図と堆積ユニットの分布,

試料名	M d (中央値)	M z (平均値)	M o (最頻値)	S k (歪度)	σ (分級度)	K g (尖度)
2-1	-0.59 ϕ (1.507mm)	0.50 ϕ (0.705mm)	粗粒砂 (1.585mm)	-0.66 ϕ (1.585mm)	0.89 著しい正	2.30 非常に悪い
2-2	-0.67 ϕ (1.595mm)	0.37 ϕ (0.772mm)	粗粒砂 (1.585mm)	-0.66 ϕ (1.585mm)	0.91 著しい正	2.21 非常に悪い
2-3	-0.60 ϕ (1.518mm)	0.88 ϕ (0.543mm)	粗粒砂 (1.585mm)	-0.66 ϕ (1.585mm)	0.91 著しい正	2.65 非常に悪い
4-3	7.33 ϕ (0.006mm)	6.73 ϕ (0.009mm)	シルト (0.005mm)	7.64 ϕ (0.005mm)	-0.19 負の歪み	2.71 非常に悪い
4-4	6.80 ϕ (0.009mm)	6.16 ϕ (0.014mm)	シルト (0.005mm)	7.64 ϕ (0.005mm)	-0.18 負の歪み	2.91 非常に悪い
4-5	7.07 ϕ (0.007mm)	6.44 ϕ (0.012mm)	シルト (0.005mm)	7.64 ϕ (0.005mm)	-0.21 負の歪み	2.53 非常に悪い
4-6	7.07 ϕ (0.007mm)	6.46 ϕ (0.011mm)	シルト (0.005mm)	7.64 ϕ (0.005mm)	-0.19 負の歪み	2.50 非常に悪い

注) 評価は Folk & Ward (1957) による

表4-9 坪井遺跡の粒度組成解析結果

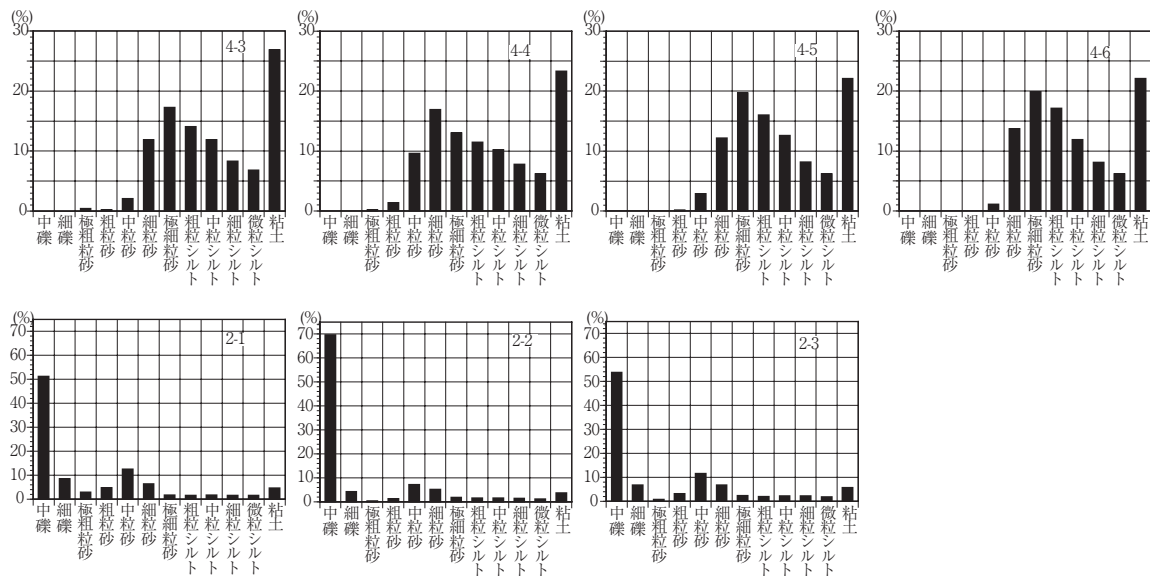


図4-6 粒度分析結果

分析試料の採取状況などを示す。以下に、各堆積ユニットごとの地質学的記載を、現地調査での層相記載と粒度分析結果をふまえる。

SR-1の基盤層では、ユニット5・6が累重する。このうちユニット6は、SR-1の西肩部を構成する堆積層である。下半部では、細粒砂～中粒砂の葉理が多く挟在する、腐植質に富む植物遺体混じりの砂質粘土質シルト～砂質シルト層で構成される。上半部は、平行葉理をなすシルト混じり細粒砂～中粒砂層からなる。

ユニット5は、泥層の薄層を挟在する泥質砂層で構成される。本ユニットは、SR-1の東肩部に累重し、層相から5a～5dの4つに細分される。最下部のユニット5dに挟在する木材片からは、2540 ± 30 yrs BP (Cal BC 800 - 540) と、縄文時代晩期末～弥生時代前期の年代(西本編,2006)を示す放射性炭素年代測定値が得られている。なお、ユニット5dと5bで

5. 考察 (1) II区の堆積環境変遷と地形発達

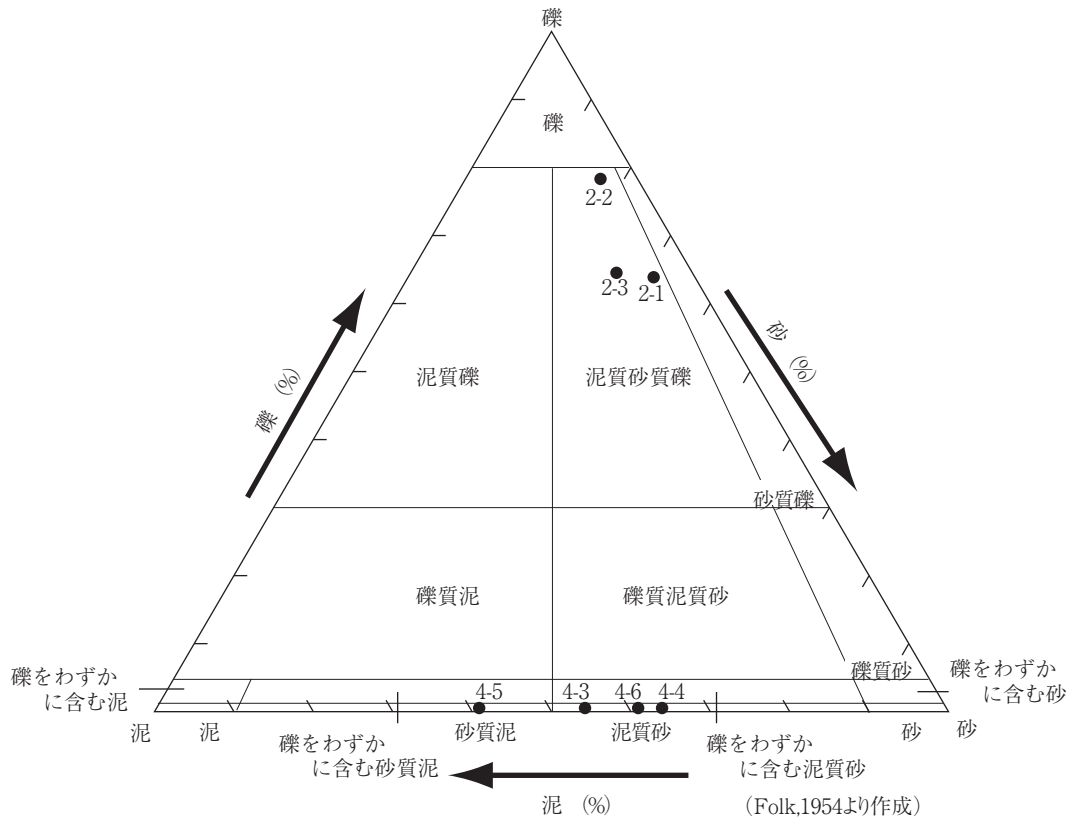


図4-7 三角ダイアグラム(粒度分析結果)

は、深掘トレンチの端部において砂礫層との同時異相関係が観察された。

ユニット4～2は、SR-1を埋積する堆積層である。流路最下部のユニット4は、SR-1の流路底部分でトラフ型斜交層理・葉理をなし、極粗粒の中礫(very coarse pebbles:32-64mm)を最大礫径とする中粒の中礫(medium pebbles:8-16mm)～粗粒の中礫(coarse pebbles:16-32mm)、基質部が粗粒砂～極粗粒砂からなる泥質砂質礫層で構成される。この泥質砂質礫層は、側方への細粒化が観察され、平行葉理をなす泥質砂層へと変化する。流路底部分の本ユニットの最上部では、埋没林と材化石の集積が確認される。

ユニット3は、直下のユニット4と同様の累重様式を示す。すなわち、SR-1の流路底部分では、トラフ型斜交層理・葉理をなす中粒の中礫～粗粒の中礫、基質部が粗粒砂～極粗粒砂からなる泥質砂質礫層が分布する。SR-1の東と西の両肩部には、この泥質砂質礫層と同時異相の平行葉理をなす泥質砂層が累重する。なお、本ユニット最下部、流路底の中心部には、植物遺体を多量に含む腐植質の泥質砂層が存在する。この泥質砂層の植物遺体からは、古墳時代の年代値を示す 1650 ± 30 yrs BP (Cal AD 260-530)の放射性炭素年代測定値が得られている。

ユニット2は、下半部に斜交葉理をなす極粗粒砂層と、腐植に富み植物遺体を挟在する平行葉理の砂質泥層が堆積する。上半部には、中粒砂層の葉理を挟在する上方細粒化を示す平行葉理をなす極細粒砂～細粒砂層を主体とする泥質砂層が累重する。このユニット2と現在の盛土の間には、人為的擾乱を受け塊状をなす砂質泥層が存在する。

② II区の堆積環境変遷と地形発達史

SR-1を充填するユニット2～3と、その東肩部に存在する堆積ユニット5では、礫を主体となす

堆積層から、それと同時異相をなし、砂泥互層や泥質砂層へと、側方細粒化する層相変化が観察される。また、これらの堆積層は、全体として明瞭な上方細粒化の傾向を示す。上記のような層相と堆積層の分布から、ユニット2～5については、流路状の凹地を埋積する砂礫層が河床堆積物、それらと同時異相をなし側方へ層状に分布する砂泥互層や泥質砂層が氾濫原堆積物と認定される。

このような累重状況をふまえると、堆積ユニット2～5は、蛇行河川の堆積システムによって形成されたと解釈される(増田,1999)。蛇行河川の堆積システムでは、河床堆積物(in-channel deposit)と氾濫原堆積物(overbank deposit)に大きく区分される(増田・伊勢屋,1985)。このうち河床堆積物は、流路基底に存在する残留堆積物(lag deposit)と、流路本体や蛇行内側の側縁部を構成するポイントバー堆積物(point bar deposit)に細分される。氾濫原堆積物は、滑走斜面堆積物(slipoff deposit)、河畔堆積砂(natural levee deposit)、後背湿地堆積物(back swamp deposit)に区分される(増田・伊勢屋,1985)。また、河畔堆積砂については、その積層が自然堤防を形成する。

今回観察を行ったSR-1内を埋積する河床堆積物では、斜交層理が明瞭に認められる。このような斜交層理は、当時の河床を構成する砂礫質堆積物の表層、すなわち砂礫床表面に形作られるベットフォーム(砂床形)のうち、砂碓などのリップル形が洪水時に移動・累積することに伴って形成される(Reineck and Singh,1980;フリッツ・ムーア,1999)。

上述のような堆積物で埋積されるSR-1は、西側に弧を描いて緩やかに蛇行することが、発掘調査において砂礫部分を掘削した掘方の平面形から読みとれる。SR-1の断面形については、西肩で急傾斜となり深い侵食が観察されるのに対し、東肩で緩やかとなり、河床堆積物と同時異相をなす氾濫原堆積物が厚く累重する。このような平面形と断面形および層相から、調査区では、SR-1の西肩部が流路の攻撃斜面、東肩が滑走斜面に相当すると判断される。河床堆積物と同時異相をなす氾濫原堆積物については、河岸斜面の形態をふまえると、西肩部で河畔堆積砂、東肩部で滑走斜面堆積物と河畔堆積砂がおもに分布するものと思われる。このような河床と氾濫原堆積物からなるユニット2～5は、発掘結果と放射性炭素年代測定結果から、弥生時代～古墳時代にかけて形成されたと考えられる。

以上のような堆積物の特徴と年代値から、弥生時代～古墳時代に、Ⅱ区では流路とその河岸をなす自然堤防からなる地形が形成されていたと判断される。このような古地形から、当該期にⅡ区が位置する氾濫原上は、高燥な土壤環境であったことが推定される。河岸部の4地点で実施した花粉分析では、化石の保存状態が非常に悪く、堆積・地形状況から推定される土壤・水文条件と調和的な結果が得られている。今回の深掘トレンチにおいて最下部に位置し、年代的に最も古いユニット6については、層相から下半部が流路縁、上半部が河岸をなす堆積物で構成されると推定される。従って、本調査区での流路・河岸形成は、堆積ユニット5dから得られた年代値である縄文時代晩期末～弥生時代前期ないしそれ以前に遡るものと捉えられる。なお、Ⅱ区で検出された流路は、走向方向や周囲の地形から、調査区の北側に延びる丘陵部の開析谷から流下してきたものと推測される(図4-8)。

ところで、SR-1内のユニット4とユニット3間には、当時の流路底において、ハンノキ亜属の埋没樹が検出されている。このことから、ユニット4からユニット3間までの埋没には、樹木の着生から生育までの、ある程度の時間間隙が存在していたことが確認される。埋没樹の生育状況をふまえると、堆積ユニット4段階には、形成途中に上流側での流路変更が生じ、流路内が放棄流路となり、

5. 考察 (2) 古植生

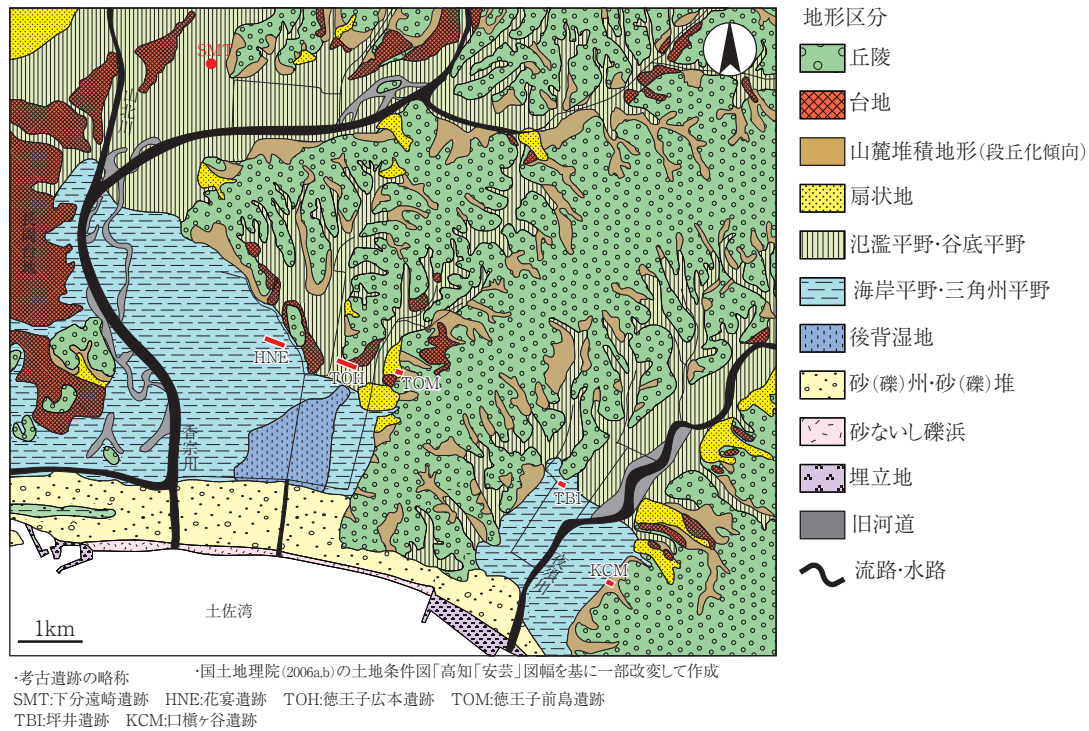


図4-8 坪井遺跡周辺地形分類図

帯状の凹地として一定期間、開放状態になる時期があったことが推定される。通常、沖積低地では、放棄流路内に泥炭や腐植質の泥層が厚く累重する。しかしながら、今回の調査区では、このような泥質な堆積物がほとんどみられず、ユニット3最下部に腐植質の泥質砂層が薄く堆積するのみである。このように放棄流路を埋積する泥層がほとんど累重しない要因については、調査区周辺の相対的な水位が低かったことに起因すると推測される。

その後、SR-1では、浮遊土砂を中心とするユニット2によって埋積される。ユニット2は、層相と粒度組成から、SR-1に流入した洪水流によって運搬されてきた堆積物と解釈される。ユニット2の下部に存在するユニット3・4についても、細粒砂以細の碎屑物が比較的多く含まれることが粒度分析結果から読みとれる。このような粒度分析結果から、特に放棄流路を埋積する堆積ユニット3については、洪水時に短時間で形成された堆積層の可能性が示唆される。このようなユニット2・3の上部には、古土壌とともに古墳時代の溝が形成される。このことから、古墳時代のある段階には、調査区で流路と自然堤防を形成するような地形発達が停止したことがうかがえる。

よって、今回調査・分析を実施したⅡ区では、弥生時代以前および弥生時代～古墳時代にかけて流路と氾濫原面の埋積が進行し、その後、氾濫堆積物の流入がほとんどなく、土壤発達が卓越するような安定した氾濫原が維持されるような堆積場へと変化したものと解釈される。

(2) 古植生

① 調査区をとりまく森林植生

花粉分析試料では、化石の保存状態が不良で、統計的に扱えるだけの個数が算出したのは4地点の試料番号2と3地点の試料番号3だけであった。保存状態が不良ながら産出した木本花粉の化石群集から、坪井遺跡をとりまく夜須川流域の山地・丘陵斜面では、弥生時代～古墳時代に、カシ類・シイ類などの暖温帯性常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)が主体となし、モミ属、ツガ属、コウヤマキ

属、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科といった温帯性針葉樹林や、サワグルミ属、クルミ属、クマシデ属-アサダ属、カバノキ属、コナラ亜属といった落葉広葉樹が混生する森林が存在していたことが推定される。

なお、本遺跡で注目される分析結果としては、同時期頃に対比される花宴遺跡の分析結果に比べ、マツ属の比率が高いことにある。マツ属花粉は、その多くが複維管束亜属に由来するものであり、本亜属に含まれる種はアカマツ・クロマツがある。両樹種ともに陽樹であり、特にアカマツは二次林を構成する代表的な樹種である。そのため、マツ属の多産については、坪井遺跡周辺での人間活動による植生干渉の影響によって生じた二次林の可能性も十分に考えられる。ただし、坪井遺跡では、遺跡周辺の森林において主要構成要素である暖温帯性常緑広葉樹林の構成要素の産出状況について、マツ属花粉が低率であった花宴遺跡との間に産出率に大きな差が認められない。坪井遺跡は、浜堤の発達する海岸部まで南へ約900m前後と近接した距離に位置している。この立地環境をふまえると、本遺跡の花粉分析結果で認められるマツ属は、浜堤上に生育する海岸林と成立したクロマツなどのマツ林に由来するものと判断される。

放棄流路内の流路底に堆積した3地点の試料番号3では、河岸堆積物の4地点の試料番号2に比べ、豊富な木本花粉の種類構成を示す。本地点の花粉分析結果と層準の堆積環境から、調査区周囲には、先に述べた温帯性針葉樹林、落葉広葉樹が混生する暖温帯性常緑広葉樹林を構成する樹木の他に、モチノキ属、キハダ属、カエデ属、ハイノキ属、イボタノキ属なども分布していたと考えられる。このような木本花粉の豊富な種類構成は、花宴遺跡において認められていない。坪井遺跡と花宴遺跡における花粉化石群集の差異については、遺跡周辺の地形状況をふまえると、本遺跡の方がより森林域に近かったことに起因する可能性が想定される。よって、分析を実施したⅡ区では、当時成立していた森林域に比較的近い領域に位置していたことが推測される。

上述した木本花粉以外で確認される種類については、河川氾濫原の自然堤防上でニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属やコナラ亜属の一部が河畔林、Ⅱ区で確認されたような放棄流路内や沼沢地、後背湿地でハンノキ属が湿地林として林分が構成していたものと考えられる。また、ヤマモモ属やノブドウ属、ミズキ属、スイカズラ属などは、山地・丘陵や台地と氾濫原の境界部付近の林縁などにその存在が見込まれる。

② 調査区およびその近辺の植生景観

次に、調査区やその近辺の局地的な古植生をより強く反映していると認識される草本花粉を中心とした化石群集についてみていきたい。上述したように弥生時代～古墳時代には、調査区で流路・自然堤防からなる高燥な土地条件が形成されていたと考えられる。当該期の河岸堆積物である4地点の試料番号2では、草本花粉の産出率が高い。古地形をふまえると、弥生時代～古墳時代に調査区では、河原などの荒れ地の分布するヨモギ属や、明るく開けた高燥地に生育するネザザ節などからなる草地を主体とする植生景観が展開していたものと推測される。水湿地生のガマ属、オモダカ属、スブタ属、ミズアオイ属は、調査区周辺の後背湿地などに分布していたものと考えられる。

次に植物珪酸体分析結果をみていくと、ユニット5の中部から最上部では、栽培種のイネ属が層位的に連続して検出されていることに着目される。ただしその含量は、イネ属機動細胞で数百個/g程度と少ない。現地での堆積層観察では、4地点の試料番号4の堆積層において、人為的に攪乱されたと思われる炭化物を多く含む塊状の層相の存在も確認される。これらの結果をふまえると、SR-1

6. 小結 (2) 古植生

の形成以前に、調査区やその周辺では、水田などの耕作地が存在していた可能性が想定される。

(3) SR-1の放棄流路内の木材

SR-1から出土した埋没樹はハンノキ亜属、その他の自然木は、ハンノキ亜属とエノキ属であった。この樹種同定結果から、SR-1とその周囲では、これらの樹種が生育していたことが推定される。日本に分布するハンノキ亜属には7種類(ハンノキ・サクラバハンノキ・ケヤマハンノキ・ミヤマカワラハンノキ・カワラハンノキ・ヤハズハンノキ・サルクラハンノキ)があるが、四国にはハンノキ、ケヤマハンノキ、カワラハンノキの3種が分布している。本地域の現植生等を考慮すれば、河畔林・湿地林等を構成するハンノキやカワラハンノキの可能性が高い。一方、エノキ属には4種類(エノキ・エゾエノキ・コバノチョウセンエノキ・クワノハエノキ)があり、四国にはクワノハエノキを除く3種が分布している。このうち、エゾエノキとコバノチョウセンエノキは山地に生育する種類である。地形および堆積環境をふまえると、今回のエノキ属は低地の自然堤防上などに生育するエノキの可能性が高い。

6. 小結

今回の調査・分析から、以下のような内容の可能性や蓋然性が示された。

(1) 堆積環境

- ・氾濫原上に位置するⅡ区を構成する堆積層は、蛇行河川の堆積システムによって形成された。
- ・放射性炭素年代値と遺跡発掘調査結果から、Ⅱ区では、弥生時代以前および弥生時代～古墳時代にかけて氾濫原面が形成されたことが示唆された。
- ・弥生時代～古墳時代に調査区では、流路とその河岸をなす自然堤防からなる地形が形成された。
- ・弥生時代～古墳時代にSR-1では、洪水などの間欠的な土砂流入によって、埋没が進行した。
- ・弥生時代～古墳時代にSR-1では、一時期、放棄流路が形成され、その流路底などでハンノキ属の樹木が生育した。
- ・SR-1は、走向方向や周囲の地形から、調査区の北側に延びる丘陵部の開析谷から流下してきたものと推測された。
- ・古墳時代のある段階に、調査区では流路と自然堤防を形成するような地形発達が停止して、その後、非常に安定した氾濫原面となった。

(2) 古植生

- ・Ⅱ区は、弥生時代～古墳時代に当時成立していた森林域に比較的近い領域に位置していたことが推測された。
- ・夜須川流域の山地・丘陵斜面の森林域では、弥生時代～古墳時代に、カシ類・シイ類などの暖温帯性常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)が主体となし、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属、イチイ科-イネガヤ科-ヒノキ科といった温帯性針葉樹林や、サワグルミ属、クルミ属、クマシデ属-アサダ属、カバノキ属、コナラ亜属といった落葉広葉樹、その他、モチノキ属、キハダ属、カエデ属、ハイノキ属、イボタノキ属なども分布していた。
- ・花宴遺跡に比べ弥生～古墳の層準で多産したマツ属は、浜堤上に生育する海岸林と成立したクロマツなどのマツ林に由来するものと判断された。
- ・弥生時代～古墳時代に調査区周囲の河川氾濫原では、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属やコナラ亜属の一部が自然堤防上において河畔林を、ハンノキ属が放棄流路内や沼沢地、後背湿地の

湿地林として林分が構成していたことが推定された。

- ・ 弥生時代～古墳時代の層準では、花粉・植物珪酸体とも保存状態が不良で、好気的な環境下での分解消失したことが示唆された。
- ・ 弥生時代～古墳時代に調査区ないしその近辺では、SR - 1の形成以前に水田が存在していた可能性が指摘された。
- ・ 弥生時代～古墳時代に調査区では、ヨモギ属やネザザ節などからなる草地を主体とする植生景観が展開していたことが推定された。
- ・ SR - 1流路底で検出された埋没樹は、ハンノキ属に同定された。地形および樹種から、この埋没樹は、放棄流路内に着生したものと考えられた。
- ・ 埋没樹以外の樹種は、ハンノキ亜属とエノキ属に同定された。いずれの樹種も調査区周囲に生育する樹木と考えられた。

引用文献

- Fork,R.L.,1954,The distinction between grain size and mineral composition in sedimentary - rock nomenclature.J.Geol.,62,344 - 359.
- Fork,R.L. and Ward,W.,1957,Brazons river bar,a study in the significance of grain size parameters. Journal of Sedimentary Petrology,27,3 - 26.
- Friedman,1961,Distinction between dune,beach, and river sands from their textural characteristics. Journal of Sedimentary Petrology,31,514 - 529.
- ウィリアム J. フリッツ・ジョニー N. ムーア,1999,層序学と堆積学の基礎. 原田 憲一訳,愛智出版,386p,[Fritz,W. J.and Moore,J.N. (1998) Basics of Physical Stratigraphy and Sedimentology,John Wiley & Sons].
- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81 - 181.
- 伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66 - 176.
- 伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83 - 21.
- 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30 - 166.
- 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47 - 216.
- 近藤 鍊三,2004,植物ケイ酸体研究. ペドロジスト,48,46 - 64.
- 近藤 鍊三・ピアスン 友子,1981,樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報) 双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について. 帯広畜産大学研究報告,12, 217 - 229.
- 公文 富士夫・立石 雅昭編,1998,碎屑物の研究法. 地学団体研究会,399p.
- 増田 富士雄,1999,透水層・帯水層のトレース:ダイナミック地層学からのアプローチ. 地下水技術,41,1 - 15.
- 増田 富士夫・伊勢屋 ふじ子,1985,"逆グレーディング構造":自然堤防帯における氾濫洪水堆積物の示相堆積構造. 堆積学研究会会誌,22・23,p.108 - 116.
- 中嶋 雅宏・中山 勝博・百原 新・塚腰 実,2004,中新統土岐口陶土層の堆積過程と産出する大型植物化石の水理的挙動 - 岐阜県多治見市大洞地区の例 -. 地質学雑誌,110,204 - 221.
- 西本 豊弘編,2006,新弥生時代のはじまり 第1巻 弥生時代の新年代. 雄山閣,143p.
- 島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.

引用文献

- 杉山 真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール).辻 誠一郎編著 考古学と自然科学3 考古学と植物学,同成社,189 - 213.
- Reineck,H.E. and Singh,I.B.,1980,Depositional Sedimentary Enviroments (2nd ed.) .Springer, 551p.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編) ,2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- Wentworth,C.K.,1922,A scale of grade and class terms for clasticsediments. J.Geol,30,377 - 392.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編) ,1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第V章 考察

1. 弥生時代

本遺跡で確認された最も古い時期で、Ⅰ・Ⅱ区で検出された自然流路が本遺跡で認められた当該期唯一の遺構である。自然流路が検出されたⅠ・Ⅱ区は夜須川右岸に広がる氾濫原上に存在する微高地に位置しており、竪穴建物跡など人間活動に関連する遺構は確認されていない。この自然流路は自然科学分析において、調査区北側に延びる丘陵部の開析谷から流下していたものと推測されており、形成時期は縄文時代晩期～弥生時代前期とされている。流路底の植物遺体からは1,650 ± 30yrs BP (Cal AD 260 - 530)の放射性炭素年代測定値が得られていることから、古墳時代前期までは機能していたことが窺える。また、この自然流路が埋没したあとに掘削されたと考えられるⅡ区のSD-1～3からは古墳時代初頭から古墳時代前期と考えられる遺物が出土しており、比較的短期間に埋没したものと推測される。

2. 古墳時代

当該期の遺構はⅡ・Ⅲ区で確認されており、検出された遺構は北側から派生した丘陵裾部に位置するⅢ区を中心に存在している。このうちⅡ区では土坑、溝跡、Ⅲ区では竪穴建物跡、土坑などが検出されている。Ⅱ区で確認されたSK-1からは土師器の高杯や椀がまとまって出土しており、祭祀に使用した土器を廃棄したものと考えられる。

Ⅲ区では当該期の明確な遺物包含層は確認されておらず、地山上で竪穴建物跡4軒や土坑など当該期の遺構を検出したが、確認された竪穴建物跡ST-1～4は後世の削平により遺存状態はよくなかった。これら4軒の竪穴建物跡は方形を呈するものが3軒、隅丸方形を呈するものが1軒であり、ベット状遺構は確認されなかった。このうち、ST-2はST-1・3・4に比べ規模が小さく、遺物出土量も極端に少ないことから建物の性格が異なると考えられる。

遺物は土師器の高杯、鉢、壺、甕、手づくね土器などが出土しており、極少量の須恵器も認められる。ST-1から出土している208は6～7世紀代と考えられ、本遺跡で確認された竪穴建物跡は古墳時代後期に存在していたものとみられる。また、これら竪穴建物跡から出土した遺物の組成はST-1が高杯45%、鉢3%、甕39%、壺6%、ST-3が高杯50%、鉢0%、甕50%、壺0%、ST-4が高杯62%、鉢0%、甕31%、壺0%と高杯と甕の占める割合が多いが、特に高杯の比率が高い。

時期は異なるが具同中山遺跡群で検出された祭祀に関連したと考えられる竪穴建物跡の遺物組成比率も土師器高杯32%、鉢21%、甕16%、壺10%であり、高杯が全体の約1/3を占めている。当遺跡で確認された祭祀関連遺構も同じ様相を呈する。

これらのことからみれば、本遺跡で確認された竪穴建物跡は当該期の一般的な建物ではなく、具同中山遺跡群のような祭祀に関連する建物であった可能性が考えられる。また、ST-4から出土している229のような穿孔された甕やST-1・4から出土している手づくね土器の存在もこれらの竪穴建物跡が祭祀に関連する建物であった可能性を補完するものとみられる。

3. 古代

当該期の遺構はⅢ区を中心とした段丘上を中心に掘立柱建物跡や土坑などが確認されている。検

5. まとめ

出された掘立柱建物跡SB-1～4のうち全体が確認されたものはSB-3のみであり、SB-1・2は調査区外へ続き、SB-4は後世の地形改変によって削平されていた。また、棟方向の違いからSB-1～3とSB-4の二つに分けることができ、この二つの建物群には時期差が存在するとみられる。

遺物は土師器、須恵器、土師質土器、緑釉陶器などが出土している。一連の建物群とみられるSB-1～3ではSB-2を構成する柱穴から9世紀後半と考えられる緑釉陶器(239)が出土しており、当該期に存在していたことを示している。SB-4からは出土した遺物は細片のみであり遺物から時期を特定することはできない。また、2次堆積層であるが古代瓦が多く出土しており、標高が高くなるⅢ区の北西側には瓦葺きの建物があったことが推測されるが、後世の削平により跡形もなく削り取られたと考えられる。

なお、夜須川を挟んで本遺跡の東側に所在する口槇ヶ谷遺跡では8世紀後半から9世紀後半とみられる掘立柱建物群が検出されており、本遺跡との関連性が考えられる。

4. 中世

当該期の遺構はⅢ区でのみ検出されており、掘立柱建物跡や土坑、溝跡などが確認されている。検出されたSB-5・6は棟方向がほぼ直交することから一連の建物群と考えられる。これらの建物が立地するⅢ区の北西側は他の箇所より傾斜が緩くなっており、当該期に居住域として造成したものとみられる。

出土遺物には土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器などがみられた。明確に時期を比定するものは出土しておらず断定することができないが、出土している土師質土器などから12～13世紀と推測される。前述した口槇ヶ谷遺跡でも当該期の掘立柱建物跡が確認されており、夜須川の両岸には中世の集落が点在していたことが窺える。

5. まとめ

本遺跡の発掘調査では弥生時代から近世までの遺構・遺物が確認されており、時代ごとに本遺跡の変遷をまとめてみたい。

本調査区で初めて人の痕跡が認められるのは古墳時代前期である。Ⅱ区において祭祀行為を行っていたと考えられ、土器の廃棄土坑が検出されている。その後、古墳時代後期には調査区西側の丘陵部において集落が営まれるようになり、4軒の竪穴建物跡が確認されている。これらの竪穴建物跡は一般的な集落とは異なり、祭祀に関連した集落であった可能性が考えられる。この集落が廃絶したあと数百年の空白期間を経て、古代の後半には官衙に関連する施設が造られ、2次堆積層であるが古代瓦の出土は本遺跡に瓦葺きの建物が存在していた可能性を示唆するものである。

その後、中世には再び集落が営まれるが中世後期には廃絶し、土層の観察結果からたびたび地形改変が行われ、近世以降は耕作地として利用されたと考えられる。

参考文献

- 山本純代 2002「第V章 考察」『具同中山遺跡群Ⅲ-3』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
下村 裕 2008『口槇ヶ谷遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

遺物觀察表

凡例

法量は土器を基準にcmで示しているが、土製品・石製品の場合は口径が全長(cm)、器高が全幅(cm)、胴径が全厚(cm)、底径が重量(g)と読み替えている。それ以外の値については、特徴または本文中に記している。かっこ付きの数値は残存値を示している。

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
1	I区 第Ⅲ層	須恵器 壺	-	(24)	-	-	暗灰黄色 灰色	良好	口縁部破片で、器面には回転ナデ調整
2	〃 〃	土師質土器 杯	-	(1.6)	-	6.8	にぶい橙色 〃	やや不良	底部破片で、調整は不明、底部切り離しは回転糸切り
3	〃 〃	〃 鍋	-	(5.4)	-	-	灰黄色 にぶい黄褐色	良好	底部を欠損し、口縁部内面には回転ナデ調整、外面にはヨコナデ調整
4	〃 〃	近世陶器 碗	-	(2.7)	-	4.0	黄褐色 〃	〃	口縁部を欠損し、体部外面には回転ナデ調整、高台は削り出して、見込に砂目
5	〃 〃	近世磁器 碗	-	(2.6)	-	6.0	灰白色 〃	〃	見込に草花文、高台内外面に圏線
6	〃 〃	銅製品 煙管	(8.1)	1.0	0.7	-	褐色	-	吸口のみ残存
7	Ⅱ区 〃	須恵器 杯身	11.4	(2.7)	-	-	灰色 〃	良好	底部を欠損し、器面には回転ナデ調整
8	Ⅲ区 第Ⅱ層	〃 甕(転用硯)	(10.3)	(14.8)	1.3	-	〃 〃	〃	内面に同心円文状のタタキ目、外面にタタキ目とハケ目、部分的に墨が残存
9	〃 〃	緑釉陶器 皿	-	(1.2)	-	6.3	〃 〃	〃	底部破片で、硬質系、体部外面下端に回転ヘラ削り、底部切り離しは回転糸切り
10	〃 〃	土師質土器 杯	-	(4.6)	-	7.6	灰白色 浅黄橙色	やや不良	成形はロクロ水挽で、調整は不明、底部切り離しは回転糸切り
11	〃 〃	青磁 碗	16.5	(3.5)	-	-	灰オリーブ色 〃	良好	龍泉窯系の口縁部破片で、内面に草花文
12	〃 第Ⅳ層	土師器 高杯	-	(6.0)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい赤褐色	〃	脚裾部を欠損し、調整は不明、内面にはしまり目
13	〃 〃	〃 〃	-	(7.1)	-	-	灰白色 橙色	やや不良	脚裾部を欠損し、調整は不明
14	〃 〃	〃 〃	-	(5.7)	-	-	橙色 〃	〃	脚裾端部を欠損し、調整は不明
15	〃 〃	〃 甕	-	(7.3)	-	-	にぶい褐色 〃	良好	口縁部破片で、調整は不明
16	〃 〃	〃 羽釜	-	(7.4)	-	-	にぶい黄橙色 灰褐色	やや不良	口縁部破片で、外面にはハケ調整
17	〃 〃	須恵器 杯蓋	-	(1.7)	-	-	灰白色 〃	〃	つまみと天井部の一部が残存し、内面にはナデ調整、外面には回転ナデ調整
18	〃 〃	〃 〃	-	(1.8)	-	-	灰色 〃	良好	つまみと天井部が残存し、内外面とも回転ナデ調整
19	〃 〃	〃 〃	-	(1.5)	-	-	褐灰色 黄灰色	〃	つまみと天井部が残存し、内面は回転ナデ調整のあとナデ調整、外面にはナデ調整
20	〃 〃	〃 〃	-	(1.6)	-	-	黄灰色 〃	〃	つまみと天井部の一部が残存し、つまみに自然釉、内面は回転ナデ調整のあとナデ調整
21	〃 〃	〃 〃	-	(1.8)	-	-	灰色 〃	〃	つまみと天井部の一部が残存し、内面にはナデ調整、外面には回転ナデ調整
22	〃 〃	〃 〃	14.4	(1.7)	-	-	〃 〃	〃	つまみと天井部の一部を欠損、天井部外面にナデ調整、口縁部内外面に回転ナデ調整
23	〃 〃	〃 杯	-	(1.8)	-	6.9	褐灰色 〃	〃	底部破片で、体部は内外面とも回転ナデ調整、体部外面下端には回転ヘラ削り
24	〃 〃	〃 〃	-	(2.4)	-	7.0	褐灰色 灰黄褐色	〃	底部破片で、体部は内外面とも回転ナデ調整
25	〃 〃	〃 〃	-	(1.5)	-	8.4	灰白色 〃	〃	底部破片で、調整は不明

遺物観察表2

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面		
26	Ⅲ区 第Ⅴ層	須恵器 杯	-	(2.6)	-	8.5	灰色 〃	良好	底部破片で、器面には回転ナデ調整、底部切り離しは回転ヘラ切り
27	〃 〃	〃 〃	-	(1.2)	-	8.6	灰白色 〃	〃	底部破片で、調整は不明、底部外面に線刻
28	〃 〃	〃 〃	-	(1.6)	-	8.8	〃 〃	〃	底部破片で、外面に自然釉、底部内面はナデ調整、体部外面下端には回転ヘラ削り
29	〃 〃	〃 〃	-	(2.6)	-	8.9	灰黄褐色 にぶい黄橙色	〃	底部破片で、内外面とも回転ナデ調整
30	〃 〃	〃 〃	-	(1.6)	-	9.0	灰色 〃	やや不良	底部破片で、体部外面下端には回転ヘラ削り
31	〃 〃	〃 〃	-	(2.3)	-	9.2	灰白色 〃	良好	底部破片で、体部外面は回転ナデ調整、下端には回転ヘラ削り
32	〃 〃	〃 〃	-	(1.8)	-	9.8	灰白色 灰色	〃	底部破片で、体部内面には回転ナデ調整、外面下端には回転ヘラ削り
33	〃 〃	〃 〃	-	(1.6)	-	10.3	灰白色 〃	〃	底部破片で、内外面とも回転ナデ調整、底部切り離しは回転ヘラ切り
34	〃 〃	〃 高杯	-	(7.0)	-	-	灰色 灰白色	やや不良	脚柱部が残存し、調整は不明
35	〃 〃	〃 壺	-	(2.0)	-	6.9	灰白色 〃	良好	底部破片で、胴部外面下端には回転ヘラ削り、底部内面には回転ナデ調整
36	〃 〃	〃 〃	-	(2.2)	-	11.0	〃 〃	〃	底部破片で、底部内面に回転ナデ調整のあとナデ調整、外面にはナデ調整
37	〃 〃	〃 〃	-	(2.9)	-	11.9	灰色 〃	〃	底部破片で、器面には回転ナデ調整
38	〃 〃	〃 杯(転用碗)	-	(1.7)	-	11.2	〃 〃	〃	杯を転用し、底部内面には使用痕と墨が残る
39	〃 〃	緑釉陶器 杯	-	(2.3)	-	5.8	灰黄色 〃	〃	底部破片で、軟質系、調整は不明
40	〃 〃	〃 〃	-	(1.5)	-	6.0	にぶい黄褐色 〃	やや不良	底部破片で、軟質系、外面に釉が残る
41	〃 〃	〃 〃	-	(1.8)	-	7.4	浅黄褐色 〃	〃	底部破片で、軟質系、外面に釉が残る
42	〃 〃	瓦 平瓦	(7.3)	(5.7)	1.7	-	灰黄褐色 暗褐色	良好	凹面に布目圧痕、凸面に縄目状のタタキ目、側面にはヘラ削り
43	〃 〃	〃 〃	(5.4)	(6.4)	1.4	-	にぶい橙色 橙色	やや不良	凹面に布目圧痕、凸面に縄目状のタタキ目、側面と凸面にはヘラ削り
44	〃 〃	〃 〃	(6.3)	(7.6)	1.7	-	にぶい赤褐色 〃	〃	凹面に布目圧痕、凸面に縄目状のタタキ目、側面にはヘラ削り
45	〃 〃	〃 〃	(9.5)	(12.8)	1.9	-	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	〃	凹面に布目圧痕、凸面に縄目状のタタキ目、側面にはヘラ削り
46	〃 〃	土師質土器 杯	10.2	2.2	-	5.8	にぶい橙 〃	〃	調整は不明で、底部切り離しは回転ヘラ切り
47	〃 〃	〃 〃	12.7	3.5	-	6.0	橙色 〃	〃	調整は不明
48	〃 〃	〃 〃	-	(1.3)	-	5.4	〃 〃	〃	底部破片で、調整は不明、底部切り離しは回転ヘラ切り
49	〃 〃	〃 〃	-	(2.3)	-	5.6	浅黄褐色 〃	〃	底部破片で、調整は不明、底部切り離しは回転糸切り
50	〃 〃	〃 〃	-	(2.3)	-	6.8	灰白色 浅黄褐色	〃	底部破片で、調整は不明、底部切り離しは回転糸切り

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
51	Ⅲ区 第Ⅳ層	土師質土器 杯	-	(1.9)	-	7.7	淡黄色 〃	やや不良	底部破片で、調整は不明
52	〃 〃	〃 〃	-	(1.4)	-	7.4	浅黄橙色 橙色	不良	底部破片で、調整は不明、底部切り離しは回転糸切り
53	〃 〃	〃 〃	-	(1.4)	-	8.4	浅黄橙色 〃	〃	底部破片で、調整は不明、底部切り離しは回転糸切り
54	〃 〃	〃 〃	-	(2.1)	-	7.1	灰白色 〃	やや不良	底部破片で、調整は不明、白色系
55	〃 〃	〃 椀	13.6	(4.0)	-	-	〃 〃	良好	口縁部破片で、器面には回転ナデ調整、白色系
56	〃 〃	〃 〃	-	(1.4)	-	6.8	灰白色 にぶい黄橙色	不良	底部破片で、調整は不明
57	〃 〃	〃 〃	-	(1.9)	-	6.8	灰白色 〃	やや不良	底部破片で、調整は不明、体部外面下端には回転ヘラ削り
58	〃 〃	〃 〃	-	(1.7)	-	6.8	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	底部破片で、調整は不明
59	〃 〃	〃 〃	-	(2.0)	-	7.2	灰白色 〃	〃	底部破片で、調整は不明
60	〃 〃	〃 〃	-	(1.7)	-	5.9	〃 〃	〃	底部破片で、体部外面下端には回転ヘラ削り、白色系
61	〃 〃	〃 〃	-	(1.9)	-	6.5	〃 〃	〃	底部破片で、体部外面下端には回転ヘラ削り、白色系
62	〃 〃	青磁 碗	15.8	(4.9)	-	-	オリーブ灰色 〃	良好	口縁部破片で、外面には鎚蓮弁
63	〃 〃	〃 〃	-	(3.9)	-	-	〃 〃	〃	体部破片で、内面には草花文
64	〃 〃	〃 〃	-	(4.4)	-	-	〃 〃	〃	口縁部破片で、簡略した蓮弁文
65	〃 〃	土製品 土錘	(2.5)	1.2	1.1	(2.1)	浅黄橙色	やや不良	両端を欠損し、調整は不明、孔径0.5cm
66	〃 〃	〃 〃	(2.9)	1.5	(1.4)	(4.2)	にぶい橙色	〃	一部を欠損し、調整は不明、孔径0.6cm
67	〃 〃	〃 〃	(3.0)	1.2	1.1	(3.2)	淡橙色	〃	一部を欠損し、調整は不明、孔径0.3cm
68	〃 〃	〃 〃	3.1	1.9	1.7	8.3	浅黄橙色	良好	ほぼ完存し、調整は不明、孔径0.5cm
69	〃 〃	〃 〃	3.8	2.1	2.0	(12.0)	灰白色	〃	一部を欠損し、調整は不明、孔径0.7cm
70	〃 〃	〃 〃	4.2	1.3	1.2	5.4	〃	やや不良	ほぼ完存し、調整は不明、孔径0.2cm
71	〃 〃	〃 〃	4.3	1.7	1.8	(10.0)	橙色	〃	一部を欠損し、調整は不明、孔径0.6cm
72	〃 〃	〃 〃	4.3	1.7	1.7	8.6	浅黄橙色	〃	完存し、調整は不明、孔径0.5cm
73	〃 〃	〃 〃	(4.4)	2.0	1.9	(13.3)	にぶい橙色	〃	一部を欠損し、調整は不明、孔径0.4cm
74	〃 〃	〃 〃	4.5	1.7	1.5	(8.4)	橙色	〃	一部を欠損し、調整は不明、孔径0.5cm
75	〃 〃	〃 〃	5.1	1.8	1.5	(12.4)	黒褐色	良好	一部を欠損し、調整は不明、孔径0.8cm

遺物観察表4

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
76	Ⅲ区 第Ⅴ層	土製品 土錘	5.7	2.5	2.3	29.9	橙色	やや不良	ほぼ完存し、調整は不明、孔径0.6cm
77	〃 第Ⅴ層	瓦 平瓦	(7.7)	(7.4)	1.7	-	灰黄褐色 暗褐色	良好	凹面には布目圧痕、凸面には縄目状のタタキ目、側面にヘラ削り
78	〃 〃	〃 〃	(7.8)	(7.2)	1.6	-	橙色 にぶい赤褐色	やや不良	凹面には布目圧痕、凸面には縄目状のタタキ目、側面にヘラ削り
79	〃 〃	〃 〃	(12.1)	(9.5)	1.8	-	にぶい橙色 橙色	〃	両端を欠損し、凹面には布目圧痕、凸面には縄目状のタタキ目
80	〃 〃	〃 〃	(6.4)	(10.3)	1.8	-	にぶい橙色 にぶい赤褐色	〃	凹面には布目圧痕、凸面には縄目状のタタキ目、側面にヘラ削り
81	〃 〃	〃 〃	(10.4)	(10.2)	1.8	-	にぶい褐色 にぶい黄褐色	良好	凹面には布目圧痕、凸面には縄目状のタタキ目、側面にヘラ削り
82	〃 〃	〃 〃	(9.1)	(13.0)	2.1	-	にぶい赤褐色 にぶい橙色	やや不良	凹面には布目圧痕、凸面には縄目状のタタキ目、側面にヘラ削り
83	Ⅳ区 第Ⅳ層	土師器 ミニチュア	7.2	4.1	-	4.7	にぶい橙色 〃	〃	調整は不明
84	〃 〃	須恵器 杯蓋	-	(1.5)	-	-	灰色 〃	良好	つまみと天井部の一部が残存し、調整は不明瞭、一部に自然釉、つまみ径2.2cm、つまみ高0.7cm
85	〃 〃	〃 〃	17.9	(1.6)	-	-	にぶい黄褐色 灰色	〃	口縁部破片で、器面には回転ナデ調整
86	〃 〃	〃 杯	-	(1.6)	-	5.8	灰色 灰黄褐色	〃	器面には回転ナデ調整、底部切り離し痕はナデ消す
87	〃 〃	〃 皿	16.3	2.8	-	12.0	灰色 〃	〃	口縁部破片で、器面には回転ナデ調整、底部切り離し痕はナデ消す
88	〃 〃	〃 長頸壺	9.4	23.4	16.9	9.8	〃 〃	〃	口縁部と胴部内外面には回転ナデ調整、胴部外面下端には回転ヘラ削り
89	〃 〃	〃 広口壺	14.6	(5.0)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部破片で、口縁部内外面に回転ナデ調整、胴部外面にタタキ調整
90	〃 〃	〃 甕	24.8	(4.2)	-	-	〃 〃	〃	口縁部破片で、内外面とも回転ナデ調整
91	〃 〃	〃 円面硯	-	(3.1)	-	-	灰色 〃	〃	硯部と脚部の一部が残存、矩形の透かし
92	〃 〃	二彩陶器 壺	-	(4.3)	-	-	浅黄褐色 オリーブ色	やや不良	胴部破片で、内面は露胎
93	〃 〃	瓦 平瓦	(13.5)	(8.0)	3.6	-	灰黄色 〃	〃	両端を欠損し、凸面には縄目状のタタキ目
94	〃 〃	土師質土器 杯	-	(2.7)	-	8.0	灰白色 〃	〃	口縁部を欠損し、体部内面には回転ナデ調整、底部切り離しは回転糸切り
95	〃 〃	〃 椀	-	(1.9)	-	5.4	にぶい褐色 にぶい橙色	不良	口縁部を欠損し、調整は不明
96	〃 〃	〃 〃	-	(2.3)	-	5.5	にぶい橙色 〃	良好	口縁部を欠損し、調整は不明
97	〃 〃	〃 〃	-	(2.0)	-	5.7	にぶい黄褐色 橙色	やや不良	口縁部を欠損し、調整は不明
98	〃 〃	〃 小皿	9.8	1.4	-	6.6	にぶい黄褐色 〃	〃	底部の大部分を欠損し、調整は不明
99	〃 〃	土製品 土錘	(4.2)	1.8	1.7	(9.4)	浅黄色	〃	一部を欠損し、調整は不明、孔径0.5cm
100	〃 〃	〃 〃	4.2	1.9	1.8	(13.3)	灰白色	良好	一部を欠損し、調整は不明、孔径0.6cm

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
101	Ⅳ区 第Ⅳ層	土製品 土錘	5.6	3.9	3.7	76.4	にぶい黄橙色	やや不良	ほぼ完存し、調整は不明、孔径1.5cm
102	〃 第Ⅴ層	弥生土器 壺	-	(14.2)	-	-	灰褐色 にぶい黄橙色	〃	胴部下半が残存、内面にはナデ調整、外面にはタタキ
103	〃 〃	土師器 高杯	-	(4.5)	-	-	灰黄色 灰黄褐色	〃	脚端部を欠損し、調整は不明
104	〃 〃	〃 〃	-	(5.3)	-	-	灰白色 〃	〃	脚柱部のみ残存し、調整は不明
105	〃 〃	〃 〃	-	(7.2)	-	-	橙色 〃	不良	脚柱部のみ残存し、調整は不明
106	〃 〃	〃 鉢	-	(4.0)	-	10.6	にぶい黄橙色 〃	やや不良	体部内面にはヨコナデ調整
107	〃 〃	〃 羽釜	24.6	(6.0)	-	-	灰褐色 にぶい黄橙色	良好	口縁部破片で、調整は不明
108	〃 〃	須恵器 壺蓋	13.9	4.1	-	-	灰色 黄灰色	〃	内外面とも回転ナデ調整、つまみ径2.4cm、つまみ高1.5cm
109	〃 〃	〃 杯蓋	17.2	2.0	-	-	灰色 〃	〃	内外面とも回転ナデ調整、つまみ径2.4cm、つまみ高0.5cm
110	〃 〃	〃 〃	17.6	2.2	-	-	灰白色 オリーブ灰色	〃	内外面とも回転ナデ調整、つまみ径2.6cm、つまみ高0.8cm
111	〃 〃	〃 〃	-	(1.6)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部を欠損し、調整は不明、つまみ径1.8cm、つまみ高0.6cm
112	〃 〃	〃 杯	10.6	3.9	-	6.9	〃 〃	〃	輪高台で、器面には回転ナデ調整、底部切り離しは回転ヘラ切り
113	〃 〃	〃 〃	16.2	6.9	-	9.9	〃 〃	〃	輪高台で、器面には回転ナデ調整、底部切り離しは回転ヘラ切り
114	〃 〃	〃 〃	-	(3.7)	-	8.0	褐灰色 〃	〃	輪高台で、体部内外面には回転ナデ調整、底部内面にはナデ調整
115	〃 〃	〃 〃	-	(3.6)	-	8.2	黄灰色 褐灰色	〃	輪高台で、体部内外面には回転ナデ調整、底部内面にはナデ調整
116	〃 〃	〃 〃	-	(1.8)	-	9.2	灰色 青灰色	〃	輪高台で、器面には回転ナデ調整、底部切り離し痕をナデ消す
117	〃 〃	〃 〃	-	(2.8)	-	9.6	褐灰色 灰色	〃	輪高台で、器面には回転ナデ調整、底部切り離し痕をナデ消す
118	〃 〃	〃 〃	-	(3.0)	-	9.8	にぶい黄橙色 灰黄褐色	やや不良	輪高台で、器面には回転ナデ調整、底部切り離し痕をナデ消す
119	〃 〃	〃 〃	13.4	4.0	-	7.0	灰色 〃	良好	円盤状高台で、器面には回転ナデ調整、外面下端には回転ヘラ削り
120	〃 〃	〃 〃	-	(2.5)	-	7.0	にぶい黄橙色 灰色	〃	円盤状高台で、器面には回転ナデ調整、底部切り離しは回転糸切り
121	〃 〃	〃 高杯	-	(8.2)	-	-	灰色 〃	不良	脚柱部のみ残存し、器面には回転ナデ調整
122	〃 〃	〃 双耳壺	-	(10.2)	-	-	〃 〃	良好	器面には回転ナデ調整、耳部には静止ヘラ削り
123	〃 〃	〃 〃	-	(9.3)	-	-	灰色 にぶい黄褐色	〃	器面には回転ナデ調整、耳部は5カ所面取り
124	〃 〃	〃 壺	16.3	(6.6)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部破片で、器面には回転ナデ調整、自然釉が残る
125	〃 〃	〃 〃	-	(4.0)	-	9.0	灰色 〃	〃	底部破片で、器面には回転ナデ調整、外面下端には回転ヘラ削り、高台内に爪形状圧痕

遺物観察表6

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面		
126	IV区 第V層	須恵器 壺	-	(5.4)	-	10.0	灰白色 〃	良好	器面には回転ナデ調整
127	〃 〃	〃 〃	-	(8.5)	-	10.4	灰色 〃	〃	器面には回転ナデ調整, 外面下端には回転ヘラ削り
128	〃 〃	〃 〃	-	(6.4)	-	11.0	灰白色 〃	〃	器面には回転ナデ調整
129	〃 〃	〃 〃	-	(4.6)	-	13.5	灰色 〃	〃	器面には回転ナデ調整, 底部内外面にはナデ調整
130	〃 〃	〃 〃	-	(4.2)	-	8.8	〃 〃	〃	器面には回転ナデ調整, 底部切り離しは回転糸切り
131	〃 〃	〃 〃	-	(8.1)	-	14.6	黄灰色 灰色	〃	器面には回転ナデ調整, 胴部外面下端には回転ヘラ削り
132	〃 〃	〃 凹面碗	12.6	(2.5)	-	-	灰色 〃	〃	碗部と脚部の一部が残存, 矩形の透かし
133	〃 〃	緑釉陶器 椀	-	(1.6)	-	6.0	にぶい黄橙色 〃	不良	軟質系で, 調整は不明, 一部に緑釉が残る
134	〃 〃	瓦 平瓦	(10.3)	(6.7)	2.2	-	灰黄色 〃	〃	凹面に布目圧痕, 凸面に縄目状のタタキ目, 側面にヘラ削り
135	〃 〃	〃 〃	(8.1)	(8.3)	2.1	-	灰色 灰黄色	やや不良	凹面に布目圧痕, 凸面に縄目状のタタキ目, 側面と端部にヘラ削り
136	〃 〃	〃 〃	(8.0)	(13.8)	2.4	-	にぶい黄橙色 〃	不良	凹面に布目圧痕, 凸面に縄目状のタタキ目, 側面と端部にヘラ削り
137	〃 〃	〃 〃	(9.9)	(16.3)	2.1	-	灰白色 〃	〃	凹面に布目圧痕, 凸面に縄目状のタタキ目, 端部にヘラ削り
138	〃 〃	土質土器 椀	-	(2.1)	-	5.3	灰黄色 にぶい黄橙色	やや不良	底部破片で, 断面台形状の高台を有する, 調整は不明
139	〃 〃	〃 〃	-	(2.1)	-	6.0	にぶい黄橙色 〃	〃	底部破片で, 調整は不明, 内面に煤が付着
140	〃 〃	〃 〃	-	(1.9)	-	6.6	にぶい橙色 にぶい褐色	〃	底部破片で, 調整は不明
141	〃 〃	〃 〃	-	(3.3)	-	6.7	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	底部破片で, 調整は不明
142	〃 〃	〃 〃	-	(1.8)	-	6.8	灰白色 〃	良好	底部破片で, 体部外面下端に回転ヘラ削り, 調整は不明瞭
143	〃 〃	〃 〃	-	(2.0)	-	7.4	にぶい黄橙色 〃	〃	底部破片で, 体部外面下端に回転ヘラ削り, 調整は不明瞭
144	〃 〃	〃 〃	-	(1.3)	-	7.6	灰白色 〃	やや不良	底部破片で, 調整は不明
145	〃 〃	瓦質土器 三足鍋	(8.1)	(4.3)	2.7	-	暗灰色	良好	脚の上半部のみ残存, 調整は不明
146	〃 〃	備前焼 播鉢	26.8	(7.2)	-	-	褐灰色 〃	〃	口縁部破片で, 器面には回転ナデ調整
147	〃 〃	土製品 土錘	3.6	1.7	1.7	8.9	灰黄色	やや不良	ほぼ完存し, 調整は不明, 孔径0.6cm
148	〃 〃	〃 〃	(4.2)	1.9	1.6	(10.9)	にぶい橙色	〃	片側を欠損し, 調整は不明, 孔径0.6cm
149	〃 〃	〃 〃	5.3	2.1	2.0	24.0	灰黄褐色	良好	ほぼ完存し, 調整は不明, 孔径0.5cm
150	〃 〃	〃 〃	5.5	2.1	2.1	21.7	〃	〃	ほぼ完存し, 調整は不明, 孔径0.6cm

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調		焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面			
151	Ⅳ区 第Ⅴ層	土製品 土錘	5.8	2.0	1.8	17.5	灰黄色	やや不良	ほぼ完存し、調整は不明、孔径0.6cm	
152	〃 〃	〃 〃	6.1	2.1	2.1	(25.7)	〃	〃	端部を欠損し、調整は不明、孔径0.6cm	
153	〃 〃	〃 〃	7.2	2.7	2.4	48.5	にぶい褐色	良好	ほぼ完存し、調整は不明、孔径0.8cm	
154	〃 〃	〃 〃	(6.7)	(4.4)	(3.7)	(69.8)	にぶい黄橙色	やや不良	片側を欠損し、調整は不明、孔径1.7cm	
155	〃 〃	〃 〃	7.1	5.3	(4.7)	(128.7)	灰黄褐色	良好	器面の一部を欠損し、調整は不明、孔径1.9cm	
156	〃 〃	〃 〃	(8.5)	5.0	4.4	(143.7)	灰白色	〃	器面の一部を欠損し、調整は不明、孔径1.4cm	
157	〃 〃	〃 〃	4.8	2.3	2.5	26.1	にぶい黄橙色	やや不良	外周に溝を有し、ほぼ完存する、調整は不明	
158	〃 〃	〃 〃	6.3	3.5	3.0	69.8	灰黄色	〃	外周に溝を有し、ほぼ完存する、調整は不明	
159	〃 〃	〃 〃	6.7	5.6	5.1	140.6	灰白色	〃	外周に溝を有し、ほぼ完存する、調整は不明	
160	〃 〃	〃 〃	6.8	4.9	4.4	124.0	黄灰色	〃	外周に溝を有し、ほぼ完存する、調整は不明	
161	〃 〃	〃 〃	7.7	3.9	3.7	88.7	にぶい褐色	良好	外周に溝を有し、ほぼ完存する、調整は不明	
162	〃 〃	石製品 砥石	(11.4)	(7.4)	2.5	(323.6)	-	-	側面と片面に使用痕、石材は砂岩	
163	〃 〃	ガラス製品 ガラス玉	0.7	0.8	0.5	0.3	深い青色	-	完存し、気泡を多く含む	
164	〃 第Ⅵ層	土師器 羽釜	23.0	(5.5)	-	-	黒褐色 にぶい橙色	良好	口縁部破片で、内面と口縁部外面にはヨコナデ調整、胴部外面にはハケ調整	
165	〃 〃	須恵器 杯蓋	11.4	2.6	-	-	灰色 灰白色	〃	口縁部内外面に回転ナデ調整、天井部内面に粗いナデ調整、つまみ径1.8cm、つまみ高1.0cm	
166	〃 〃	〃 杯	16.5	5.9	-	11.4	黄灰色 灰黄色	やや不良	器面には回転ナデ調整で、高台内側に爪形状圧痕	
167	〃 〃	〃 〃	-	(2.0)	-	7.8	黄灰色 灰色	良好	底部破片で、体部内外面に回転ナデ調整、底部内面にナデ調整	
168	〃 〃	〃 〃	-	(3.1)	-	10.4	黄灰色 灰黄色	〃	底部破片で、体部内外面に回転ナデ調整、底部内面にナデ調整	
169	〃 〃	〃 皿	16.1	2.2	-	12.3	灰色 〃	〃	底部の大部分を欠損し、器面には回転ナデ調整	
170	〃 〃	〃 高杯	24.9	(3.8)	-	-	黄灰色 灰色	〃	脚の大部分を欠損し、杯体部外面に回転ヘラ削り、口縁部内外面には回転ナデ調整、矩形の透かしが4箇所	
171	〃 〃	〃 広口壺	12.6	(5.0)	-	-	灰色 灰黄色	不良	口縁部破片で、調整は不明、焼成が悪く、瓦質状を呈する	
172	〃 〃	土師質土器 椀	-	(2.8)	-	7.4	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	底部破片で、調整は不明	
173	〃 〃	〃 小皿	9.1	1.5	-	7.0	にぶい黄橙色 〃	〃	ほぼ完存し、調整は不明	
174	〃 〃	青磁 碗	-	(2.2)	-	4.8	灰オリーブ色 〃	良好	底部破片で、外面には蓮弁文	
175	〃 〃	土製品 土錘	(3.3)	1.6	1.5	(7.2)	にぶい橙色	やや不良	片側を欠損し、調整は不明、孔径0.7cm	

遺物観察表8

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調		焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面			
176	IV区 第VI層	土製品 土錘	(4.5)	2.5	2.4	(21.2)	にぶい黄橙色		やや不良	片側を欠損し、調整は不明、孔径0.6cm
177	〃 〃	〃 〃	4.8	1.7	1.5	9.8	灰白色		〃	ほぼ完存し、調整は不明、孔径0.6cm
178	〃 〃	〃 〃	4.8	1.9	1.7	12.0	灰黄色		良好	ほぼ完存し、調整は不明、孔径0.5cm
179	〃 〃	〃 〃	5.5	2.0	1.7	16.0	にぶい黄橙色		〃	ほぼ完存し、調整は不明、孔径0.6cm
180	〃 〃	〃 〃	7.7	4.0	4.0	(95.9)	灰黄色		やや不良	ほぼ完存し、調整は不明、孔径1.6cm
181	〃 〃	〃 〃	7.3	5.8	4.5	(120.3)	にぶい黄橙色		良好	外周に溝を有するもので、一部を欠損、器面には指頭圧痕
182	II区 SR-1	弥生土器 壺	-	(4.5)	-	3.8	浅黄色 にぶい黄橙色		〃	底部破片で、調整は不明
183	〃 〃	〃 鉢	14.6	8.5	-	9.0	明黄褐色 にぶい黄橙色		やや不良	脚付有孔鉢で、調整は不明
184	〃 〃	〃 高杯	-	(8.7)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色		良好	脚柱部のみ残存し、調整は不明、内面にしぼり目
185	〃 SK-1	土師器 椀	12.9	6.5	-	1.6	浅黄橙色 にぶい黄橙色		〃	調整は不明で、外面には煤が付着
186	〃 〃	〃 高杯	14.2	15.4	-	12.2	灰白色 〃		〃	杯部外面にヨコナデ調整、脚柱部内面にナデ調整、脚裾部にハケ調整
187	〃 〃	〃 〃	15.0	13.0	-	10.8	〃 〃		〃	杯部外面にヨコナデ調整、脚柱部内面にナデ調整
188	〃 〃	〃 〃	14.8	15.3	-	12.0	浅黄橙色 〃		〃	脚柱部外面にハケ調整、内面にヨコナデ調整
189	〃 〃	〃 〃	15.6	(6.5)	-	-	灰黄色 〃		やや不良	杯部のみ残存し、外面にヨコナデ調整
190	〃 〃	〃 〃	-	(7.9)	-	12.2	〃 〃		〃	脚部のみ残存し、脚裾部内外面にヨコナデ調整、脚柱部内面にナデ調整
191	〃 SD-1	〃 壺	10.2	14.1	13.3	-	にぶい黄橙色 〃		良好	口辺部外面にヨコナデ調整、胴部外面上半部にタタキとヨコナデ調整、中央部にヘラ削り、下半部にタタキ
192	〃 〃	〃 高杯	-	(3.3)	-	-	橙色 〃		やや不良	杯部破片で、口縁部を欠損、調整は不明
193	〃 SD-2	〃 壺	-	(5.9)	9.2	-	黄灰色 浅黄色		〃	口辺部を欠損し、調整は不明
194	〃 P-1	〃 高杯	-	(7.1)	-	-	灰黄色 灰白色		〃	脚部破片で、脚端部を欠損、調整は不明
195	〃 SU-1	瓦質土器 鍋	19.2	(5.6)	-	-	暗灰黄色 灰色		良好	口縁部内外面と胴部内面にヨコナデ調整、胴部外面にナデ調整、外面に被熱痕
196	III区 ST-1	土師器 高杯	18.2	(4.8)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色		やや不良	杯部のみ残存し、調整は不明
197	〃 〃	〃 〃	23.2	(6.3)	-	-	にぶい橙色 〃		〃	杯部のみ残存し、調整は不明
198	〃 〃	〃 〃	-	(9.0)	-	-	灰白色 〃		良好	杯口縁部と脚裾部を欠損し、調整は不明
199	〃 〃	〃 〃	-	(5.5)	-	-	にぶい褐色 にぶい黄橙色		〃	脚部破片で、調整は不明、内面にしぼり目
200	〃 〃	〃 〃	-	(6.0)	-	-	浅黄橙色 にぶい橙色		やや不良	脚部破片で、調整は不明

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
201	Ⅲ区 ST-1	土師器 高杯	-	(6.2)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	脚部破片で、調整は不明
202	〃 〃	〃 〃	-	(4.5)	-	-	〃 〃	良好	脚部破片で、脚柱部内面にヘラ削り
203	〃 〃	〃 〃	-	(5.4)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄色	〃	脚部破片で、調整は不明
204	〃 〃	鉢	10.3	10.3	10.5	6.4	暗灰色 にぶい橙色	〃	平底を呈し、調整は不明
205	〃 〃	壺	8.5	13.5	12.6	-	にぶい黄橙色 〃	〃	調整は不明
206	〃 〃	〃 〃	15.6	(5.5)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい褐色	やや不良	口辺部のみ残存し、調整は不明、内面には接合痕
207	〃 〃	甕	18.6	(4.6)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良好	口辺部のみ残存し、調整は不明
208	〃 〃	須恵器 甕	-	(7.1)	9.8	-	褐灰色 灰色	〃	口辺部と底部を欠損し、円孔は残存していない、胴下半部には回転ヘラ削り、他の部位には回転ナデ調整
209	〃 〃	石製品 叩石	11.2	8.1	6.2	863.0	-	-	両面と3箇所の側面に使用痕、石材は砂岩
210	〃 ST-3	土師器 高杯	-	(6.5)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	やや不良	杯部のみ残存し、口縁端部を欠損、調整は不明
211	〃 〃	〃 〃	-	(5.1)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良好	脚部のみ残存し、脚裾部を欠損、調整は不明
212	〃 〃	〃 〃	-	(5.1)	-	-	橙色 〃	不良	杯部の一部と脚柱部のみ残存し、調整は不明
213	〃 〃	〃 〃	-	(7.2)	-	-	褐灰色 にぶい橙色	良好	脚柱部のみ残存し、調整は不明
214	〃 ST-4	〃 〃	-	(6.7)	-	9.8	浅黄橙色 〃	やや不良	脚部のみ残存し、調整は不明
215	〃 〃	〃 〃	-	(5.1)	-	10.2	〃 〃	〃	大きく歪み、調整は不明
216	〃 〃	〃 〃	-	(8.0)	-	10.2	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良好	調整は不明
217	〃 〃	〃 〃	-	(6.7)	-	11.1	にぶい橙色 浅黄橙色	やや不良	脚柱部内面にヘラ削りが認められるが、調整は不明瞭
218	〃 〃	〃 〃	-	(6.1)	-	10.9	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	調整は不明瞭だが、外面に指頭圧痕
219	〃 〃	〃 〃	-	(6.4)	-	10.8	明赤褐色 浅黄橙色	良好	脚柱部内面にヘラ削りが認められるが、調整は不明瞭
220	〃 〃	〃 〃	-	(6.3)	-	10.3	灰白色 〃	〃	調整は不明
221	〃 〃	〃 〃	-	(6.8)	-	11.4	褐灰色 橙色	〃	脚裾部外面にヨコナデ調整が認められるが、調整は不明瞭
222	〃 〃	〃 〃	-	(4.7)	-	-	淡橙色 橙色	やや不良	調整は不明瞭だが、内外面に指頭圧痕
223	〃 〃	〃 〃	-	(5.8)	-	8.2	にぶい黄橙色 にぶい褐色	〃	調整は不明瞭だが、内外面に指頭圧痕
224	〃 〃	〃 〃	-	(6.0)	-	-	灰色 にぶい橙色	〃	調整は不明瞭だが、内外面に指頭圧痕と内面にしほり目
225	〃 〃	〃 〃	-	(6.2)	-	-	橙色 浅黄橙色	良好	調整は不明

遺物観察表10

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面		
226	Ⅲ区 ST-4	土師器 高杯	-	(6.2)	-	-	灰白色 〃	やや不良	調整は不明瞭だが、内面にナデ調整
227	〃 〃	〃 〃	-	(5.9)	-	-	浅黄橙色 〃	良好	調整は不明瞭だが、内面にしほり目
228	〃 〃	〃 〃	-	(5.5)	-	-	橙色 灰白色	〃	調整は不明瞭だが、内面にしほり目
229	〃 〃	〃 甕	12.4	16.6	14.7	-	橙色 〃	やや不良	調整は不明瞭だが、胴部上半内面にハケ調整
230	〃 〃	〃 〃	14.2	(5.1)	-	-	にぶい黄橙色 橙色	〃	口辺部から胴部にかけての破片で、調整は不明
231	〃 〃	〃 〃	15.1	(4.8)	-	-	橙色 〃	〃	口辺部から胴部にかけての破片で、調整は不明
232	〃 〃	〃 〃	16.0	(7.3)	-	-	黄灰色 橙色	〃	口辺部から胴部にかけての破片で、調整は不明
233	〃 〃	〃 手づくね	5.0	2.8	-	-	にぶい黄橙色 〃	良好	ほぼ完存し、内外面に指頭圧痕
234	〃 〃	石製品 叩石	(8.2)	8.6	3.4	(3880)	-	-	両面中央部と側面に強い敲打痕、石材は砂岩
235	〃 SK-2	土師器 高杯	-	(4.9)	-	-	灰白色 にぶい橙色	良好	脚部のみ残存し、端部を欠損、調整は不明瞭だが、内外面に指頭圧痕
236	〃 〃	〃 〃	-	(5.9)	-	-	暗緑灰色 にぶい橙色	〃	脚柱部のみ残存し、調整は不明瞭だが、内面に指頭圧痕
237	〃 〃	〃 〃	-	(7.0)	-	-	橙色 にぶい黄橙色	やや不良	脚柱部のみ残存し、調整は不明
238	〃 SB-2	土師質土器 杯	11.4	3.7	-	6.9	灰白色 にぶい橙色	〃	ほぼ完存し、調整は不明、底部切り離しは回転ヘラ切り
239	〃 〃	緑釉陶器 杯	-	(1.4)	-	6.0	灰黄色 〃	良好	底部破片で、調整は不明瞭だが体部外面に回転ヘラ削り、高台外側に緑釉が残る
240	〃 P-1	瓦 平瓦	(15.0)	(16.0)	1.7	-	灰褐色 〃	〃	凹面に布目圧痕、凸面に縄目状のタタキ目、側面にヘラ削り
241	〃 P-2	須恵器 杯	13.1	3.5	-	8.0	灰色 〃	〃	器面には回転ナデ調整、底部切り離しは回転ヘラ切り
242	〃 SB-5	土師質土器 椀	-	(2.3)	-	6.3	浅黄色 〃	やや不良	底部破片で、調整は不明
243	〃 〃	〃 小皿	-	(0.9)	-	5.0	浅黄橙色 〃	〃	底部破片で、調整は不明、底部切り離しは回転糸切り
244	〃 SB-6	土師器 羽釜	25.2	(5.8)	-	-	灰褐色 〃	〃	口辺部は辺で、調整は不明、外面には煤が付着
245	〃 〃	土師質土器 小皿	10.0	2.2	-	6.2	灰白色 〃	〃	ほぼ完存し、調整は不明、底部切り離しは回転ヘラ切り
246	〃 SK-9	〃 杯	13.8	4.6	-	6.1	にぶい橙色 〃	良好	器面には回転ナデ調整、底部切り離しは回転糸切り
247	〃 〃	〃 〃	-	(2.3)	-	5.0	にぶい褐色 にぶい黄橙色	やや不良	底部破片で、調整は不明
248	〃 〃	〃 小皿	6.6	1.5	-	2.5	にぶい橙色 〃	良好	手づくね成形で、内外面ともナデ調整、底部には焼成前に円孔を穿つ
249	〃 SK-14	土製品 土錘	4.4	1.8	1.8	(10.6)	浅黄橙色	やや不良	一部を欠損し、調整は不明、孔径0.6cm
250	〃 P-3	土師質土器 椀	14.5	5.1	-	7.2	灰白色 〃	〃	底部外面端部に輪高台が付き、調整は不明

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調		焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面			
251	Ⅲ区 P-3	土師質土器 小皿	9.1	2.0	-	5.4	灰白色 〃	やや不良	調整は不明	
252	〃 P-4	〃 椀	-	(3.2)	-	6.6	〃 〃	不良	底部破片で、調整は不明	
253	〃 P-5	須恵器 壺	-	(2.4)	-	9.5	〃 〃	良好	底部破片で、胴部内面に回転ナデ調整、外面に回転ヘラ 削り、底部切り離しは回転ヘラ切り	
254	〃 P-6	土師質土器 椀	15.3	5.0	-	-	灰黄色 〃	〃	ほぼ完存し、調整は不明瞭だが、体部外面に回転ナデ調 整、底部内面にナデ調整	
255	〃 〃	〃 〃	-	(1.9)	-	6.7	にぶい黄橙色 にぶい橙色	やや不良	底部破片で、調整は不明瞭だが、体部外面下端に回転ヘ ラ削り	
256	〃 〃	〃 小皿	8.2	2.8	-	4.2	灰白色 〃	良好	ほぼ完存し、調整は不明瞭だが、口辺部内面に回転ナデ 調整	
257	〃 P-7	〃 〃	9.0	1.6	-	6.0	にぶい黄橙色 にぶい橙色	やや不良	ほぼ完存し、調整は不明、底部切り離しは回転糸切り	
258	〃 P-8	〃 〃	8.9	1.8	-	5.0	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	調整は不明、底部切り離しは回転糸切り	
259	Ⅳ区 SK-3	須恵器 壺	-	(2.7)	-	10.0	灰色 〃	良好	底部破片で、器面に回転ナデ調整、底部内面には自然釉	

遺構計測表

遺構計測表1 竪穴建物跡(ST)

遺構番号	平面形態	規模				長軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	床面標高(m)	面積(m ²)		
ST-1	方形	4.40	4.28	4.287～4.384	18.83	N-82°-W	Ⅲ区
ST-2	隅丸方形	2.36		4.386～4.458	-	N-23°-E	〃
ST-3	方形	3.90～4.05		3.868～3.972	-	-	〃
ST-4	〃	3.51	3.39	4.008～4.116	11.90	N-12°-W	〃

遺構計測表2 掘立柱建物跡(SB)

遺構番号	桁行×梁行 (間)	規模	柱間寸法		深さ (cm)	面積 (m ²)	棟方向 (NはGN)	備考
		桁行(m)×梁行(m)	桁(m)	梁(m)				
SB-1	(2)×2	(4.20)×4.05	1.80～2.40	1.95～2.10	10～65	-	N-16°-E	Ⅲ区
SB-2	(1)×2	(1.95)×3.60	1.95	1.65～1.95	8～17	-	N-18°-E	〃
SB-3	2×2	4.95×3.00	2.25～2.70	1.35～1.65	5～45	14.85	N-15°-E	〃
SB-4	(2)×(2)	(2.70)×(2.70)	1.35	1.35	4～57	-	N-36°-E	〃
SB-5	3×2	6.20×4.60	1.80～2.20	2.10～2.40	19～42	28.52	N-35°-E	〃
SB-6	3×2	6.60～6.70×4.40～4.60	2.00～2.40	2.10～2.50	7～47	29.93	N-53°-W	〃

遺構計測表3 土坑(SK)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向(NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-1	隅丸長方形	(2.23)	(0.63)	3～6	N-34°-E	Ⅰ区
SK-2	長方形	1.11	0.23	6	N-32°-E	〃
SK-3	隅丸方形	1.02	0.86	7～12	N-28°-W	〃
SK-4	方形	-	2.22	4～6	N-53°-W	〃
SK-5	〃	3.33	2.71	6～8	N-56°-W	〃
SK-6	〃	-	2.03	3～8	N-56°-W	〃
SK-7	〃	1.42	1.13	8	N-35°-E	〃
SK-1	円形	1.94	1.83	6～12	N-16°-W	Ⅱ区
SK-2	長方形	1.98	0.85	5～7	N-61°-W	〃
SK-1	楕円形	1.18	0.83	6～15	N-73°-E	Ⅲ区
SK-2	不整形	-	1.39	4～9	N-53°-E	〃
SK-3	長方形	2.34	0.52	8～16	N-67°-W	〃
SK-4	〃	1.33	0.31	5～10	N-51°-W	〃
SK-5	楕円形	0.84	0.76	20～22	N-59°-W	〃
SK-6	長方形	3.21	1.32	2～3	N-46°-W	〃
SK-7	〃	1.45	0.98	6～44	N-84°-E	〃
SK-8	〃	0.91	0.69	12～26	N-72°-W	〃
SK-9	不整形	1.74	1.38	13～26	N-21°-E	〃
SK-10	方形	1.21	1.08	4～10	N-29°-W	〃
SK-11	〃	1.18	1.04	4～12	N-54°-E	〃

遺構計測表4～7

遺構計測表4 土坑(SK)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向(NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-12	方形	1.48	0.97	2～4	N-29° - E	Ⅲ区
SK-13	楕円形	1.21	1.05	1～2	N-51° - W	〃
SK-14	長方形	2.15	0.51	2～6	N-54° - E	〃
SK-15	〃	3.23	0.54	8～11	N-73° - E	〃
SK-16	楕円形	1.50	0.85	4～6	N-79° - E	〃
SK-17	円形	1.16	1.11	6～13	N-19° - E	〃
SK-1	方形	1.53	1.17	4～10	N-16° - E	Ⅳ区
SK-2	楕円形	1.92	1.76	2～4	N-46° - E	〃
SK-3	〃	1.52	0.84	4～14	N-33° - W	〃

遺構計測表5 溝跡(SD)

遺構番号	形状	規模			備考
		検出長(m)	幅(m)	深さ(cm)	
SD-1	東西溝	7.90	0.69～1.21	21～39	Ⅱ区
SD-2	南北溝	16.90	0.29～0.61	10～14	〃
SD-3	〃	18.10	0.33～0.49	19～23	〃
SD-1	東西溝	3.10	0.36～0.40	2～6	Ⅲ区
SD-2	〃	4.80	0.23～0.35	2～5	〃
SD-3	〃	3.80	0.39～0.46	2～7	〃
SD-4	南北溝	5.70	0.24～0.42	2～4	〃
SD-5	〃	14.30	0.66～0.71	7～16	〃
SD-6	〃	3.20	0.34～0.48	3～6	〃
SD-7	東西溝	1.40	0.32～0.36	2～5	〃
SD-8	〃	1.60	0.18	2～4	〃
SD-1	南北溝	4.30	0.52～0.83	13～23	Ⅳ区

遺構計測表6 畝状遺構(SU)

遺構番号	畝跡数(本)	規模				深さ(cm)	主軸方向(NはGN)	備考
		最大長(m)	畝間間隔(m)	畝幅(m)	幅(m)			
SU-1	2	16.60	0.60～0.70	0.20～0.50	0.19～0.36	4～21	N-44° - W	Ⅱ区

遺構計測表7 自然流路(SR)

遺構番号	形状	規模			備考
		検出長(m)	幅(m)	深さ(cm)	
SR-1	南北流路	6.80	3.21～3.42	92～111	Ⅰ区
SR-1	〃	21.60	4.92～5.67	68～95	Ⅱ区

圖 版

I 区





調査前全景(南より)



東壁セクション(南西より)

図版2



東壁セクション(西より)



遺構検出状態(南より)



SR-1バンクセクション(南より)



SK-1バンクセクション(南より)

図版4



SK-3バンクセクション(南より)



遺構完掘状態(南より)

Ⅱ 区





調査前全景(南西より)



北壁セクション(南より)

図版6



遺構検出状態(南西より)



遺構完掘状態(南西より)



SR - 1 検出状態 (北より)



SR - 1 完掘状態 (南西より)

図版8



SR - 1バンクセクション(南より)



SR - 1弥生土器(183)出土状態



SK - 1土師器(185・187～190)出土状態



SK - 1土師器(186)出土状態



SD - 1バンクセクション(南西より)



SD - 1土師器(191)出土状態



SD - 2・3バンクセクション(南より)



SD - 2土師器(193)出土状態

Ⅲ 区





調査前全景(南西より)



Ⅲ-S区 北壁セクション(南より)

図版10



Ⅲ-S区 遺構検出状態(東より)



Ⅲ-S区 遺構完掘状態(東より)



Ⅲ-N区 遺構検出状態(東より)



Ⅲ-N区 遺構完掘状態(東より)

図版12



ST-1 検出状態 (西より)



ST-1 完掘状態 (西より)



ST-1 遺物出土状態 (南より)



ST-2 完掘状態 (東より)



ST-3 検出状態 (北より)



ST-3 完掘状態 (北より)



ST-4 検出状態 (西より)



ST-4 遺物出土状態 (西より)



ST-4完掘状態(西より)



SB-1・2検出状態(西より)



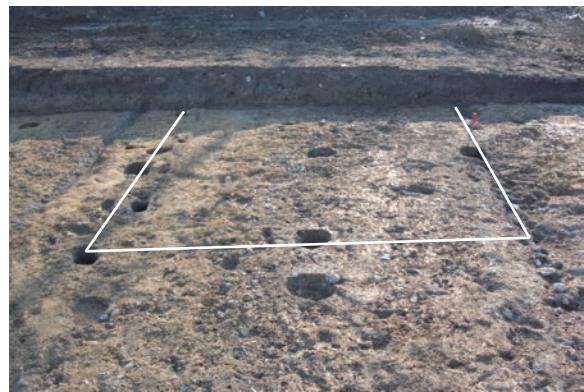
SB-1完掘状態(南より)



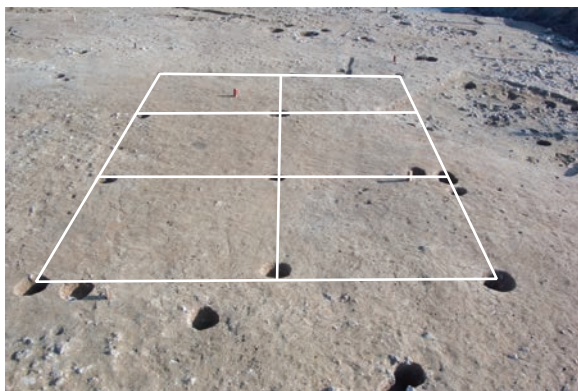
SB-3検出状態(西より)



SB-3完掘状態(南より)



SB-5完掘状態(北より)



SB-6完掘状態(西より)



SK-9遺物出土状態(西より)

図版14



ST-1バンクセクション(北西より)



ST-1土師器(196)出土状態



ST-1土師器(197)出土状態



ST-1土師器(204)出土状態



ST-1土師器(205)出土状態



ST-1土師器(206)出土状態



ST-1石製品(209)出土状態



ST-3バンクセクション(西より)



ST-3 土師器 (210) 出土状態



ST-4 バンクセクション (北西より)



ST-4 土師器 (215・219) 出土状態



ST-4 土師器 (216・224) 出土状態



ST-4 土師器 (229) 出土状態



SB-4 土師質土器 (238) 出土状態



SB-5 土師質土器 (242) 出土状態



SB-6 土師質土器 (245) 出土状態



SK-9土師質土器(246)出土状態



SK-9土師質土器(248)出土状態



SK-17バンクセクション(西より)



SD-1バンクセクション(南より)



P-4土師質土器(252)出土状態



P-6土師質土器(254)出土状態



P-6土師質土器(256)出土状態



P-7土師質土器(257)出土状態

IV 区





調査前全景(東より)



北壁セクション(南より)



IV-W区 遺構検出状態(北より)



IV-W区 遺構完掘状態(北より)



IV-E区 遺構検出状態(西より)



IV-E区 遺構完掘状態(西より)



第V層 須恵器 (109) 出土状態



第V層 須恵器 (121) 出土状態



第V層 須恵器 (123) 出土状態



第V層 須恵器 (124) 出土状態



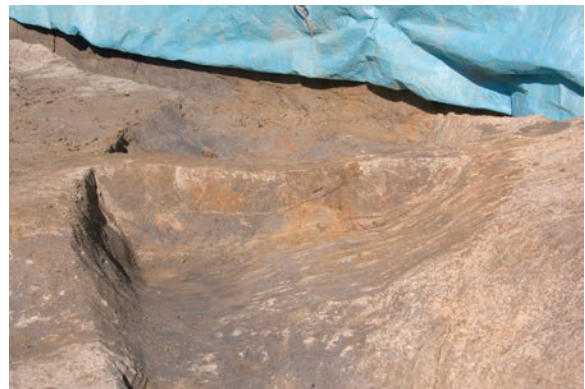
第V層 土製品 (156) 出土状態



第VI層 土師質土器 (172) 出土状態



SK-1バンクセクション(南より)



SD-1バンクセクション(南より)

出土遺物



須恵器(杯)



緑釉陶器(杯)



須恵器(長頸壺)



土師器(甕)



土師器(甕), 須恵器(高杯・転用硯), 土師質土器(鍋), 緑釉陶器(皿), 青磁(碗)



土師器(高杯), 須恵器(高杯・転用硯), 瓦(平瓦)



弥生土器(鉢), 土師器(高杯・碗)



土師器(壺・鉢・高杯), 瓦質土器(鍋)



土師器(高杯)



土師器(高杯)



土師器(高杯・ミニチュア), 須恵器(杯・壺)

图版30



土師器(壺·高杯), 須惠器(壺), 土師質土器(杯·碗)



須恵器(杯蓋・杯・皿), 土師質土器(杯・椀), 近世陶器(碗)

図版32



須恵器(杯蓋・杯・壺蓋・壺), 土師質土器(碗)



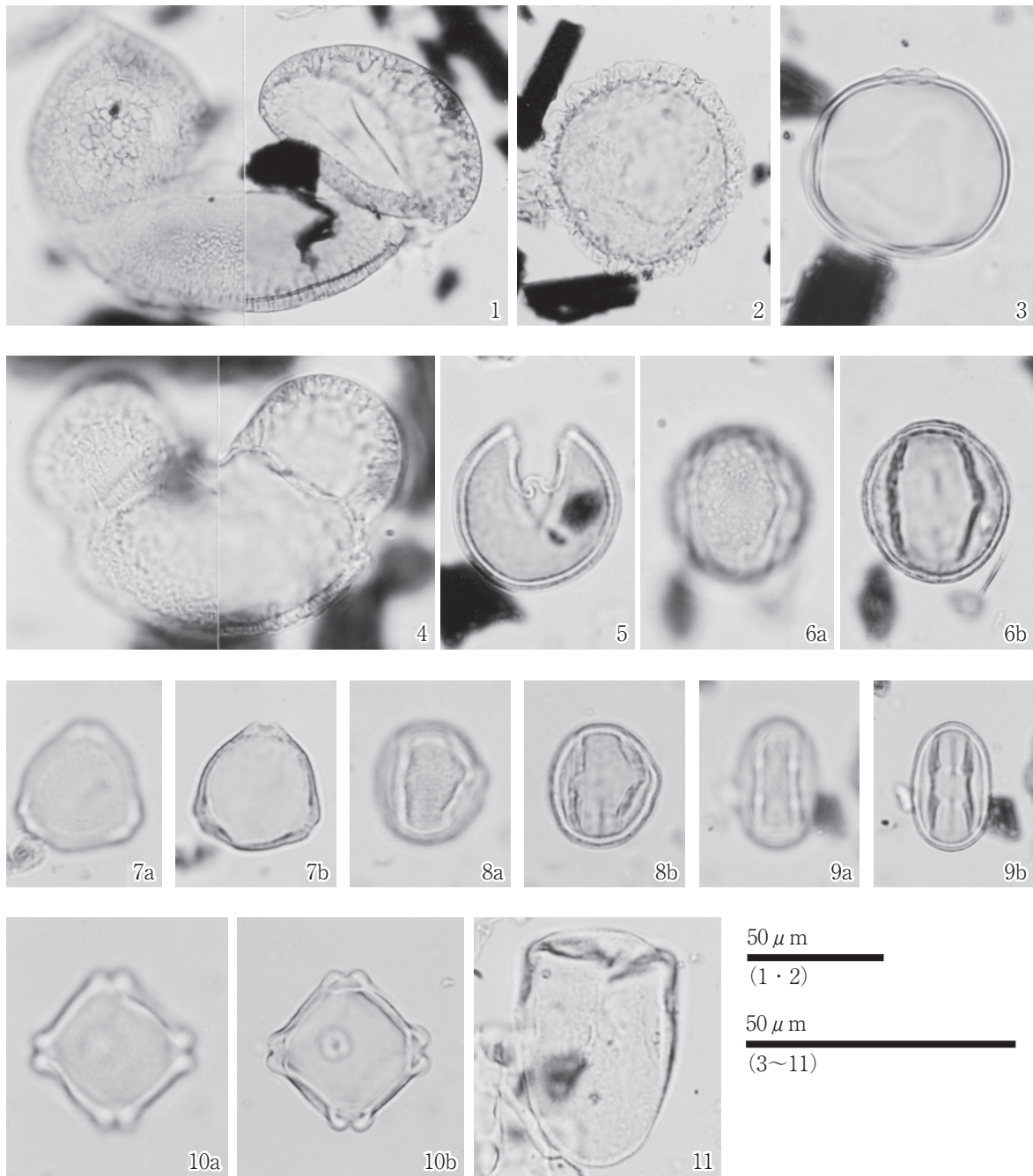
土師器(高杯), 須惠器(杯蓋·杯·皿·高杯), 土師質土器(碗·小皿), 青磁(碗)

图版34



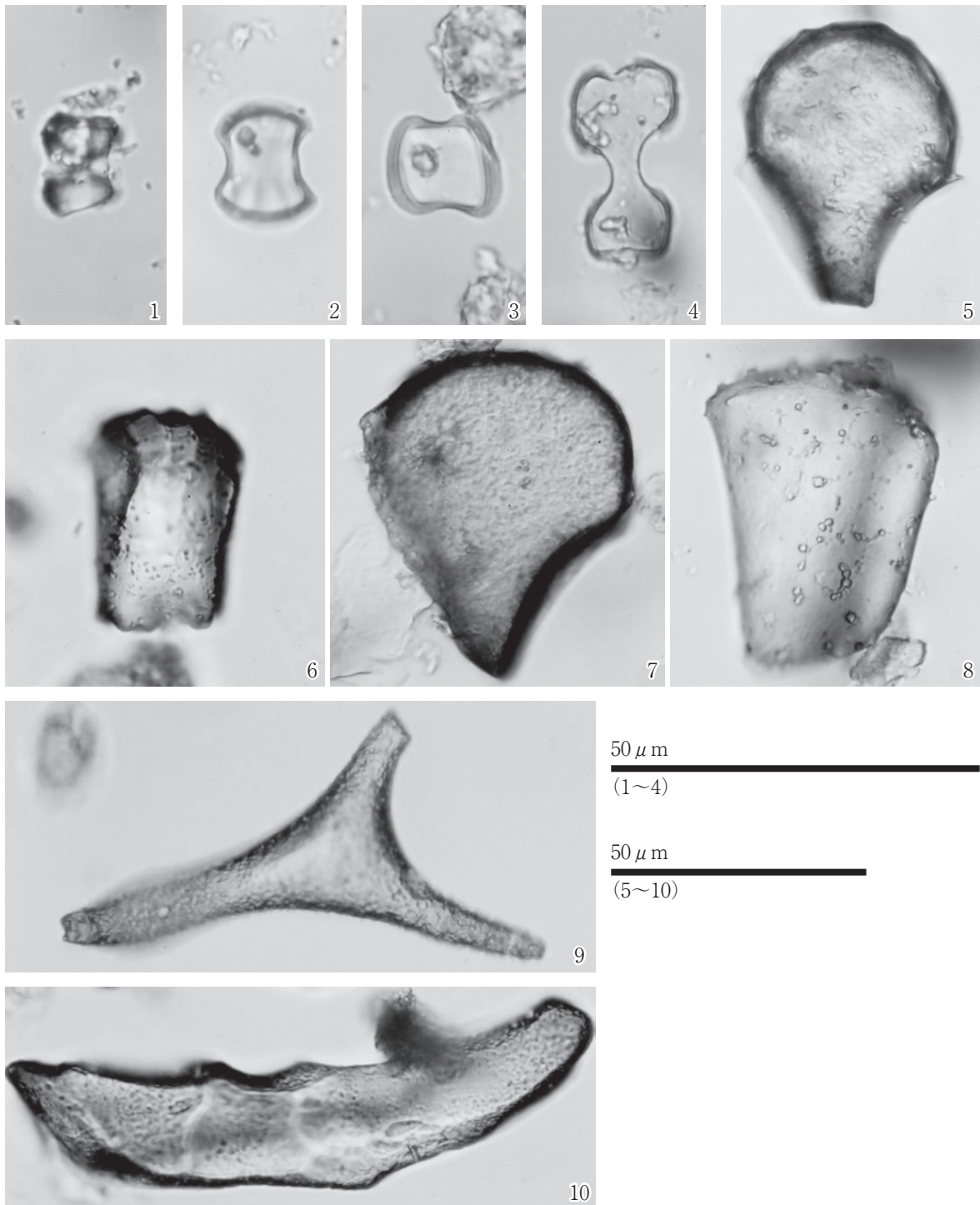
土師質土器(碗・小皿)

自然科学分析



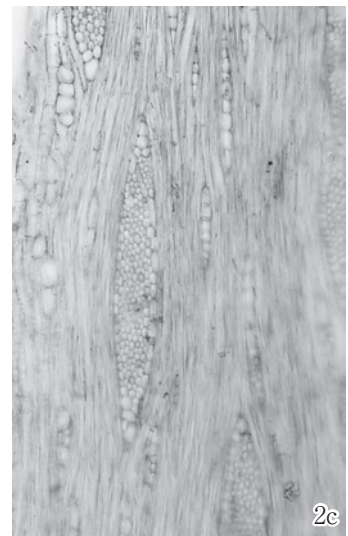
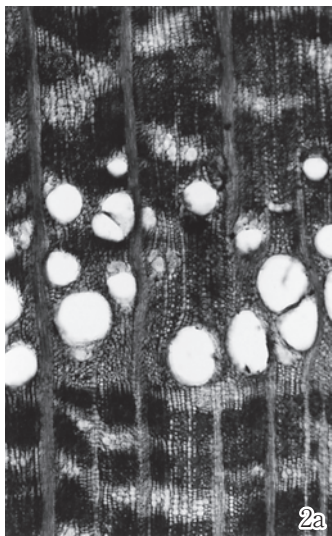
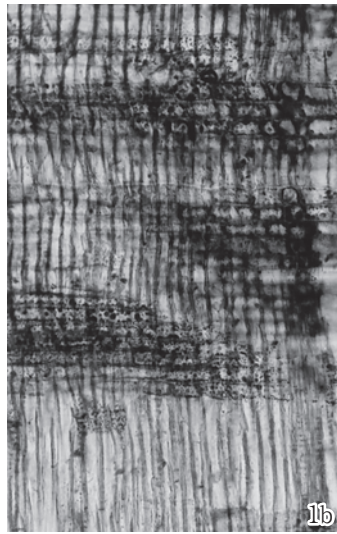
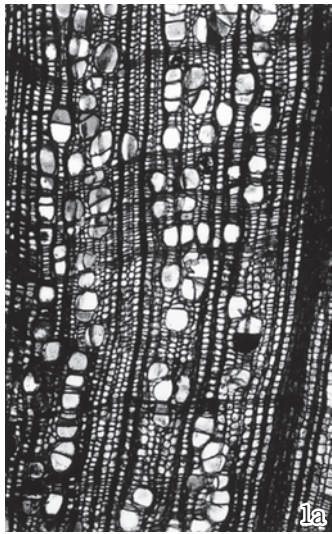
- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1. モミ属(試料番号 4-2) | 2. ツガ属(試料番号 4-2) |
| 3. イネ科(試料番号 4-2) | 4. マツ属(試料番号 4-2) |
| 5. スギ属(試料番号 4-2) | 6. コナラ属コナラ亜属(試料番号 4-2) |
| 7. ヤマモモ属(試料番号 4-2) | 8. アカガシ亜属(試料番号 4-2) |
| 9. シイノキ属(試料番号 4-2) | 10. ハンノキ属(試料番号 4-2) |
| 11. カヤツリグサ科(試料番号 4-2) | |

花粉化石



- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(試料番号 4-2) | 2. ネザサ節短細胞珪酸体(試料番号 4-1) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号 4-2) | 4. ススキ属短細胞珪酸体(試料番号 4-3) |
| 5. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号 4-2) | 6. ネザサ節機動細胞珪酸体(試料番号 4-1) |
| 7. ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号 4-2) | 8. ウシクサ族機動細胞珪酸体(試料番号 4-2) |
| 9. 樹木起源珪酸体第Ⅲグループ(試料番号 3-3) | 10. 樹木起源珪酸体第Ⅳグループ(試料番号 4-1) |

植物珪酸体



1. エノキ属 (SR-1; No.3)
2. ハンノキ属ハンノキ亜属 (SR-1; 埋没林)
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

— 200 μ m : a
— 200 μ m : b,c

報告書抄録

ふりがな		つぼいいせき						
書名		坪井遺跡						
副書名		南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ						
シリーズ名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第132集						
編著者名		下村裕, パリノ・サーヴェイ株式会社						
編集機関		公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター						
所在地		高知県南国市篠原1437-1						
発行年月日		2012年12月21日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つぼいいせき 坪井遺跡	〒781-5601 高知県香南市 夜須町坪井	39211	210039	33° 32' 33"	133° 45' 28"	2006.10.20 ～ 2007.1.31	2,350㎡	一般国道55号自動車専用道路建設工事
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
坪井遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世	竪穴建物跡 4軒 掘立柱建物跡 6棟 土坑 29基 溝跡 12条 畝状遺構 1群 自然流路 1条	弥生土器 土師器 須恵器 二彩陶器 緑釉陶器 土師質土器 瓦質土器 青磁 近世陶磁器 土製品 石製品 ガラス製品	古代の掘立柱建物跡が4棟確認されており、対岸に所在する口檜ヶ谷遺跡と同様官衙関連の施設が存在していた可能性が考えられる。			
要約	坪井遺跡は夜須川右岸の氾濫原上に存在する微高地と北側から派生した丘陵裾部に立地しており、弥生時代ではⅠ・Ⅱ区で自然流路が確認されている。その他に当該期の遺構は検出されていないが、遺物包含層からは当該期の遺物が出土しており、本遺跡西側の丘陵部に集落が存在している可能性が考えられる。古墳時代では方形の竪穴建物跡が3軒、隅丸方形の竪穴建物跡が1軒確認されており、当該期の集落が展開していたことが窺える。これら当該期の遺構は丘陵裾部の緩斜面上で多く確認されているが、後世の削平を受けており、遺存状態はあまり良くなかった。古代では隅丸方形の掘方を持つ掘立柱建物跡が4棟確認されている。対岸の丘陵部に所在する口檜ヶ谷遺跡でも当該期の掘立柱建物跡が3棟確認されており、当該期の本地域を考えると貴重な資料となった。中世では掘立柱建物跡が2棟検出されており、当該期の集落が展開していたと考えられるが、古墳時代・古代と同様遺存状態はあまり良くなかった。							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第132集

坪井遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ

(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ)

2012年12月21日

発行 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社

